

334. 7-D81ウ



1200500738315

334.7  
D81



始

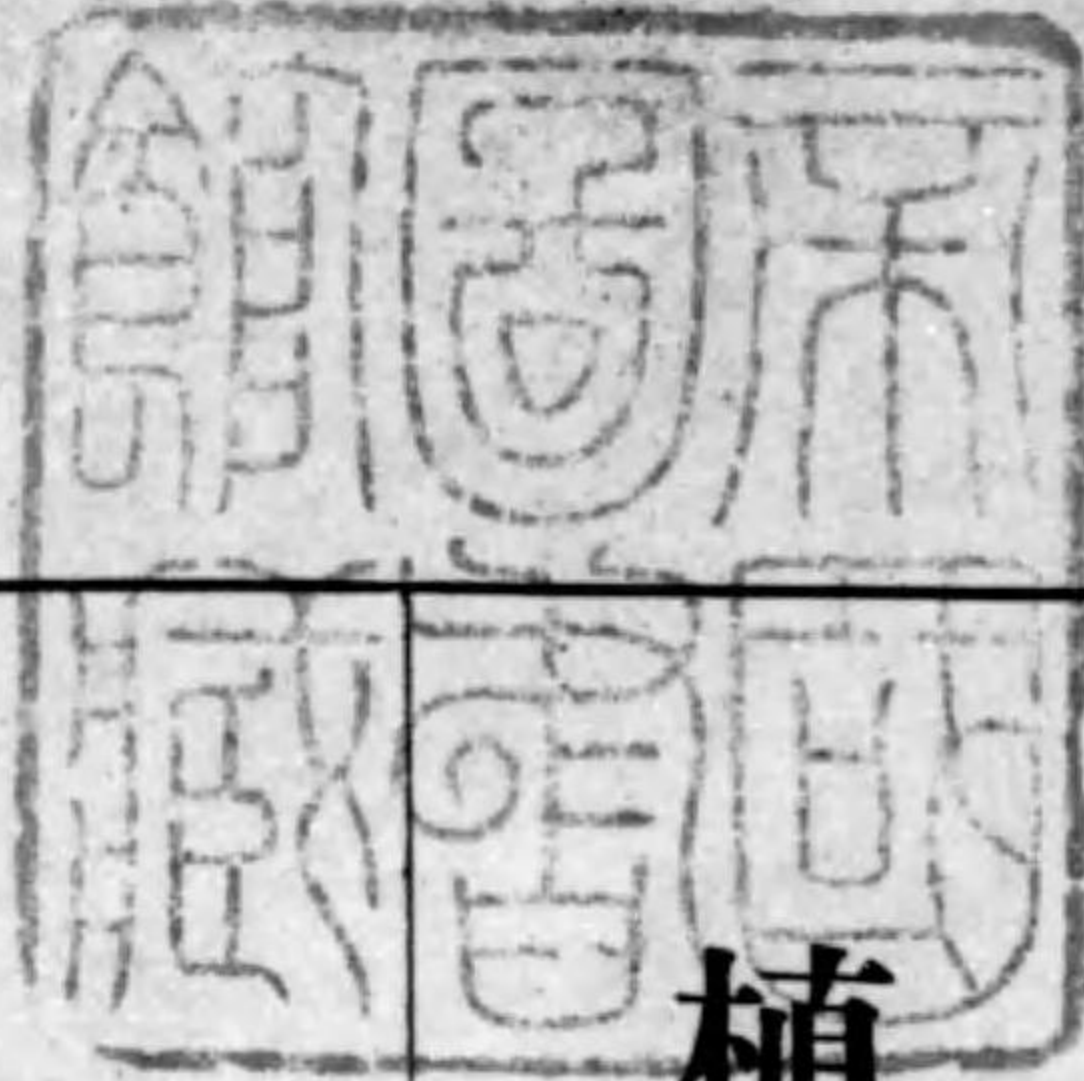




483



339.7  
D81



百々巳之助著

植民專制史論

株式會社  
科學社  
版



1.70.  
104



## 自序

植民地が近世國家の興隆に異常な貢獻をなし、従つて植民地に對する近世國家の植民地政略の方式が時間空間を越えて搾取的であつた事實は明確である。

然しその植民專制の内容を時代的に検討すれば概ね三つの段階を経てゐる事が判る。即ち

(1) その初期に於ては文字通り掠奪的搾取的であつた。

(2) 之れに亞ぐ時期は所謂マーカンティリズムに基づく商業資本主義的市場獨占的乃至輸出貿易振興による合理的搾取時代であつた。

(3) 然るに十九世紀末葉に至るや之等諸國家は植民地に於ける市場獲得、貿易獨占の優越的地位が新興國家により脅威侵害さるゝに至つた。

之等舊勢力國家が新勢力國の侵略の手を爰除したものが第一次世界大戰とすれば、此の大戦後とて必しも之れら舊勢力國家の地位は安固なものではなく、世界經濟の恐慌は更



に此の關係を複雑化した。即ち「持てる國」たる舊勢力國はその地盤擁護に致々とし、「持たざる國」たる新勢力國はその割込奪還運動に營々として狂奔し、かくて富める者の描けるヴェルサイユ體制による「世界永遠の平和」の夢は破るゝに至つた。

畢竟此の最後の段階は經濟的に市場獨占と云ふ形態を整へ、有り餘る金融資本の植民地輸出によつて利潤を増大し、他方では原料資源の獲得を企圖したものである。この時代に入ると諸國家の政治は經濟的事象に先行し、帝國主義に基づく植民地獲得の闘争は熾ろとなり、今次歐洲大戰の遠因を深めて行つた。だが近世史に於て最も個性的にして且つ普遍的な形態を創成した國家は大英植民地帝國である。「オリエント」の勃興によつて中世史に於ける歐羅巴と亞細亞との交通を目指す新道が開拓されんとした中世より近世への世界史的變革期に、自身、近世的世界主體たらしめる數個の國家群が大西洋岸に出現した。

歐羅巴に於ける世界文化の潮流がバルカン半島、伊太利半島よりイベリヤ半島を迂廻して大西洋に出づる頃、近世ルネッサンス都市を中心とする西ヨーロッパ諸國に於ける近世史特有の闘争が血潮と砲聲の中に展開されて行つた。この東洋への「黄金」の道を拓り開き、東

洋と西洋とを一箇の統一世界たらしめんとする近世的主體の争覇こそは、實に十六世紀より十八世紀に至るまる二世紀間、即ちイギリスのエリザベス王朝より大ブリテン王國を経て現王室ハンノーヴァ家の議會主義確立によつて近世國家の本質と形態とを決定したのである。

かくして十八世紀中葉に於ける英國植民地戦争を終幕として「イギリス植民地帝國」の基礎は一應完成を見た。即ち「カナダ」「印度」の獲得に亞いで「オーストラリヤ」「ニュージールランド」の奪取は十八世紀の産業革命を捲き起し、イギリス資本主義の躍進期を劃し、其の後喜望岬植民地の強奪より東洋に對する帝國主義的侵略に至つて、甫めて英國の近世資本主義の世界化形態は完成したと云ひ得るのである。このイギリス的世界帝國主義は中世の法王的世界主義に對する闘争を先づエリザベス朝のイギリス教會の獨立を以て開始した。爰に「イギリス的イデオロギー」の確立と共に、將に來らんとする近世史を代辯して「中世イデオロギー」に對する明確なる個性の表現が邪曲な方式に於て示された。

此の個性の勢力的構造は、アダム・スミスの自由主義、ホッブス、ヒュームの經驗主義を通過してベンザムの功利主義並に議會主義を果敢に實行せしめ、遂に近世資本主義形態の世界



的主體の確立を成功せしめたのである。

併し斯様なイギリスの世界帝國主義は十九世紀後半より既に諸種の矛盾を暴露しつつ、新たな世界構造への變革的危機線上を慌しく辿り始めたのである。即ち國內の社會機構に於ては階級の對立を起し、國外の植民關係に於ては民族問題を發生せしめ、自己の資本主義の世界均衡に於ては資本主義諸國家との對立激化を増大するに至つた。斯様にして十九世紀の獨逸の勃興は遂にイギリス資本主義の統一關係の破壊的危機を激化し、世界大戰を誘發した。併しヴェルサイユ條約によるイギリスの帝國主義的發展はその極點に到達すると共に一方に於ては階級的矛盾と民族的撞着とを其の帝國主義的形態の内部に熾烈化し、他方に於てはソヴィエトロシアの成立によつて、近世的世界形態自體の否定的危機を尖鋭化せしむるに至つたのである。此處に近世的世界主體たる大英植民地帝國の衰運が始まり、其の諸矛盾を克服すべく新世界建設の主體を覓めんとする世界史的必然性が胎動し始めた。

被搾取階級の擡頭による社會矛盾の激化と壟斷されたる民族の勃興による世界的矛盾の爆發、此の二重矛盾の同時解決といふ世界史的必然性を全く新たな眞秩序の形態を要求す

るものであつた。この新たな世界形態はローマやイギリスが成せる世界統一を絶對的に擴大して地球的世界國家として、彼等その統一媒介たりし「絹道」や「金道」に絶對的に代位すべき「皇道」によりその建設が先づ東亞圈全面に肇めらるゝ事となつた。茲に於て日本的世界觀の理念が世界史の上に新に登場し、今日迄の誤謬と悲惨に滿ちた世界僞史が否定されたのである。而して日本は世界正史の新生の主體として肇國以來諸民族の統一國家を固成し來つた悠久な蓄積的日本「エネルギー」の自己擴大を開始したのである。この事が諸民族の否定の上に成立せる近世的主体たる「イギリス植民地帝國」に對して、その近世資本主義形態の決定的地盤として追ひつめられた「アジア」の反撃を代辯すべき世界戰爭を必然的ならしめたのである。

「アジア」の古典として、諸民族並にそれら文化形態の統一的範例として最も獨立的な、最も個性的な 天皇國家を連綿として展開し來つた日本は、今や世界を統一ある宇と爲すその世界主義を實現すべき「エネルギー」蓄積の二千六百年史を畢つて世界僞史より世界正史への最も大なる史代變革を媒介すべき世界戰爭の段階に入つたのである。此の世紀を通ずるで



あらゆる最も激動的な闘争段階に於て如上の政治、經濟、思想の諸關係は變革されつつ、日本世界主義は自己の理念體系を普遍化し以て新世界文化の統一形態の完成を見ざれば歇まぬのである。

今や既に支那事變並に大東亞戰爭を通して確實に世界の敵は米英であり、又近世史掠奪の資本主義的植民地帝國イギリスとその世界主體相續者アメリカの徹底的破摧によつて、全然新たなる世界構造と人類文化の創造を敢行せねばならぬ。皇道主義日本の世界觀體系の東亞全面の展開はその八紘爲宇の前提である。

イギリスに隸屬して久しく呻吟せる中國、佛印、泰等を先づ解放し、アジア本然の姿と心に還し、ビルマを獨立主權國家たらしめ、次第に印度にも救ひの手が伸ばされてゐる。

唯印度はイギリス植民地帝國の鉗結が餘りにも嚴重を極めてゐるのと、久しきに亙る民族弱體化政策の結果として現實の起ち上りに長期を要する事である。而も印度はイギリス植民地の核心なのである。

従つて近世植民地問題と植民政策の論議は必ず英國を最大の對象とする。近世諸國家の植

民の形態は一樣ではないがその開拓乃至略取方式に於て印度はイギリス植民地の典型的專制搾取の標本と謂ひ得る。

植民地が英帝國にとつて最も重要な地位を占めてゐる事は今も昔も變らない。英國のどの植民地とて本國首都のブルジョアジーにとつて重要ではあるが特に印度は良きその寶物なのである。而も尙スーダンの棉花栽培、マレーのゴム、東アフリカの棉花、コーヒー、纖維栽培には何れも多額の投資が行はれて來た。

英國の重工業は今日迄莫大な利益を擧げて來たが、これは外敵に對する防禦と植民地に於ける被搾取農民反亂鎮壓の爲めに政府が多大の責任と多額の出費を惜しまなかつたからである。然し十九世紀に於て、さしも容易に獲得せる工業界の覇權も之が保持困難な時代に達しようとは英國自身豫見し得なかつた。即ち尨大な植民地帝國の所有とは必ずしも永劫不變の世界覇權といふ榮譽を意味するものでなかつた。首都工業生産力の上には寄生虫病がダニの如く執拗に發生したからである。

今次大戰前、既に英國工業の凡ゆる方面に於て幾分向上線を辿るものもないではなかつた



が大部分既に決定的な衰微が圖はれ相當部門には著しい沈滞状態が見られた。早くも一九一四年に先立つ頃でさへドイツと合衆國とは石炭を除く最も重要な重工業に於て英國を遙かに凌駕してゐた位である。

かくて英國の此の沈滞と不振とは逆に、日本、ドイツ、合衆國の飛躍の状勢が當然戰爭への路を準備させる結果となつた。換言すれば英國は世界中の未開國乃至被搾取國を獨占してゐたが、皮肉にもそれが英帝國主義躍進の妨礙物と化した。つまり帝國主義時代に於ける資本主義の不平等な發達が戰爭を發生せしめたとも謂へる。

歴史の足どりからすれば一九〇〇年から大戰勃發の一九一四年迄の間は英國とドイツの帝國主義が世界再分割のために鬭争準備をなせる時代と觀る事が出來る。資本主義下に於ける勢力、利益、植民地等の範圍分割と云ふ大事業は關係諸國の相關的な力の關係、一般經濟的金融的軍事的な力等を基礎としてのみ施行される。而も此等諸國間の力は常に變化する。即ち資本主義下に於ては異なる企業、トラスト、工業部門又は國家の間では平等な發展は望み得なかつたからである。

かくて新勢力國家は帝國主義諸國の先頭に立つてゐた英國の牙城に肉迫し、之れが犠牲に於て「日當り良き場所」を世界に要求し初めた。一九一四—一八年の帝國主義戰爭は此の情勢から不可避的に發展したものである。

勝つた英國は戰敗國から分捕つた土地を併せて一層龐大な植民地帝國として登場した。アフリカ及太平洋に於けるドイツ植民地の大部分は英領となり、更にアジアではトルコ帝國の分割に際してはバレスタイン、トランス・ジョルダン、イラクを委任統治領として國際聯盟から事實上委託の形で領有するし、アラビア民族てふ大國民が新に現實的に英帝國主義の支配下に置かれた。而も言ふ迄もなく新占領國、アラビアの地に於て、早くも英國は十八番の政策をとり、先づ封建的要素と同盟を結び、而して名目上獨立の名を保つ地方即ちヘヂアス、ネジト等に於てはその支配者達を英帝國主義に拜跪せしむるため、凡ゆる買収手段を用ひたものである。

然し第一次大戰は資本主義の一般的危機招來の端緒となり、之れが英帝國主義にとつて最も深刻な反作用を齎らした事は皮肉である。それは英國にとつて戰勝は形式に止り、現實的



には經濟が根底から動搖し衰微沈滞の時代へ入り出したからである。之を英國輸出工業の衰退、生活の低下、失業群の増加、市場の窮屈化と輸出の減退といふ一聯の英國經濟の特徴に見る事が出来る。

かくて英國は戰爭により弱めらはしたが、植民帝國としては著しく雄大となつた。經濟的基礎が弱化する反面に於て植民地の獨占は一層強化された。同時に世界の覇權を争つたドイツの地位は、一層強力にして侵略的な帝國主義アメリカ合衆國によつて取つて代はられ、英國ブルジョアジーはこの新しき敵に對して植民地の獨占を飽く迄死守せねばならぬ事となつた。英米帝國主義の矛盾、資本主義の不平等發達の深化はかくして竟に世界再分割のため次の戰爭への路を準備したが、果然今次の世界戰爭を契機として皮肉や英國は世界諸國の何れよりも眞先にアメリカ帝國主義の餌食となりつゝある。

諸民族諸國家を擄取する事によつて蓄積せるイギリス的エネルギーは同民族たる兇惡米帝國主義に篡奪されつゝ、而も新しき宇宙主體たる日本的エネルギーに包攝されてその終焉を約束づいて行く。

近世史に驕溢邪曲な足どりを残したイギリス的エネルギーの檢討に絶対附隨の要件は、その植民地の略取過程と之れが專制的支配方式とである。固より老獪な統治政策によつてインド、西亞、アラビア、西阿、南阿の何れもがその支配方式を異にしてゐる。

例へば西アフリカ海岸一帶の領域では原住民を教育して之れを用ひ、如何にも教育的機會均等の觀を與へてゐる。而し實際には白人の西阿移住困難といふ氣候的關係から、之れら土人を養成して不在期間を協力せしむるといふ必要から出發してゐる。現に南阿東阿に來ると全然黒人の壓迫手段は慘酷を極め、之れが西亞、インドに至ると更に極端に變つてゐる。

だが今日迄大アフリカの被專制植民地は南北に切斷され、その南半が南阿聯邦に屬する時即ち英本國離脱の時と豫定されて來た。世界戰爭に占むるアフリカの地位が最も重大となるのは今後である。それは將來英米長期反攻の基地として残るからである。

インド、西亞、アラビア、地中海、北阿を始め南阿から西アフリカに至る迄直接足跡を印して來た著者の眼には結局インドと南阿には大戰の經過を別として解決し難き大きな謎が映つてくる。而も我國にはアフリカに關する文献は寥々として曉天の星である。第一篇の終り



三章と、獨立した第二篇「アフリカ縦横記」を添へた所以である。從來餘りアフリカに眼を向けなかつた日本人の、將來アフリカ研究への口火の役を果し得ればと希つたからである。

本書は元來昨年秋上梓される豫定であつたが先づ前書肆の崩解によつて蹉跎し、本春科學社の好意によつて再度上梓の計畫成るに及んで著者半歳の身體的災厄に遭逢し、再び荏苒夏を経て漸く爰に世に出づるに至つたものである。従つて第一篇一、二章中には若干六萬十菊の感ある部分もなしとしないが、史論的部面を生かす意味から餘り補矯を行はなかつた。畢りに出版許可後一年餘、極めてジグザクなブロッエスを経たにも不拘、毅然として出版を完成せる科學社主大沼正吉氏の好意に深甚の謝意を表するものである。

昭和十八年八月

著者識

## 目次

### 第一編 植民政略の史代的轉換

#### 第一章 世界外交の轉換と植民維新の新理念……………一

- (一) 「生活空間」防衛の戰……………一
- (二) 番犬的沈黙から主動的外交へ……………三
- (三) 東西の交換作用に狼狽する米英……………五
- (四) 英國的世界構造の破局と世界觀の死闘……………八
- (五) 濟度し難き奇習……………一三
- (六) 世界外交に甦へるアフリカ……………一四
- (七) 外交轉換の基調と植民維新……………一七



## 第二章 ナチスの世界政策の基調とアフリカ補充圏……三

- (一) 民族的世界政策……………三
- (二) 臨機應變外交の手法……………四
- (三) ナチスのバルカン行動……………六
- (四) 地中海を制するものはヨーロッパを支配する……………三
- (五) 新しい領域政策目的……………四
- (六) アフリカ補充圏と廣域圏及民族單位……………六
- (七) 民族的圏域的經濟新秩序……………六
- (八) 生命圏の概念と經濟政策……………四
- (九) ハンザと歴史の訓へる事實……………四
- (十) 歐羅巴の生活協同體……………四

## 第三章 印度の政治問題……………五

- (一) シーソーシー政策……………五
- (二) 所謂「離間支配政策」……………五
- (三) 奴隸と内政……………五
- (四) 印度の社會的缺陷……………六
- (五) 印度内政の三方向……………六
- (六) 州の政治とガンデーの反抗……………七
- (七) 國民主義者の理念分類……………七
- (八) 印度を晦迷にする土侯……………八

## 第四章 英帝國の核心としての印度……………七

- (一) カラクリの犠牲……………七



(一) 印度は民族體か……………八九  
 (二) 逆の眺め方……………九二  
 (三) バリアとアングロインデアン……………九五  
 (四) 阿片と酒精による民族弱體化の標本……………九七  
 (五) 英帝國の核心……………九九

第五章 轉換期印度の政治情勢……………一〇三

(一) 會議は踊る……………一〇三  
 (二) 轉換と決算……………一〇五  
 (三) 國民會議派の實力……………一〇九  
 (四) 利用された派内の對立……………一一四  
 (五) 英印會談以後……………一二七

第六章 印度再生の原理とガンヂーの思想……………一三一

(一) ガンヂーの本體……………一三一  
 (二) 第三階級「吠舍」の出身……………一三三  
 (三) アフリカとガンヂーの因縁……………一三五  
 (四) 眞理と非暴力……………一三〇  
 (五) 暗黒法案……………一三一  
 (六) ガンヂズムスの眞髓……………一三三  
 (七) サッチャグラハの眞精神……………一三六  
 (八) インド再生の原理……………一三九

第七章 植民專制の第一段階……………一四二

(一) 初期に於ける植民地競争……………一四二  
 (二) 東印の政策と印度社會組織の破壊……………一四五



(三) 東印會社の創案せる土地制度 ..... 一五〇

(四) 勅許による貿易獨占 ..... 一五〇

第八章 工業資本主義と英國的植民政略 ..... 一五九

(一) 新植民政策 ..... 一五九

(二) 印度の發展と印度的なるもの喪失 ..... 一六四

(三) 土地改革による饑饉とチエミンダリー ..... 一六六

(四) アフリカの開發とその獨占方式 ..... 一七四

第九章 帝國主義と植民政策 ..... 一七六

(一) 植民政策に於ける新傾向 ..... 一七六

(二) 植民政策と戦争 ..... 一八三

(三) 植民地と資本主義の危機 ..... 一八七

第十章 英國の印度政策 ..... 一九二

(一) 英帝國に於ける印度の地位 ..... 一九二

(二) 印度の農民とリョトワー制度 ..... 一九六

(三) 勞働階級の生活状態 ..... 二〇三

(四) 宗派の拮抗と英國の奸策 ..... 二一〇

第十一章 印度に於ける階級闘争と英國的改革 ..... 二二五

(一) 英國的政策の諸段階 ..... 二二五

(二) 印度の屬領的地位と階級闘争 ..... 二二九

(三) 制限されたる工業的進歩 ..... 二三七

(四) サイモン委員會 ..... 二三五

(五) 印度政廳公報 ..... 二四三



第十二章 印度に於ける民族運動……………二五〇

- (一) 民族運動と國民會議派……………二五〇
- (二) 戦後の反亂……………二五三
- (三) 労働運動の發達……………二五八
- (四) 陰險なるメールト事件……………二五九
- (五) 印度労働組合とストライキ……………二六三
- (六) 印度労働者と國家的苦難……………二六七
- (七) 印度革命の特徴と其の行動綱領……………二六九
- (八) 經濟的危機の發生……………二七三

第十三章 ヴィクトリア女帝の宣言……………二七七

- (一) 叛亂の連続……………二七七

- (二) 富源掠奪の術策……………二八二

第十四章 印度國民會議派の生誕……………二八七

- (一) 第一回會議……………二八七
- (二) 第二回會議以後……………二八九
- (三) 日露戦争の影響……………二九三

第十五章 歐洲大戰の勃發と印度……………二九六

- (一) 所謂「デモクラシーの擁護」……………二九六
- (二) 大戰中に於ける印度の態度……………三〇一
- (三) 戦線に於ける印度人の活動……………三〇三
- (四) 國民會議派の再團結……………三〇五
- (五) 大戰以後……………三〇七



第十六章 近東植民地の併呑……………三三

(一) 近東に於ける新帝國……………三三

(二) 油田と棉花のイラク……………三八

第十七章 英帝國主義の軍事政策……………三四

(一) 英帝國と戦争……………三四

(二) 植民地の反亂とソヴェエト聯邦……………三九

(三) 歐洲動亂以前に於ける英帝國の戦闘力……………三四

第十八章 アフリカに於ける帝國主義の跋扈……………四〇

(一) 崩れる屬領の足竝……………四〇

(二) エジプトの道程……………四四

(三) エジプトと労働内閣……………四七

(四) 労働運動と農民運動……………五〇

(五) 西部アフリカ植民地……………五三

(六) ニジェリアに於ける婦人の蹶起……………五五

(七) 所謂「文化的政策」なるものゝ実績……………六〇

(八) 東部アフリカの奴隸植民地……………六三

第十九章 アフリカの政治的動向……………六八

(一) 第二世界戦争とアフリカ問題……………六八

(二) 注目すべき新興國南阿聯邦……………六九

(三) アフリカ南半を支配する南阿聯邦……………七〇

(四) 人種問題・白人對黑人……………七二

(五) 黒人間の抗争……………七七



(六) アフリカに於けるアジア人問題 ..... 三七八

(七) 白人間の鬭争 ..... 三八〇

(八) 南阿聯邦を支配するもの ..... 三八三

(一) 南阿人とその國民性の成立 ..... 三八三

(二) ポアアの敗北と南阿聯邦の生誕 ..... 三八四

(三) アフリカに於ける英國勢力の没落 ..... 三八五

(四) 新興南阿人の登場 ..... 三八八

## 第二十章 獨立自治權と植民地

(一) 南阿人と對英軍事關係 ..... 三九〇

(二) 戦後に於ける大英帝國と植民地の關係 ..... 三九二

(三) 英國と植民地との法的關係 ..... 三九三

(四) 聯邦は實際的に如何なる實行力を有つか ..... 三九七

## 第二十一章 黒人社會の生活

(一) 二種異民族の社會的接觸 ..... 四〇二

(1) 兩民族が混血する場合 ..... 四〇四

(2) 一民族が優秀民族に絶滅せしめられる場合 ..... 四〇五

(3) 兩民族がその個性を持続しつゝ共存する場合 ..... 四〇六

(二) 白人を脅威する黒人の發展 ..... 四〇七

(1) 人口の激増 ..... 四〇七

(2) 黒人の教育能力 ..... 四〇八

(3) 民族文化の發展は外界との不斷の鬭争による ..... 四一〇

(三) 黒人の能力 ..... 四一一

(1) 鋭い直覺力・同化力の不足 ..... 四一一

(2) 驚ろくべき記憶力 ..... 四一三



## 第二編 アフリカ縦横記

### 第一章 拓かれざる寶庫に伸びる列強の觸手…………… 四二七

- (一) 希望峰の南端斷崖に立ちて…………… 四二七
- (二) 第二次分割の戦端…………… 四二八
- (三) ユーロピアン・オンリーの人種的差別…………… 四三一
- (四) 英國大軍港の建設を急ぐ…………… 四三二
- (五) 日本を模範に民族解放へ…………… 四三三

### 第二章 南阿の産業…………… 四三五

- (一) 海岸港と鯨の山ダーバン…………… 四三五
- (二) 黄金の町ヨハネスバーク…………… 四三七

- (三) 産金十三億ポンド…………… 四三八
- (四) 南阿經濟の苦悶は膨脹する金鑛業…………… 四三九
- (五) キンバレーが持て餘すダイヤモンド…………… 四三二

### 第三章 南阿の政治…………… 四三四

- (一) 南阿の煩悶は無智なボーア人と政黨の對立…………… 四三四
- (二) ケープタウンよさらば…………… 四三五

### 第四章 舊獨領西南阿弗利加へ…………… 四三八

- (一) 相容れぬ二つの魂「ナチとユダヤ」…………… 四三八
- (二) 實現の日近き獨逸人の夢…………… 四四〇
- (三) 黒ダイヤ「小羊」は土人の弗箱…………… 四四二



第五章 ボルトガルの搾取政策とアンゴラ…………… 四四三

(一) 天の橋立ロビト港…………… 四四三

(二) 黒人失業者の群るロアンダ…………… 四四四

(三) 頭から爪先迄日本製の伊達男…………… 四四七

(四) 良い商品に國境はない…………… 四四八

第六章 佛領熱帯阿弗利加…………… 四五〇

(一) 黒人勞働力の不足…………… 四五〇

(二) 英佛に分割されたカメルーン…………… 四五一

(三) 赤い太陽・碧い水のヴィクトリア港…………… 四五二

(四) 山奥に人食人種は存在するか…………… 四五四

(五) 大僧正の破戒…………… 四五五

(六) ここも日本の主要な市場…………… 四五七

第七章 ニジェリアのレゴスから奥地へ…………… 四六〇

(七) 赤道アフリカは輸入超過…………… 四五八

(一) 石鹼もつけずに刺る散髪屋…………… 四六〇

(二) 親の七ひかり、黒人大僧正の俸は局長…………… 四六六

(三) 掘立小屋の王侯邸宅と傍に侍べる多数の夫人…………… 四七三

第八章 ダホメの海岸コトノウの港…………… 四七八

(一) 船客の乗降もウインチによる…………… 四七八

(二) トーゴのロメ港…………… 四八〇

第九章 黄金海岸…………… 四八五

(一) 港なき港のアクラと野口英世博士…………… 四八五



(一) 乞食根性のない土人……………四九二

第十章 象牙海岸グラントバサツム……………四九九

(一) ボートブエと新首都アビジアン……………四九九

(二) 船醫を呪ひつゝ危くマラリアの犠牲……………五〇一

第十一章 世界唯一の黒人國リベリア……………五〇六

第十二章 バナナと落花生の山……………五二二

(一) 西阿七州の鎮臺フリータウン……………五二二

(二) コナクリ……………五二三

(三) 英米も狙ふダカー……………五二五

第十三章 阿弗利加の奥地世界最未開地を衝く……………五二八

(一) 都會の黒人生活……………五二八

(二) 奥地の黒人生活……………五三三

(三) 力は正義飢には苦しませぬ……………五三五

(四) 黒人の結婚式……………五三七

第十四章 大阿弗利加よさらば……………五三三



第一編 植民政略の史的轉換



## 第一章 世界外交の轉換と植民維新 の新理念

### (一) 「生活空間—防衛の戦」

世界維新戦の序幕は昭和六年の満洲事變により切つて落されたと謂へる。世界新秩序の一環としての新東亞の建設運動は瞭かに歐洲動亂に魁けて起され、眞の意味での十九世紀的なるものから二十世紀的なるものへの史代轉換の世界政治外交の新しき指標は「東亞の新秩序建設」を内包する満洲に先づ建立されたものと解すべきである。

嘗て日本が支那に於て、時に南を、時に北を支援して來た事は唯必ずしも張や孫文に引ずられたのではない。従つて柳條溝の號砲は決して單なる日本軍の作爲的爆破事件ではなく、日本



民族の世界現狀を否定する歴史的託宣以外の何物でもない。現に十二年七月には支那事變に擴大されてゐる。

蘆溝橋畔一發の銃聲は、鐵道守備に任じてゐた青年兵士が陽氣の加減や氣紛れから打ち放したのではない。七日拂曉迄堪へに堪へつゝ叩き切つた堪忍袋の緒であり、遠くは反日毎日抗日政策に、我國の應へたる東亞民族解放の天の啓示を理解せざる蔣への一大天誅であり、之れによつて日本民族行動の世界史的正当性を世に問ふた迄である。

然るにその背後に伏在する米英勢力の執拗なる謀略と、年と共に我にも直接加重し來つた武力的經濟的壓迫は、理不盡に新世界への光明を遮蔽し、而も積極化した。殊に樞軸民族の生命的最少限の要求さへ、而して「食つて行ける丈け」といふ極めて謙讓な民族的欲求さへ蹂みにじられて反撥したものが昨年末發展した大東亞戰爭であり又獨伊の歐洲席捲の動機である。

英米世界支配の大勢力の前に懾伏してゐたかに見えた民族が、自己の「生活空間」を防衛し世界を震撼する力を、而してアングロサクソンの獸慾を壓殺するといふ潜める力を、勃興する民族として秘めてゐた事實が歴史の前に證明された理である。

## (二) 番犬的沈黙から主動的外交へ

永く日本は東亞の、そしてイタリーは地中海の、番犬といふ屈辱的地位に押し込められ、ドイツは聯合國に骨の髄迄しやぶられて來た。だが東京——伯林——羅馬の線が接近し、今次の天を撼がす世界戦火の洗禮を通して「第二世界創生記」といふ歴史的宿命に結びつけられた事は尊き天意と解すべきだ。殊に支那事變を契機として樞軸民族の友好關係は一段と緊密化し、而も之れによつて日本の敵は支那に非ずして、その背後の英米たる事を明確にした。

同時にドイツはヒットラーが野に於ける時代から國民に公約し來つた失地回收運動を通じ、又イタリーは地中海アフリカ問題を通じ、何れもその舞臺裏にうごめく米英佛の飽くなき魂膽を見抜いた。地球全域に互つて魔の如く張り廻らす米英的勢力網と、世界赤化の陰謀を抱くソ聯勢力の浸潤とを防遏する必要から、日獨伊防共協定といふ形式に於て堅く聯結した。

憶へば滿洲事變によつて被壓迫民族の反撥跳躍の先鞭をつけた日本は翌七年には勇敢な國際聯盟脱退を敢行した。勿論之れがヴェルサイユ體制の屋體骨を揺がす巨弾となつた事は言ふ迄



もなく、英米ユダヤ失業ゴロ等の集りであり、自由民主主義的世界機構の防衛城砦たる聯盟の  
面子は完膚なき迄に叩きつぶされた理で、かゝる機会を狙つてゐたドイツは、ヒットラー執權  
二年を出でずして一九三四年十月十四日決然我に倣つて聯盟と絶縁し、「第三帝國」の巨歩を踏  
み出した。イタリアもエチオピア戰役を通じ、オーストリア、バルカン問題でドイツに拘泥す  
る事を止め、長き對獨の確執拮抗を清算して、傳統の地中海政策に復り、ベルリン・ローマ樞  
軸の結成となつた。

一九三五年英獨海軍協定でフランスに一泡吹かせたヒットラーは、水際立つた外交手法によ  
つて對英三割五分の海軍力を承認せしめた。ヴェルサイユ以後十二萬トンに苦惱してゐたドイ  
ツは、獨特の海軍を作り上げ、今大西洋を暴れ廻り、世界に誇りし英米大海軍を躋着たらしめ  
てゐる基盤をつくつたものだ。

又翌三六年のリップントローフ獨外相の親英接近政策が數次の努力にも拘らず水泡に歸する  
と又一方伊英協定が摺つた揉んだで熾り始め、ヴェルサイユ以後十五年、既に實力を内に蓄へ  
た日獨伊三國が、日獨の防共から、伊を加へた三國堂々の防共旗幟を押し立てて世界の現状維

持國家群を睥目せしめた。

此の頃から壓迫の手は樞軸陣營に加重されたが、米英が音頭をとつて支那事變を裁かんとし  
た一九三七年の九ヶ國會議には鮮やかな外交轉換を見せ、ドイツは會議出席を肯んぜず、更に  
イタリアも日本援助の態度をとつて會議は全く骨抜きとなり、英米を口惜しがらせたのみなら  
ず、此の會議の進行中皮肉や十一月六日突如として、三國防共協定の調印を發表して世界の外  
交界を呆然たらしめたものだ。

未曾有の國際的異變の衝動が、いくらか評議するや世界は二つの國家群に對峙してゐる現實  
に英米自身目を瞠つた。即ち奴隸的番犬的役割の日獨伊は、かくして歴史を裁く興隆民族の榮  
光を振り翳す指揮者としての主動的地位にとつて換つたのである。

### (三) 東西の交換作用に狼狽する英米

北支事變から、日支事變、ついで支那事變から大東亞戰爭に包含される迄、名稱は幾度か變  
り、戰爭の方式は移つても大東亞十億の民族解放と、新しき世界建設の指標といふ本質は寸毫



も變化なく一貫してゐる。唯列強の對支權益擁護を繞つて此の一聯の戦争は可成複雑なコースを辿つて來た。然し之れに刺戟され、世界注目の事件が相亞いで起つた。

先づドイツの失地回收がオーストリアを切掛にして斷行された事と、イタリーも亦エチオピアを制し、アルバニアを併合し、その威信を加へて行つた事である。

三八年チエッコ問題を繞るミュンヘンの獨伊英佛巨頭會談では、一轉小康を保つたといふよりは戦争を怖れてゐた英佛國民に、チェンバレーンのロンドン入りと、ダラヂェのバリ歸來を平和の女神の顯現か凱旋將軍の如く、歡呼して國民が迎へた事實に徴しても明かな如く、歐洲戦争必ずしも不可避ならざる事を訓へて一時安堵せしめたものだ。

だが英國の妥協政治家は、國防國家の建設を怠つて居り乍ら、唯傳統勢力にものを言はせて獨伊の包圍工作に狂奔してゐた。前大戦でしたたか打ちのめされて國家總力戦争の必要感を強めて準備してゐたドイツは、三九年春鮮やかな外交手腕を以て包圍線の一角チエッコスロヴァキアを勇敢にも解體してふや、目にもとまらぬ早業で同九月、ダンチヒとポーランド廻廊問題で、歐洲動亂の狼火を揚げた。

三旬餘りでポーランドを席捲したつたヒットラーは、ゼスチュアにもせよ「全歐の動亂を欲せず」として和平提案を繰り返したが、英國は耳を藉さなかつた。それのみか翌四十年六月フランス敗退後はソ聯と結び、米國の援助を恃み、次第に執拗な反擊態勢を固めて來た。

かくしてイギリスの頑迷と自負とによつてバルカン、アフリカからソ聯へと戦線は擴大され無謀な歐洲文化破壊のコースをヒタ押しに突き進んで了つた。

一方歐洲東亞の両面をイギリスと共に操つて來たアメリカは、日本を支那事變四年に及んで最後の一線迄追ひ詰め、遂に日本民族の宿怨は烈火となつて歴史を飾るハワイ攻撃の血路を開くといふ幕に移り、「太平洋生活空間」の自衛權發動は全地表を搖がす世界維新戰として本格化して了つた。

東亞と歐洲は當時必ずしも未だ直接手を握つて共同の目的に同時に邁進するといふ段階には達してゐなかつた。然し東西の交換作用は、外交に軍事に作戦に、見事な成果を挙げ、嘗て國際政治的には頑勢を擅斷した現状維持國家群の驅逐と、現状打破國家群の擴大強化を成功に導いた。殊に軍事的には兩戰鬪地帯に於て相互に戦果を擴大し狼狽する英米勢力を風潰しに切崩



しつゝ、遂に經濟的握手の段階に迄辿りついたのである。

#### (四) 英國的世界構造の破局と世界觀の死闘

日獨伊同盟とアングロ・アメリカン同盟の對立は、その規模からのみならず、性格からも史上特有の「世界觀戰爭」の方向に進行した。同盟は此の場合決して單なる政治的經濟的なものに止まらず、明らかに一個の「世界觀同盟」といふ新しい形式を生み出してゐる。

第二次世界大戰は斯くして世界文化史的な觀點からすれば前回の大戰とは全くその性格を異にする。即ち前回の大戰迄は如何にもその範圍こそ全世界に互つたが、戰爭そのものの性格からすれば、極めて單純なもので、唯參戰國の何れが勝つか敗けるかの問題に過ぎなかつた。換言すれば總ての參戰國は自由主義國資本主義國であり、勝敗が何れに決しようとも、人類の文化様式が依然として自由主義であらう事は何人も疑をさしはさまなかつた。

然るに今次の大戰はそれと趣を異にする。日獨伊側と英米側との死闘は、實に明日の人類文化様式を賭けての決戦であり、單に一民族の興亡を賭けた國と國との戦ではなく、舊世界觀勝

つか、新世界觀勝つかの戰爭である。所謂「世界觀戰爭」と稱せられる所以であり、ルーズヴェルト大統領もその宣言に於て明瞭に「今次大戰は世界觀と世界觀の闘争だ」と言つてゐる。二つの世界觀がかくも熾ろに死闘するに至つた事情は、考へると興味深きものを歴史の足どりの上に残してゐる。本來自由主義は理論的には既に十九世紀後半に自己批判の段階に達してゐたと見得る。

此の思想は經濟的には利己的自由競争に陥り、政治的には多黨代議制となつて現はれたが、前世紀から今世紀へかけて、次々とその内在的弱點を暴露して行つた。理論的には常に左右の中間に挟まれ、防衛的立場に追ひ込まれ、實際的にも自由主義陣營は前大戰後次第に寥れて行つた。

殊に致命傷となつたのは大戰を一步先に切揚げて強行したロシアの左翼革命と、大戰直後發展したイタリーの右翼革命である。自由民主主義は此の現實によつて岐路に立たされ、遂に一九三三年のナチス革命と共に全般的混亂に陥つて了つた。

當時著者が在獨中の經驗に徴するも左右兩翼に挾撃され、最も苦境に立つてゐたのは自由民



主々義の標本「社會民主黨」で、それも群小政黨中では傳統的勢力を把持してゐたし、又聯合ではあつても政權も屢々握つてゐた。従つて其の施政に對しては新語さへ作つて「ファッショ的社會民主主義」とよく悪口されたものである。

だがナチス革命以後反自由主義、反民主主義の運動を経験せざる國は世界中に無いと言ふも過言でない。特に全歐洲も例外たり得ず、而も之れに拍車をかけたのは今次大戰に於けるドイツの勝利である。既に防衛的立場に措かれてゐた自由主義、民主主義は英米を最後の城砦として一大決戦を敢行せねばならぬ羽目に陥ると共に我國も參畫する今次の世界動亂によつてどうやら止めを刺されんず情勢に立至つた。

斯うして世界像は著しい變化を齎らしつゝあるが、一體從來通用して來た世界構造は、十八世紀以來、主としてイギリス帝國が其の世界貿易によつて編成したもので、世界諸國、そして我々も亦漠然とそれを受け容れて來た。かくして彼等は七つの海を制歴し、世界陸地の五分の一をユニオンジャックの旗色に塗りつぶしたのみか、世界構造に關する極めて機械的な常識を人類に強いて來た。

然し人類の生活は一定の土地と運命的に結びつく。此の土地との繋がりから、人類文化の情味と傳統とが生れ出るもので、「地政治學」といふ最近の學問が此の點を特に重要視し、人類生活の「即地性」と「即史性」とをやかましく言ふのも此の爲に外ならぬ。

結局英國的自由貿易的世界觀を徹底せしむれば、勢ひ此の「即地性」と「即史性」が失はれ機械的平面的無機的な世界構造が出來上る事となる。

世界像が無殘な形に歪曲され、諸民族が狂暴な力によつて「即地性」と「即史性」を失つた結果として植民地の悲劇が頻發した事は、十八世紀以後の史實に徴して瞭らかである。例へば今日のインド人は最早やインド人ではない。何となれば彼等はインドに棲んでゐるのではなくインドに置かれてゐるに過ぎないからだ。アフリカの原住民族も亦同様、本國政府の對外宣傳がどうであらうと、その現實を眺めて來た著者の眼には、どうしても人間的生活が許されてゐるとは映らない。

新らしい世界觀を構成する強烈な民族感情の一つは全人類に對し、それぞれ適切で合理的な「生活空間」を與へるといふ事にあるが、樞軸的世界觀の共同命題は實に此の點にあると謂へ



やう。

典型的な屬領植民地インドやアフリカが二十世紀的轉換の要望を抱きつつ、久しく民族として弱體化されて、今後果して起ち得るか、起つとしても樞軸的世界觀に如何に即應して進むか又進ましむるかは今可成大きな轉換外交の課題である。

爰にインド問題を極めて大きく取扱ふべき理由がある。然し論ずれば際限がない。それは解き難き謎を餘り多く有つてゐる國だからである。

本編ではインドに關する問題に觸れるのは三章以下であるが、爰で彼等の信仰生活の半面をエピソードとして一項加へやう。

### (五) 濟度し難き奇習

インドがその階級種族、宗派によつて各々千差萬別の生活慣習をもつてゐることは前にも述べたが、その中に何といつても濟度し難きはその信仰生活に於ける奇習である。インド人の七割近くが印度教を奉じてゐる。之れがインド古來の宗教だが波羅門教に由來する業服輪廻を信

じ牝牛を神聖視し、而も後顯のカスト(種姓)と交錯して、インド特有の社會生活や、道德の規範を造り出して居り、手のつけ様がない。

「印度教とはインド社會組織の別名だ」と謂はれる程、此の宗教は複雑を極めてゐる。信仰の對象にしてからが木石、動物、生殖器の靈から、聖者、幽鬼、半神、無數の寺院殿堂に及び、神と名のつく數さへもが三億に上ると謂はれてゐる。

彼等は聖地ベナレスを憧れて居り、一生に一度といふよりも終生の目的が此のベナレスの流れへ行き、火葬にされてガンヂス河に流される事に措かれてゐるといふも過言ではない。乞食も王侯も病人も悉くがベナレスの流れに行く。従つて此の町はガンヂス河の中流アラハバートの東方にあるが、これらの美醜とりくくの、巡禮珍客と牝牛の群とがゴツタ返してゐる。彼等はガンヂス河で水浴して砂濱の小屋の中で僧侶に讀經して貰ひ、火葬にして河水に流して貰つて成佛する。これが至上の榮譽なのである。従つて水の中は水浴者が群がつて宛然芋を洗ふ有様だ。其處へ澤山の屍體が焼くにも間に合はず、灰にならぬ半焼のままゴロ／＼流れて來ても彼等はそんな事は氣に止めない。唯水に浸つて身を淨めてゐる。而も此の河岸には豪華な王侯貴



族の住居さへ立ち竝んでゐるといふ世にも不可思議な場面だが、之れが印度教徒の嚴肅な信仰生活の半面なのである。

三億七八千萬、戸籍さへ明瞭でない此の國の民族は實數四億に餘る人口かも知れぬ。尨大な地域と豊饒な資源、原始的な文化と低調な生活と多岐な政治、不可解な民族性と奴隸的偏見等を考へる時インドの處理は何人の手にかかるとしても不可能にちかいとさへ感ぜられる。

#### (六) 世界外交に甦へるアフリカ

アフリカに飛ぶと文化的、經濟的、政治的に、従つて軍事的に眺めて決して簡單ではない。此處は今後兩三年世界戦争に大きな役割を演ずるに相違ない。今は英國に軟禁されてゐるヘッスの生誕地アレキサンドリアが樞軸ロメル將軍によつてあはや攻略され、更にカイロが衝かれんず状態となり、スエズが機雷敷設で地峡が絞められ、更に英國が愈々エジプトを敗退しかけた時米の北阿不法進攻に續くチェニス攻略によつて地中海は樞軸側に有利ではないが、さりとして、アフリカの運命は決したといふ理には行かぬ。

尤も前大戦によつて英國が漸くアフリカに實現したシー・ツー・シー政策（カイロからケイプタウンへ！）は二十餘年のアフリカ建設を生んでゐる。假りにエジプトを失つても、直轄植民地のエジプト・スーダンからケンヤ、ウガンダ、タンガイカ、更に南北ローデシアと南阿聯邦を繼ぐアフリカ縦斷權益線は半年一年の勝負を豫想せしめない。

假令獨伊に、アフリカを含む「歐阿生活協同體」といふ歐洲共榮圏のプランは出来てゐても英米は大西洋を超えた以上、アフリカを必ず最後の據城とするに違ひない。

否、既に英米は合作でアフリカのビルマルートの建設に大童の如くである。過去五年援蔣ビルマルートが世界に大きな話題を播いて來た様に、アフリカのビルマルートは昨春英米からチラホラ放送され、半歳を出でずして十一月北阿進略の擧に出で、世界の眼はアフリカに向けられてゐる。

此の世界外交に甦つて來たアフリカのビルマルートは、太平洋——印度洋——英本國といふ方向を遮斷されたアングロサクソン窮餘の一策として着想されたものである。ビルマルートが抗日戦線に利用されたと同様、軍事的政治的角度から構想されたものだが、未だ完成されては



ゐない。支那大陸線の崩壊により之れを断念したアングロサクソンが第二抵抗線をアフリカ大陸に構築しやうといふのだが、可成冒険といふ事が出来る。

而もそれが、西アフリカ海岸のポアンノールを起點として、一つはガボンの首都リヴルヴイルへ、それから他の一つはカメルーンのドアラへのルート建設する。カメルーン的首都ヤウンデから赤道アフリカのウバギシヤリ地方、コンゴ河畔に位するバンギに連絡して、此處から北方に進んでナイル河の分岐點たるカルツームへ結びつかうといふのである。

又一つは南東の方向に進み印度洋のモンバサに至らんとするもので、全長四萬キロと稱せられてゐる。此れに成功すれば、前者によつて地中海と大西洋の連絡を確保し、後者によりて印度洋の制空海權を掌握してゐる日本への抵抗線とすると同時に、アフリカ南半の現状維持を劃さうとするといふ理である。

今後幾年かはインドと共にアフリカが世界外交に登場し、我國のアフリカ認識も從來と異つて増強が必要とされるであらう。

### (七) 外交轉換の基調と植民維新

東亞的植民地及植民政策の理念は變へられねばならぬ。即ち從來の植民地の概念、植民政略の方式は世界新秩序の方向に即應して、全く新基盤の上に立たねばならぬ。搾取する事ではなく共存する事であり、必ずしも領土的制覇を手段とせず地理的經濟的優位の供與といふ形態を整へ、彼此俱に發展するといふ原則を樹立せねばならぬ。

植民の過去の歴史が示す動機の過程を稽ふれば、二十世紀的乃至皇道政策的植民の理念への轉換も決して不可能ではない。

單なる人口過剰の壓迫とか冒險欲の満足とか、商業の擴張乃至宗教の傳播とか投資區域の擴張といふ段階を経て、今日の政治的軍事的領土的欲望の満足に至つた事を憶へば、此彼國民の共存共榮を理念とする植民維新の原則も可能となる。

唯、飽く迄東亞的植民の原則は、我が皇道の浹被を前提とし、従つて我が東亞廣域に於ける率先的指導的地位の確認を原則とすべきは言ふを俟たない。且つ外交の基調は特に東亞圈に於



ても茲におかれねばならない。

事實如何なる事があらうとも聯合國側が軍需民需兩面の資源に於て跛行的乃至缺乏に陥つて行くに反し、樞軸側はその中心圏たる我國に於て資源的にも亦民族精神的にも豊富旺盛となり且次第に總力戰的體制も年と共に整備されて行く所に戦局の長期化に伴ふ我の有利性がある。擄取と犠牲を目標とするアングロサクソンの外交の基盤は二十世紀東亞的日本外交の性格に轉換されんとしつゝある。

その近い例は既に戦争が破壊から建設戦といふ第二段階に達した帝國を推進力とする滿支、泰、佛印との紐帶強化といふ不敗の體制と、皇道政策を基調とする新しい外交に之れを眺むる事が出来る。即ち我は文化と技術と工業とを與へ、彼に地理的優位と資源的協力とを許容せしむる事によつて共榮圏建設に提携同心する。

例へば日佛印經濟協定に基づく昨年以來の交換物資の交流の如きも勿論大東亞戦争の戦果として新日本の轉換外交の勝利を意味する。

勿論、共榮とは物的意味だけではないが物の流れによつて共榮の意義は徹底する。我の戦争

遂行の熱意と崇高な皇道政策によつて之等の諸民族國家の領土的安んずと民生的福祉とは確保されてゐる。有り餘る物でも輸出出来ず、どんな不足する物でも輸入されないのは舊秩序圈内にある國々であり、佛印の米にしても昨年度の收穫量から輸出し得る全量を相合理的價格で日本に供出する。その他三十餘品目にしてからが日本が買はねば何處にも買ふ國はないのだ。

而も日本が戦争中の現段階に於て乏しい中から貴い物資を佛印に供給するのは他には供給し得る國家がないからであり、弱小民族國家を壓迫し食物にするアングロサクソンの外交方式と精神を異にする所以である。

専ら私利私益を基調とする謀略的政策以外にない彼等は、その敗戦の深化と共に益々諸世界に於て鬼畜的外交行動をとつてゐる。例へばソ聯の犠牲に於て辛くも危機を回避せんとした英國は、ソ聯が今や最後の危機に逢着するやソ聯側の切なる要請すら一蹴して不信にも同盟國の敗北に眼を蔽ひ、之れに一顧の援助すら行はず、第二戦線創設の約束等も現にアフリカ及地中海で足踏みをし、スターリンの不滿を買つてゐる如きだ。

殊に英國のかゝる「御都合主義外交」の犠牲となつたものは、ポーランド、オランダ等十數



ケ國に及んでゐるから決して新奇な政策ではないが、尤も現實主義のボルシェヴィキが、この英國の謀略外交にかゝつてゐる點は皮肉だ。

八紘一宇の我が崇高なる皇政道策に比し、如何に彼等の企圖する謀略が醜惡なるかは諸世界が次第に知りつくすに到るであらうし、そこにこそ我國の希求する世界維新戦と併行する建設面即ち世界秩序に彼等を凌駕する崇高な理念が包蔵されて居るのが知れやう。

凋落の運命をもつ英米的謀略外交から皇道的世界政治の推進力への移行、十九世紀アングロサクソンの醜惡外交から汎太平洋廣域國家の建設と、歐洲共同體の實現とを目標とする眞の意味での二十世紀的樞軸的八紘爲宇の外交への轉換こそ新たななる世界の様相に對處する構想に基づく劃期的世界政策と謂へよう。

## 第二章 ナチス的世界政策の基調と アフリカ補充圏

### (一) 民族的世界政策

世界政策の定義を一應變轉する世界の氣勢に順應して樹立される「外交政策」だとすれば、ナチスの世界政策は正しく史代の轉換期に「歐阿<sup>ユーラシア</sup>」といふヨーロッパ共榮圏を確立する事をその行動目標としてゐると謂へやう。

而もそれは舊にヨーロッパの再建を意味するわけではない。アメリカをして本來のモンロー主義に立ち歸らしめ、日本は東亞生命圏といふ合理的な單一體を創造する。ボルシェヴィズムのスターリンは打ちのめすが、アジアロシアには所謂「バックスサルマティカ」といふ一地域



の独自の世帯を許容する。二十世紀の平和樹立とドイツ民族の生命形體の確立、つまりナチス的生命觀に基づく民族協同體の具現、此の世界新秩序建設の爲めに採つた外交行動が偶々獨ソを中心とする歐洲戰爭の形式に入つたのである。

唯歐洲内に於ける政治的及經濟的社會的調整の諸問題は此の新秩序樹立の使命と現段階とに於て嚴正な批判の對照となつてはゐる事は事實だ。又之れに對するドイツ側からの駁論乃至論證も可成強まつてゐる。フンク經濟相も嘗て公表した新經濟秩序に對する四原則の内には勞働の經濟的分布の原則迄示してその可能性を強調し、

「歐洲に現存する經濟力を最も目的に適ふ様に利用し、歐洲各民族の生活水準を高くし、歐洲以外の國が歐洲に對して行ふ封鎖措置に對する安全感を更に増大せしめた」と強調した位である。

而も此の原則こそは實に資本主義による搾取組織と全く對蹠的なのである。例へば英國經濟の如きはその從屬せる自治領植民地諸國により自國の經濟を利用して行く政治であるに反しドイツの樹立せんとする經濟新體制は歐洲國民が相互にその生活を改善する目的で協働するといふ

點に主眼を措く。此の原則に立脚してナチスはその民族政策の巨歩を進め世界政策の實踐行動を定めて行く。

一體國際政治上、條約の實行は勿論重要な問題である。が同時に民族の生活權も決定的な意義を有つてゐる。英米は常に條約の神聖を要求するが民族の生活權は一向認めない。殊にイギリス人の、無能力の故に耕作されず放置されてゐた尨大な土地は此の地球上に如何に多かつた事か。而も他方人口過剩の壓迫に動きのとれない國々が幾つも存在する。斯る状態を永く続ける事は人類の世界觀が變つて行く時代には自然の法則に反する事が判つて来る。

そこで發展を阻まれた民族は滅亡するか、さなくば自力でその自由を獲得するか、何れかの途を擇ばねばならない。恰度東亞に於ける日本民族の様に、ヨーロッパに於てはドイツがイタリと共に、生活權の要求をハッキリと示すと共に、ドイツは自力を以て民族の滅亡を防いだ。ナチス以後のドイツの世界政策の基調は總て此の一點に歸納される。此の爲めにはヴェルサイユ條約の如き一方的な苛酷な條約からは解放されるし失地回收は斷行する。條約によつて縛られてゐた國防を奪還して之を充實整備し、そして早くも國內體制を一新して國力の増進を



待つと共に、内外諸々の施策、殊に「外交の刷新」へ突き進んだのであった。

### (二) 臨機應變外交の手法

嘗て近衛公は首相として「どこの國がどうあらうとも恃むべきは自國の力のみ」と言ひ、情報局總裁だつた伊藤も「他國はあまり恃んではいけない」と言つたものだ。結局この事は言ひ換へれば「民族の理想と要望を達成するのは自力であつて決して他力ではいけない。従つて自己の經濟力、政治力、そして國防力を結集せよ」といふ意味だつたのであつた。第三次近衛内閣の體制からその結合性、弾力性の目標が窺はれて變轉極りなき國際情勢に對して發揮せらるべき政治力に我々は大きな期待をかけたが、やはり閣内の不統一を暴露して挂冠して了つた。當時外相だつた豊田も素人としては鮮やかに「外交に定石なし臨機應變あるのみ」と言つて、モルトケの言葉を援用したのかも知れないが、國策は不動でもその外交の方法は自由潤達であるべきを主張したまま實證は國民に示さなかつた。

唯東條東郷に至つて漸く外交三原則が明示され國民は鬱陶しさから解放された。日本の世界

政策の基調は確立してゐても個々の外交手法、特に一時太平洋戰爭に對する外交の弾力性に限界が明かでなかつた事は當時國民を焦燥させたものである。

然るにナチス世界政策の個々の行動目標を検討してみると、極めて臨機應變である。一昨年八月二十三日ソ聯と結び、一昨年六月二十二日戰爭を起してゐる。而もナチスの國策は動かない。といふのは一億七千萬のロシア人を嫌ふのではないヒットラーにしてみれば、そして共產主義を世界から一掃する事をその世界政策の基底に數へてゐるナチスとしては、機に臨んでソ聯と友好條約を結ぶ事も、變に應じて之れと戰つて熄滅する事も、外交の行動が異なる丈けで目標は一つなのである。ソ聯とナチスそれは所詮相容れぬ二つの魂だからである。而もイギリスをして和平を懇願せしむるも、亦は之れを徹底的に討つて、歐洲共榮圏の片棒をかつがしむるも道は唯一つ、スターリン政權の打倒は絶對的に缺くべからざる要件だつたのである。

ナチスの對ソ政策は其の對英政策と共に可成大きな課題であつた。世界總面積の一五%七を占める廣大な領土と、一億七千萬といふ龐大な人口、そして豊富な資源を積へると、その政治力は未知數でも、國力總體としては一種の威壓するものを有つてゐる。而も世界赤化の陰謀を



藏してゐるに至つては、ナチス魂をゆり動かさずには措かなかつた事は當然である。だからナチス覇権と同時にゴエツベルス宣傳相、黨のローゼンベルグ外政部長等がイギリスに飛んだヘツスと共に、激しい反共反ソの火蓋を切つたものである。それは野黨時代國民に公約した午前、朝に立つて義理で行ふ生温の反共運動の如きものではなかつた。例へばベルリンを始め全國大都市には「人類の敵、共産主義の正體」と銘打つて「ソ聯の裏を發く展覽會」を長期に亘つて開催したかと思ふと「Contra-Komintern」といふ月刊反共雜誌を發行して自國はもとより全世界に配り、無数のパンフレット、單行本、そして講演會の開催等實に矢繼早だつた。著者のベルリン時代の同窓、エールト君が年少三十餘歳にして此の「アンティ——コミンテルン」を主宰し、一九三七年著者再度の訪獨に際して彼は「ボルシェヴィズムを地獄につき落すから君も見て居れ」と鼻息は荒かつたが、「日本も助力せよ」とは言はなかつた所に今思ひ出して獨逸人の敗けし魂が宿つてゐる。此の反共本部は獨ソ提携と共に一時雜誌も「Die Aktion」と姿を變へて御茶をにごしてゐたが、恐らく又元に戻つて間もなく「コントラ・コミンテルン」(Kontra-Komintern)に戻り、戰塵收まると共に纏めて送られて來るだらう。

更にドイツがソ聯を叩く理由は、ソ聯が北方バルチック海沿岸諸國や南東トルコ及イランに久しきに亘つて鋤鉞を入れ、ドイツの發展を阻む形勢にあつたからである。ドイツは工業生産品を東歐バルカン、中近東へ捌き、逆にそこから農産品や工業原料を買はねばならぬ關係にある。所詮ブロック間の交易を基調とする來るべき世界の新秩序では無力な小國は成立つて行かないとしても、一應ドイツは之れを勢力圏に包含してゐるのである。

然るに、ドイツの對英戰爭中、隙を狙つたスターリンは、ナチスと結びつつ尙バルチック海三國を始め東南歐更に近中東地方に手を延ばしてドイツの外交行動を妨碍して來た。殊にイランの生産品は悉くソ聯を市場としてゐた時代が長い。而も輸送の便さへ獨占してゐるからイランに對し活殺の權をスターリンが握つてゐたと謂へる。嘗て一九二九年頃ソ聯は、イランに對するドイツの要望を認めて、ドイツ貿易に便益を與へソ聯は輸送の獨占を緩和し、且つ獨逸の財貨がイランに容易に入り得る様に、獨ソ合辦の一運輸會社が創られた事がある。然し最近ではナチスの中近東政策をソ聯は反撥して來たし、而もその勢力をテヘラン以内へ延ばし、ベルシア灣に迄及ぼすに至つた。ソ聯の此の久しきに亘るウラジオストックから西南ベルシア灣に



及ぶ全亞細亞を「ヤットコ」を以て掴みとらうといふ遠大な態勢が露骨になつてくると早くも日本とナチスの反撃を喰つた理である。

### (三) ナチスのバルカン行動

次にナチスのバルカン政策を振り返らう。ドイツがダニューブ沿岸諸國を重要視して來た事は、久しくバルカン諸國及トルコ近東からアジアへの古い陸による商業路に沿つて、その通商貿易の手を伸ばして來た歴史に徴しても明らかである。既にドイツはダニューブ河畔諸國及バルカン諸國と可成の金高の取引をしてゐたし、それが主に工業生産品と農産品の交易といふ有利な條件の下に行はれてゐた。殊に最近ではライン河とダニューブ河の間には千五百トン位迄の船舶の航行し得る大運河の開鑿を計畫遂行してゐるといふ事によつてもその一斑が知れやう。も少し具體的に言へばドイツはそれらバルカン諸國に對して近代的な産業組織による生産方法や、技術及び資本の便宜を與へて積極的開發にも參畫して來た。爰で英佛との摩擦が激化するに至つた事は當然である。又ダニューブ諸國にしてみれば、確實でも遠いポンドより近く

て安くはあるが一應敬意も表さねばならぬマークとの經濟取引が漸次旺んとなり、且つ未開發農國として、工業的基礎をドイツによつて援けられて行く事にも魅力は感じてゐた。

とまれドイツは之等の國々と通商協定を結んでその産業的經濟的進展に寄與して來たのであるから、イギリスとて之れを邪魔しない限り何等かの恩澤を受け得る事になり、平和も齎らし得る理であつた。而も所詮バルカンは如何なる意味に於ても一應ドイツの「勢力圏」内に含む事は宿命的であつたからだ。恰も東南アジアに於ける佛印マレーの亞熱帯及蘭印熱帯一圓の地理的優位が、日本の「勢力圏」として工業技術的にも産業經濟的にも、そして科學文化的にも指導交換さるべき宿命を有つてゐると同斷なのである。

而も之等の事實が直ちにイギリス帝國の休戚に關する問題ではない筈である。といふのはイギリス帝國の如何なる生命的な利害關係と雖も僅かに東南アジアやヨーロッパの中南部に於ける通商貿易のみの發達によつては影響せられるものではないからである。

然るにイギリスはダニューブ、バルカン諸國に於けるドイツの通商貿易の發展を封鎖しやうとした。發展が阻止され、制限された地域内に閉ぢ込められねばならぬドイツの外交行動は反



撥し、その政策は變つて戦争に豫め備へ武力を養つた。バルカンはかくて依然獨英の角逐場として火藥庫の危機を孕んだまゝ歐洲動亂に突き進んで了つた。その後の情勢はといふよりも、戦勝を続けるドイツがバルカンに「歐洲共榮圈」の一角としての、年來の宿望を遂げると共に基礎を築いて了つた事は人の知る通りである。

唯爰に特に論じ度い事は、ドイツが對英戦争を進めつゝ、他面一昨春以來強引な外交政策によつてバルカン問題を處理して行つたといふ鮮やかさである。

特に當時ソ聯の睨みが利いてゐた爲め、獨伊としても、本來スラブ民族たるブルガリアやユーゴスラヴィアに對しては武力的には問題にならぬ弱さではあつても、政治的外交的には之れを簡単に片付け得ない事情の下にあつた。尤もこれが、イギリスにとつては、今次の戦争開始の當初から有利な心理的要素となつてゐたであらう事は否定出来ぬ。だがその最後のもの、ブルガリアは水際立つたナチスの外交によつて、又ユーゴはソ聯との驅引を理由として、鐵蹄の下に踏み破られギリシアも一括して獨伊の傘下に吸収されてしまつた。

かくてナチスの硬軟兩様の外交政策は、バルカンから近東中東地方へと移り、アワヤ東地中

海危しとみる時、此の年六月二十二日返す刃でソ聯に挑戦するといふ、ナチス外交行動の應變となつて現れた理だ。

#### (四) 地中海を制するものはヨーロッパを支配する

次にナチスの地中海政策だが、由來「地中海を支配するものはヨーロッパを支配する」といはれてゐる。此の命題は決して新しいものではない。然し、未知無限の寶庫を秘めるアフリカ大陸が資源に乏しいヨーロッパの「補充圈」として登場した時から、新しい意義を有つて來た。ナチス世界政策の一環としての地中海行動も戦前既に積極化してゐた。

殊にハッキリした現はれは、佛伊のチュニス争奪外交にナチスが片棒かつぎ出した頃からである。三八年春一時世界動亂が此のチュニス問題を契機として勃發しはせぬかと危まれたのは此の故である。佛領北アフリカの東北端、チュニスが當時ヨーロッパ政治の中心問題となつた事があるのは、その地中海に於ける重要な地位がものを言ふのである。チュニスは地中海の中央を扼してイタリアのシシリー島、チュニスのボン岬迄僅に百五十キロ地中海を東西に分水す



る要衝だからである。佛に對して歴史的人種的にその宗主權を主張する伊太利をドイツは助け  
て來た。昔ビスマークがフランスを助けてチュニスをイタリーに渡さなかつた逆の外交をナチ  
スは演じた理である。之れが應變の外交である。

だがドイツのイタリー支援は單にチュニスを目標としてゐない。英佛を叩く爲めには地中海  
を抑へねばならぬ。ヨーロッパに於ける勢力の不均衡を合理化する事が歐洲平和の根本要件で  
あるとすれば、此の要件を充たすものはアフリカであり、その指導權を握らんとする獨伊が英  
佛に代つて地中海を内海化する事はその前提なのである。

然し地中海の制海權を獨伊に渡し度くないのは英佛であり、英は特に最大關心を拂はねばな  
らぬ。ジブラルター、マルタ、スエズ運河の一線は多年イギリスが確保して來た東洋と本國と  
を繋ぐルートだからである。従つてシシリー、パンテラリア、チュニスによつて、又はジブラ  
ルターの爆破とスエズの攻略によつて、此の東洋ルートが切斷される事は到底イギリスの忍び  
難い所である。世界に誇る英の大海軍もこれによつて二分されて了ふのみならず、東洋との交  
通はアフリカの南端を迂廻せねばならぬといふ不便が伴ふからである。

だが今英米に食物によつて咽喉を掴まれてゐるスペイン、ポルトガルが、やがてドイツから  
ウクライナの小麦でも供給して貰へれば、その日からでもフランコは起つて樞軸側に参加する  
であらうしジブラルターを攻略する事も困難ではない。斯くて、ローゼンベルグがナチス在野  
時代からウクライナに於ける百五十萬のドイツ人を手押つけてゐた事やドイツ一昨年來の南露  
作戦の意義が一層明瞭となる。ナチスの深慮遠謀がものを言ふ理だ。故に假令シリア戦線は一  
時イギリス側に有利でも、ソ聯の崩壊を目指す、ドイツの南下作戦は必死的な點からみれば大  
局からみてスエズの運命は火を視る様に明かだ。ナチスの對地中海政策は直行を中止して南露  
黒海、中近東、スエズと遠卷にしつゝ北阿との挾撃に變つて行くだらう。ナチスの對英佛政策  
と戰爭勃發の経緯に就ては、最も一般的な課題丈で多くの場合言ひつくされてゐるので、爰  
では省略しやう。唯一言を要する事は、一昨々年六月十七日バリ無血入城以來、一切がドイツ  
化したフランスにも不拘ヴィシーには長く親獨政權の確立をみなかつた爲めにドイツをして隨  
分焦立たせてゐた様だが、よく忍び、よく努めるナチスのねばり強い外交に遭つて、今日では  
流石にフランスも讓歩し「歐洲共榮圈」確立のドイツの指標を理解し協力するに至つた事であ



る。

残されたものはスターリス放擲後の對英決戦である。それは必ずしもドーヴァー越えての上陸作戦を意味しない。外交的な和戦の問題は別として案外ドーヴァーを越えず、勝負といふ場面も想像されぬではない。

#### (五) 新しい領域政策目的

結論的に謂へば従來の戦争が究極する所、領域の問題であり此問題の解決は植民政策の主要な任務であつた。廣大な領土及勢力圏を全世界に有するイギリスは、一方に於て、狂暴な植民政策によつて有色人種を搾取して來たし、他方ヴェルサイユ條約によつて、その領域の分割を拒んで來た。之れはイギリスが犯した世界政治上の重大な過誤であり、遅かれ早かれ悲劇は起らざるを得なかつた。

ドイツは今次の大戦に勝利を得た後は國民社會主義的な原則に従つてヨーロッパ、アフリカ近東の新體制に着手するであらう。ナチス世界政策の結論とする所は、今次戦争の起らざるを

得なかつた諸々の原因をドイツ的世界觀に従つて處理する事である。勿論「領域政策目的」を確立する爲めに、統一的な觀點から凡ゆる専門的計畫を指導することである。

もつと具體的に言へば、戦争は生活空間の合理化運動なのである。文明が發達し、機械や技術が發明されると、一方に於てはその解決の爲めに社會制度や社會機構が變遷する。都市國家領土國家から近代的な統一國家へ、そして封建制度から資本主義制度へと發展したのである。之れが歴史であり、人類生存の合理化運動である。然し歴史を創造するものが人間である限り所詮は軌道に復歸するとしても、時々方向を誤り、逆行する事さへある。第一次世界大戦の結果が正にそれである。曩の大戦は民族を單位とする人類の發展はそのままの形では高度資本主義に發達した統制經濟の下では存續し得ざるに不拘、之れが無視された。ウイルソンをドイツでは故に嘘つきだとけなし、國際政治家としては落第だと評する。彼が民族自決主義といふ十九世紀的スローガンの下に經濟單位として成立し得ざる多數國家を創り出したといふ事は、人類の悲劇を創つた形だからである。かくてさきの大戦に解決し得なかつたものを今後大戦は解決せんとしてゐるのであり。此の意味では一次二次連續なのである。



換言すれば第一次大戦の歴史的役割は二十世紀的廣域經濟へ向つて第一步を踏み出すべきであつた。世界政治の問題は「廣域的」にのみ解決し得る段階にあつた。つまり國家の數は寧ろ少なくなる事によつて、人類の平和と世界の進化を招來すべきであつたし、之れこそ二十世紀の歴史的役割だつたのである。

#### (六) アフリカ補充圏と廣域圏及民族單位

ナチス的に言ふならば、二十世紀的人類進化の道は、民族單位を認めつゝ、超民族單位を確立することであり、「廣域的」解決である。之れをドイツでは「グロース・ラウムポリティク」(Grossraumpolitik)と稱してゐる。

従つて廣域圏内では民族單位は認めるが一國又は數國の(例へば獨伊の如き)指導國家の下に多數の指導される國家群が生まれる。此の兩者は決して支配者と被支配者の關係に立たない。此の點が十九世紀と二十世紀との根本的差異である。

具體的に言へば大東亞は日本がヨーロッパ及アフリカは獨伊が、その廣域圏の指導權を握る

といふ理である。だが指導される國家と雖ども、決して英米がその屬領に對するが如き擄取の對象ではない。

指導國家の役割とか指導される國家と植民地の差異とか、二十世紀的植民地とか、これらの諸問題に對してナチス世界政策の將來の指標となるものが所謂「共榮圏域計畫」である。

指導國家としての最も崇高な任務は、歐洲圏域にアフリカ補充圏を含む所謂「大歐洲共榮圏」の全民族をして、ドイツの強く正しき政府とナチスの世界觀を信頼せしめる事を第一義とする。そして彼等の勞働による應援を獲得し、眞の勞働を全民族の利益の上に打立てられるドイツ的計畫に従つて指令に服さしむると同時に、すべての民族の勞働による果實を共同で收穫する事である。ナチスは之れを「ユーラリカ」即ち「歐洲アフリカ生活協同體」と稱んでゐる。勿論この協同體は本質的にはアウターキーの經濟領域になるであらうし、従つて人間の文化的、精神的方面をも生活現象として包含するから、新世界「歐阿」といふものは經濟的のみならず、文化的、精神的にも舊世界となつた西半球に對立して來る。而もアメリカにして覺醒し、新しき世界像を認識し得たらんには、我が皇道政策は浴被し、かくて人類は新たな世紀に



入り、新しい前提の下に平和を享受し得る筈であつた。可惜、米英の暴戻は我國をして聖戰完遂の決意を固めさせた。

かくて今日ドイツも日本も大消耗戦を行つてゐる。文字通り食ふか食はれるかの死闘を續けてゐる。新世界像創造の爲めの産みの悩みである世界新秩序はそして二十世紀の平和はしかく容易に確立し得ない事を示してゐる。

### (七) 民族的圈域的經濟新秩序

歐洲に新しい政治秩序が生れ、新しい國家構成が實現する場合、それが經濟に及ぼす影響は過去の歴史的經驗からみて明かである。唯我らの關心事は此の秩序が過去の經濟政策からみてどの程度の跳躍があり、どんな經濟組織が創り出されるかにある。更に具體的に言へば、獨逸は大陸からイギリスを遮斷した後、單純にイギリス帝國が從來立つてゐた様な獨占的な地位に就くのか、即ち一般に今日迄の經濟原則をそのまま踏襲するののか、或は又ドイツの經濟政策が新しいイデーに従つて如何に行はれるかの問題である。

イギリス帝國の經濟政策的傳統を茲に簡單に顧みて要約してみるなら理論的にも實踐的にも極く最近迄は次の原則に従つてゐたと謂へる。

(イ) 第一に市場の支配が全世界の經濟現象を決定するのであつて此の經濟にあつては、道徳や正義の束縛も國家的な必要も民族的理想も第一義的ではなかつた。此の經濟機構に於ける責任ある調節器は價格である。價格は國家各個人に屬する一切のものを決定し得るのである。

(ロ) 資本と資本の結合が此の經濟の要點である。資本を持つてゐるものは、經濟財を支配し、それを所有し得ると共に、従つて生産と消費とを決定し得るのである。

(ハ) 此處では、國際的移住權が經濟指導に對する最善の前提であり調節である。即ち、此の國際的移住權がある爲め、總ての國の經濟人は經濟經營に最良の地位と思はれる地點に定住する事が出来るのである。

かくてアングロサクソンの經濟秩序は過去數世紀間、此の三つの原則を成功せしめて來た。そして他の諸國は唯此のイギリス的解釋に追従してそのまゝ此原則を守るのみで、その前提の



何であるかを見極めもせず、従つてその影響をも感じなかつた。イギリス經濟の偉大さは畢竟此の原則の正確な事を各民族に徹底的に信頼せしめた點である。従つて此の事は總ての國の經濟的發展を英國的軌道に導き入れた。ロンドン取引所の支配力、英貨「磅」の地位——これはイギリスの精神的權力の表現でもあつた。

かくて實踐家は英國資本にして始めてかゝる經濟を行ひ得るのだと信じてゐた。經濟學の教授達は若い學生や經驗に富んだ人達を此の英國の目的科學に引入れる爲めに、懸命に人工的組織を考究してゐた。だが家計が家庭的に支柱をもち、都市經濟が自治體の形で、更に國民經濟が國民の形で、支柱をもつといふ場合には世界經濟は獨特の支柱をもつてゐない。それにも拘らず世界經濟の活動は、理論も實踐も此の事實を認識せず、従つて世界經濟は秩序の保たれてゐる所で、各國が自國の任務を法律的に安全に遂行し得る場合にのみ、存続し得るものである事を認識しなかつたのである。

イギリスの世界經濟の前提はその優秀なる工業力と世界支配力とであつた。所が經濟政策家經濟學者——恐らく社會全體とも言ひ得やうが——は前世紀の七十年代以後、これらの前提を

忘れて了つた。イギリス世界經濟の他國への影響は、正確には、それ以前から忘れられてゐた。即ちイギリスは他國の領土を掠奪する事によつて發展した事と、従つてイギリス以外の國家は總て實際にはイギリスの恩恵によつのみ、その經濟を營み得たといふ事實、かういふ事も忘れられてゐた。

イギリスに非らざる國家は、結局、英世界帝國の一地方に過ぎなかつた。だがかういふ見方は今次大戰と共に大膽に變つて了つた。

此の點に早く氣着いたのは世界大戰に破れたドイツであつた。

#### (八) 生命圏の概念と經濟政策

ドイツでは當時此の誤れる經濟政策の影響を受けて七十萬以上の人間が飢餓の爲め死んだ經驗をもつてゐる。かくてナチス黨は此の世界政局から實際の經濟政策の結論を引出したのである。それが即ち英國的世界經濟の打破である。

熟々考へてみると吾々は先づ、このイギリスの經濟制度が一世紀以上に互つて實際に有效に



行はれてゐたと信じさせられてゐたのだが、この原則は經濟の本質的部面に於ては、必ずしも常に有效ではなかつたといふことを曝露して來た。經濟の大部分の領域は市場の支配から獨立してゐた。國民經濟の非常に大きな部分が、かゝる國際的暴行に對抗してゐたし、資本の支配とても決して決定的なものではなかつた。

恐慌は繰返して資本家の要求を最小限度に引下げたし、國際的移住權も實際には極く僅かな人に對して有效だつたに過ぎない。今やこのイギリスの經濟政策の代りに、新しい國際協働の制度が登場しやうとしてゐるのである。この新しい國際協働の制度の究極の意義に關しては、各國の間に若干相違はあるが、大體に於て理解し得る程度のものである。今此の點に關して獨逸の經濟觀をみよう。これは英國の市場理論に反對して、生命圏の觀點をとつてゐる。獨逸は生命圏を次の如く解してゐる。

(イ) 歐羅巴内に於ける限られた移住によつて生活し、成長する充分な圏域。

(ロ) 獨逸の政治的、經濟的獨立を全ふし、自國の生命を確保する爲めに、獨逸經濟の重點を自國の圏域内に引戻すこと。

(ハ) 自國經濟力の消耗を認めて、親交あり、非常の場合に間に合ふところの、隣邦の經濟を指導することにより、相互の補足を保證し得る大陸歐羅巴の經濟協同體の發展を承認すること。

(ニ) 植民地的、經濟的補充圏を完成すること。

かういふ生命圏の解釋によれば、第一に、經濟は決して獨自の法則に従つて動く組織でもなく、獨自の主權をもつ組織でもないのである。經濟は民族の機能であり、従つてそれはその民族の生命的法則、生命的必要に束縛されなければならないのである。それ故に又、民族の外に、圏域が再び經濟の要素となる。かくて政治的、經濟的自由を決定する過程は、これを國家圏域内は移されねばならないと謂ふのである。

更に又、この生命圏の解釋は、大陸の他の民族に對する經濟關係も同時に規定してゐる。獨逸人が獨逸の生命圏を要求する時には、獨逸人は又、他の民族の生命圏を肯定してゐるのである。國際的にこれを見れば獨逸の生命圏思想の心髓は、他の民族にもその生命圏を保證するところの歐羅巴の、新しい秩序を創るにあるのである。



嘗てのイギリスの經濟政策觀と、今日の獨逸の經濟政策觀の區別を特に明瞭にしやうと思へば、この對立の二人の偉大なる代表者アダム・スミスとフリードリッヒ・リストとを對照すれば最も簡明である。アダム・スミスの自由貿易論に従へば、自由競争を利用すれば、各國は結局最も良く、即ち最も低廉に商品を生産することが出来る。従つて各國は最も有利に販賣し得るのである。他方、フリードリッヒ・リストの考へ方によれば、國際的勞働分布が最高の能力を發揮するのではなく、最高の能力を發揮するものは國家内に存する勞働分布である。何となれば經濟は計算的價值から成立するのみでなく、むしろ潜在的能力の存在とその利用とからなるのである。だから兩者の解釋は次のやうな公式となる。

アダム・スミス

フリードリッヒ・リスト

(市場理論)

(能力理論)

最高價值市場價值

生産力

方法……國際的勞働分布

生産力の聯合

目的……全ての個人の調和

國家能力の展開

思想……コスモポリティック 政治的

兩者の經濟觀が矛盾してゐること、獨逸のやうな大國はこの點から結論を引出さねばならぬこと、かういふ全歐洲諸國の爲めの鬭争の結果は、當然にその經濟政策的影響をもつものであること、これらの點に疑問の餘地はない。

### (九) ハンザと歴史の訓へる事實

獨逸は戰後、伊太利その他の協力を得て、必ず歐洲の經濟的新秩序を實行するに違ひない。この計畫の正當性を證明する三つの事實がある。即ち、

第一に獨逸の思想は歐羅巴の秩序思想に變化しつゝある。

その理由は、獨逸は今日、歐洲大陸中最も大きな民族であり、従つて、その秩序は重力の法則によつてみても、全大陸の秩序に決定的な影響力を有すべきである。他方、西歐諸國によつて屢々試みられたところの血と圈域の法則に反する中歐分解の試みは、當然失敗すべき運命を



有つてゐる。

更に地政治學的に見ても、歐羅巴に於ける今日の歴史的過程は今日までの如き相互の敵愾心——英國はこれを利用して歐羅巴の秩序を破壊して來たのであるが——を放棄し、民族間に於ける隣國として當然なる共同生活を再興し、圏域外の影響を暫く遮斷することである。

第二に、獨逸は經濟の新しい基礎を作つた。

獨逸の國民社會主義が一方に於て民族と圏域、他方に於て經濟との間の關係を、生活の觀點から實踐の中に新に組織したといふことは不滅の功績である。この組織の意義は獨逸の國境を遙かに越へ及んでゐる。既にこの新しい發展の第一の段階、アウタルキー化の思想を貫徹したといふことが、歐羅巴の小國にも重要な經濟的影響を及ぼしてゐる。

即ち、彼等に單一生産の不合理なことを教へたことである。この新しい歐羅巴の經濟政策（單一生産の否定）の努力は、獨逸の經濟を刺戟したと同時に、すべての南西歐羅巴諸國を恐慌から解放した。とまれかういふ獨逸式の協働政策は、之れを問題にもしなかつたやうな國々にさへ建設的效果を與へた。獨逸はこれらの小國を金融的に繋り上げたと言つる者もあるが、現

實には比較費用といふ自由主義的理論から來た單一生産を獎勵もしなかつたし、價格を壓迫した理でもない。獨逸は大いに買ひ、世界市場價格以上に支拂ひ、これにより多少の弊害も見られなかつた理ではないが、根本的にみて、フリードリッヒ・リストの意味に於ける各國の生産力を解放した。

獨逸が戰爭に勝てば、その經濟的イデーも亦完成したものと認められるだらう。それ故に大陸歐羅巴の經濟協働體の完成は唯時の問題だと謂ふ事が出来る。

第三、併し、獨逸は經濟に對する新しい基礎を創つたのみならず同時に、最も大きい生産者及び消費者として新しい經濟政策的規則の運轉を保證してゐる。

嘗てイギリスの優れたる工業力が、アングロサクソン經濟を構成する前提であつたやうに獨逸の經濟力の意義は、正に始まらうとする新しい經濟運動の前提である。經濟はすべて均衡であるが、均衡は、唯それに適當な能力をもつもののみが行ひ得るのである。

獨逸經濟史中、最も偉大なる時代たるハンザを考へると、ハンザは十二世紀より十六世紀まで、その思想と商業とをもつて當時の歐羅巴經濟の基礎をなしてをり、歐羅巴の大部分ロンド



ンよりトヴゴロッド、諾威より佛蘭西・瑞典よりクラカウ、レムベルグに至る經濟と文化とを創造してゐた。而してハンザは又、吾々が今日模範にしてもいいやうな、その實際の政策に時を超越した思想を適用してゐた。例へばハンザはその經濟的行爲と通商とに當つて民族性を尊重すべきことを認めてゐた。

ハンザは經濟力を開發する原則を知つてをり、従つて單に經濟關係に止らず、生産をも基礎づけ組織し、増大した。ハンザは常に兩經濟人の利益を眼中に於てゐたし投機を知らず、正しい關係を維持する原則に従つてゐた。(投機はユダヤ人の發明になる)

#### (十) 歐羅巴の生活協同體

今日では、これらの古い原則に順應した而も一つの新しい歐洲經濟協同體が、可能性を帯びて來た。實際には歐羅巴の民族は今日既に、獨逸の經濟復興によつて一大勞働協同體に統合されてゐる。

此經濟協同體の影響として擧げられるのは次の如きものである。

(イ) 此處では市場の專横は存在しない。その代りに民族の生産力の開發が生れるのである。此處では市場物價格が認めるもののみならず民族と圏域の能力が許すところのものを生産するであらう。經濟の自由ではなく勞働の自由が登場するのである。

それ故に、價格に依つて左右される限りの單一生産は實際には終滅する。従つて關稅同盟に依つて、歐洲諸國を結合しそれに依つてイギリスの世界經濟を縮少しやうと考へる一派さへあつたが、それは誤りであつた。關稅同盟と云ふのは、同じ水準にある二つの國民經濟の間にある不必要な困難を除去する手段である。從來の歐羅巴に於ける關稅制限を、全面的に除去することは、餘りに早まりたる實驗によつて歐洲國民經濟の共同の發展を不必要に妨害しこれを危険ならしむるものと見做されるに至つた。

(ロ) 經濟的協働の目的は生命圏協同體である。即ち、單一生産を破壊してその代りに可能な孤立をなす事はこの經濟政策の任務ではない。

獨逸は大規模なアウトアルキー化によつて自國經濟の重心を自國の圏域内に引戻したのであるがそのことは歐羅巴の經濟的自己發展にとつても政治的前提であつたのである。それ故に獨逸



は決して孤立を奨励したのではなく、歐羅巴に於て可能であると思はれる組合せを支持したのである。歐羅巴に於ける小國はその隣國に配慮しなければならぬと同時に、常にその隣國を頼りにし従つて又自分自身を頼りにしなければならぬといふ特殊な立場に置かれてゐる。

今迄の自由主義的な運動法則と、將來の歐羅巴經濟取引との間に於ける大きな差異は次の點にある。即ち將來の生命圈共同體に於ては、これ等の國は確實な、良き、取引國をもつことであり、更にこれらの國はその結合により漸次自身の力では達することが出来ない様な高い經濟段階に達し得ることである。

(ハ) この經濟の目的は、既述の如く、東方及び南東を今までよりも重視する結果となるであらう。アングロサクソンの經濟觀に於ては、世界到る所に於て、特別に利益があると思はれる經濟的機構のみが利用されてゐたのである。即ち、お菓子の中から乾葡萄だけを掘り出して食べて、お菓子は捨てられてゐたのである。歐羅巴の東部南部が特に輕視されてゐたのはその原因がかういふ解釋に基いてゐたからである。獨逸の新らしい經濟政策はかういふ状態を無くするにある。獨逸は既に最近二、三年かういふ道を辿つて來てゐる。

(ニ) かかる發展の終局の目的は仕事を豊富にすることである。かくて獨逸民族は新らしい經濟的認識を基礎として、人類の鞭を廢棄し、大陸の決定的な部分を開發すべき歐羅巴の偉大なる任務の遂行は、殆ど想像出来ない程大きな能力を活動せしめるだらう。

かくしてヨーロッパ舊大陸とそして之れに氣息を合はせるアフリカには新しい時代が始つてゐる。民族と圏域とはそこで最早必要物といふ程度ではなく、支柱であり、國家の生命を構成するのである。



### 第三章 印度の政治問題

#### (1) シー・ツー・シー政策

試みに印度洋上南緯二十度、東經八十度の地點を中心として約五千キロの半徑を以て孤を描いてみよ。其の接する海岸面は悉く英國の固めた足場たらざるはなかつた。先づアフリカでは前大戰によつて所謂シー・ツー・シー政策(C2C)はカイロからケープタウンへの貫徹を目指す英國の長い計畫であつた)に成功すると、(舊獨領東アタンガニカを委任統治領として獲得したから)アフリカ側から西印度洋の側面掩護を開始した。又東部はシンガポールを永久陣地として北にベンガル灣を南に濠洲を擁し、而も英國と緊密に協力する蘭印を楔子として蜿蜒たる防壁を成してゐた。而も此周圍上の陸地は殆ど其の直接領地又は勢力圏たらざるなく、又これが寶庫印度を守護する海陸二重の防護陣なのである。印度はイギリス帝國領の中核をなすも

のである。故に世界帝國統治政策の根本を本國から印度の寶庫に至る通路の確保に措いてゐる事は勿論である。嘗て獨逸の計畫せるバグダート鐵道も、ソ聯の印度進出策も英國は印度攪亂工作と見做して之を一蹴し、如何に印度の保全に躍起であつたかは歴史の示す通りである。

印度は英帝國諸領の中心であり、印度洋は世界帝國の内海と化してゐた。だが史代の轉換は英帝國の崩壞を明示し、世界帝國の久しきに亘る印度政策への批判にもペリオードを打つべき時期に至つた。

印度半島は一つの大陸である。三億五千萬の人口、四百六萬平方キロの地域、此の中、英領丈けでも二百十萬平方キロ、人口にして二億七千萬を超えてゐよう。而も六百を算する諸土侯が四割の領域を統治してゐる。政治的宗教的に三大勢力の拮抗を幫助して來た英國には「民族弱體化政策」の魂膽があつたからで、印度の社會的缺陷はかくて永劫に拂拭さるべくもない。

世界の寶庫印度は此の缺陷と共に次代相續人へ繼承されて行く。日獨ソ何れが此の遺産を相續するかは別として、世界の魅力印度の政治は一瞥するだに多岐複雑を免れない。



(二) 所謂「離間支配政策」とは

印度に於ては依然英國の權力が優勢であり——その支配の方法が、保護、後見、將來の自治領たる地位の何れであらうと——そしてその經濟的な擗取が繼續する限り印度の内政を語ることは、單なるユートピアに過ぎない。

本來、一國の内政は、その使命から云へば、國土と國民のために、對內的權力を確立する事が先決要件である。即ち、それによつて自己の商業及金融政策を確立し、國民の福祉に心を配り、安穩と秩序と満足を保證してやるべきである。また國民制度、及び國民の全文化財はさらにこのために貢獻するところがなければならぬ。

しかるに印度の内政はこれ等の使命を果すには餘りに迂遠である。しかも印度は、英帝國に對しては極めて大なる貢獻をなしてゐる。即ち内政は、英國といふ外國の權力によつて、印度の土地の上に、外國の商業と、外國の金融政策にとつて好都合に打建てられてゐるのである。加之、政府機關及び行政組織の凡てが、強壓的な權力手段となつてゐる。更に印度の國民制度

及び文化的所有は、直接、間接の差はあるとしても、外國の政策に役立つように構成されてゐるだけで、印度自體の本來的な對內的權力の建設及び確立には役立つてはゐない。それ故こゝで印度の内政状態をとり上げる場合には、たゞその試が問題となるに過ぎないのである。

印度の國民制度に關して言ふと、印度教徒及び回教徒問題が、約百年前から漸く強くしかも極めて消極的な形で現はれてきた。實際、八千萬人に達する回教徒の中、約六千萬人（即ち七十五%は）改宗した印度人であるが、彼等は、また一樣に、印度人の宗教的祭典に参加し、そして、印度教の偶像を崇拜してゐる。にも拘らず、英國人は、印度人と回教徒を區別し、しかも、自己の利害から、彼等を對立せしむれば漁夫の利を得るものと考へた。印度の著名な政治家は殆ど凡て、英國人の印度に於ける「離間せしめて支配する」政策の危険を再三再四經驗したし、また、それを警告してゐる。

サー・シエド・アームド・カーンは、既に一八八四年に次の如く喝破してゐる。即ち「印度人及び回教徒と言ふ言葉は宗教上の區別であることを想起せよ。……それ故、予は「國民」と言ふ言葉の中には印度人並に回教徒を含ませよ」と。かくの如く兩者の統一を證明しようとす



る警告及び倦むことなき努力にも拘らず、一九〇九年のモレーイ・ミントー改革法令は印度人及び回教徒の間に嚴密な障壁を設け、兩者をはつきりと離間させたものである。かゝる方策はマグドローナルド首相をして、次の如き批評をなさしめた事がある。即ち「回教徒の指導者達には或る英國系印度人官吏によつて吹き込まれた悪影響が現れてきてゐる。彼等は人數に相當する以上の代表者を送り、そして、印度人に與へられるよりも一層、自由に選舉權を與へられてゐる」と。

爾來、印度の全國民は印度人も回教徒もかゝる分裂を解かうと試みた。二つの信條の信奉者達は相互に宗教的な祭典に参加してゐた。しかし特に、英國議會が一九一九年モントフォード改革法令を印度に實施しようとした時代に行はれた右の如き企圖、その他の協働的行動は、謂はば「ジョン・ブルに對する赤い襪」の如き役割を演じたのである。と言ふのは英國人は、なほ依然として印度人と回教徒を對立させて漁夫の利を占めようとしてゐたからである。かくの如く、國民的統一に役立つやうな努力は凡て、直ちに英國側から或る時は權力で禁止され、或は、計畫的に拒否されて來た。しかも屢々印度人と回教徒を使喚して直接、對立させ且つ血

なまぐさい衝突を惹起させる目的で、ありもしない物語が捏造され、または尤もらしく創作された事すら決して稀ではない。

回教徒の指導者ですら現在でも、なほかゝる障壁を取除くために努力してゐる。例へば死んだマウラナ・モハメド・アリー——ガンデーの親友——は最後の圓卓會議（一九三一年）で次の如く言つてゐる。即ち「印度に關する限り、印度の自由に關する限り、また印度の幸福に關する限り、私は、第一にも印度人、第二にも印度人、最後も印度人、印度人こそ全部である」と。しかし、われわれは印度に於ける印度人及び回教徒の指導的政治家による同様な聲明と努力に就ては他にいくらでも引用することが出来る。故に國民的統一を妨げる離間的傾向は印度人及び回教徒の間にも、また他の民族の間にもなく、むしろ全く徹底的な「離間せしめて支配する政策」により印度に於ける權力を彌が上にも確固たらしめやうとする英國の帝國主義に根ざすものであることを最も明快に裏書するものである。

マクドローナルド首相、ジョン・メイナード卿、ビー・フリーラー卿、オリバー卿ヒューム氏、エッチ・コットン卿など即ち、大部分、その政治的經歷に於いて印度政府の高官であつたこと



があり、そのため印度とその國民を知る機會を有つた有名な政治家達であるが、すべて次の點を一様に認めてゐる。即ちそれは「離間せしめて支配する政策」のみが印度人と回教徒との血なまぐさい衝突を惹起せしめたものであるといふことである。帝國主義者達は、かゝる政策が印度人を鉗拮<sup>かんこく</sup>して置くのに最もよい手段だと言ふことを意識してゐた。更に英國人は「ベンガル地方の分離」の如く印度を地政的に分割し、結合し、又はその逆の方法によつて（アルマ・セイロン・ベルチスタン・アデンを想起せよ）全國民を物心兩面から絶へず一觸即發の狀態に置いて來た。このため國民は曾て一度も積極的な活動をなす機會を持つことが出来なかつた。しかも、英國人は印度の全國民力が漸次破滅を來すように印度人が非生産的な活動をなすことを最も歓迎した。その上、教育方法は、國民を組織的に對立抗争させるため家族及び文化を離間した。そこでもまた、行政組織において「離間せしめて支配する」原則が行はれた。かゝる組織は明かに、印度に、謂はゞ政治的概念の博物館を設けたわけであつて、こゝに英國人は君主政治、兩頭政治専制政治、執政官政治及び、植民地、保護國、委任統治領、屬國及び領土等を陳列して來た。これ等の概念は明かに、言葉の上の壓制政治を表現するものである。

### (三) 奴隸と内政

回教徒の外に、バリア（奴隸）があるが、これは印度の内政を觀る場合には重要な要素をなすものである。バリアは印度の原住民の一部である。純人種の見地から言へば、バリアとインドゲルマン系の印度人とは、文化的、社會的に全く異つてゐる。現在バリアは全印度に四千九百六十萬を數へてゐる彼等の低い地位は單に經濟的問題に基いてゐる。彼等はバリアと言はれるが、信仰上からは印度人の範疇に入れられる。英國政府は、一九〇九年、八千萬人の回教徒に特別投票權を附與し、そして、それによつて印度人の國民的勢力を弱めることに成功した。それと同じやうに、一九三二年、バリアにも特殊の政治的勢力を與へた。その外には英國人はバリアの經濟的又は社會的地位を向上させるやうな好意ある態度を曾て示したことはない。これに反し國民會議派はこのため絶えず努力し、しかも相當その成果を收めた。英帝國主義者の本來の目的は、當然、バリアを憲法上、印度人から分離して置くことによつて自己の陣營に引入れることにあつた。ガンジーはこれに抗議して、幾度か聲明を發して來た。即ち「我々



は登録 (Leger) 及び國勢調査に我印度の特殊階級として分類される不可觸賤民 (バリア) の存在することを欲しない。……萬一、このことを拒否するものが、私人であつたとしても私は身を以つて拒否するであらう」と。かゝる英國政府のよこしまな計畫はガンヂーの抗議と、ハンガーストライキによつて挫折し、バリアは現實には印度人と結合してゐるのである。

バリアに次いで所謂アングロインド人は印度政治の上に、極めて顯著な役割を演じてゐる。彼等は本來一六二二年以來、英國人と印度人の混血によつて現れた印度の新階級である。その數は、現在十一萬八千人に上つてゐやう(一九三一年)。彼等は、印度に於ける對英貿易、及び英國の政治的權力の完成のために、最初から、最近に至るまで相當の寄與をなしてゐる。政治的な見地に於いては、彼等は今日、印度人と英國人との間に介在する特殊の權力強化の手段となつてゐる。即ち、英帝國主義は印度に關する限り、アングロ印度人階級の上に打建てられ、それに依存し、今日その双肩にかゝつてゐる。彼等はその發生の一六三〇年頃から最近迄文化的、經濟的、社會的、道德的、政治的、及軍事的見地に於て、全く英國側に與し、従つて眞の母國たる印度には反逆して來た。而も彼等は今日、郵便、電信、鐵道の如く英國の保安業務及

び、戰略上の業務、並びに國防關係等に於いて極めて重要な役割を演じてゐる。

英國の政治家、アール・デー・マクレオド氏ですら次の如く裏書してゐる。即ち、印度の國民が自由獲得の鬭争を進め、そして英國の鉗梏を絶ち切つた場合、アングロインド人及び在印の中立的英國人とその國外移住を禁じようとする計畫をなすものはないであらうと。彼等は印度獨立成功後は何等の希望も持ち得ない。畢竟彼等にとつては逃亡か又は死滅以外の將來は考へられない。英國人は適當な時期に、アングロインド人にかかる方途と手段を創つてやる血縁上の義務がある。殆ど三百年に亙るアングロインド人の行績を考へれば、假令彼等にいまだ會て信頼を與へることのなかつた英國人ではあつたが、かゝる義務は感すべきである。

又人口政策上現在、ユダヤ人問題がなほ未解決のまま残されてゐる。印度には十年前の調査で二萬四千人のユダヤ人がゐる。彼等の行動は印度に於ても國際的ユダヤ人のそれである。即ち、ここでも彼等は不愉快な且つ危険な存在であるにも拘らず、ガンヂーですら著しくユダヤ人に同情的であり、特にバンヂト・ネールの如きは歐洲から歸國する前年、印度に於ける工業及びその他の部門にユダヤ人専門家を招致した。彼等は都市のみならず次第に地方にも迎えら



れた。印度の國民指導者達は自國に於いても、相當な専門家が、各部門にゐることを知つてゐる筈である。若し然らずとせば、諸々の部門に於いて先づ自己の國民的な力を養成すると共に自國民に缺如せる専門的知識を非ユダヤ的な方面から導入すべきである。概括して言へば、印度の國民組織はその多様性のため、内政の建設に寄與せざるのみか、却つて逆に、外國勢力の結合手段としての役割をなすことによつて、著しく障碍となつてゐるといふ弱點をもつてゐる。

#### (四) 印度の社會的缺陷

或る國民の文化はその國民の内政の第二の分枝である。假令、印度の文化財、即ち宗教、哲學、藝術、律法、徳性、道義、言語、文學などが世界無比の部類に屬するものであるとしてもそれは健全なる内政及び外交に確固たる基盤を造り上げ、そしてそれによつて對内的事件の確立のため、國民又は國家にその精神的價値を役立たせるといふ使命は決して果してはゐない。かかる目的設定とは逆に英國人は自己の實質的な目的を達成するために、印度の多くの文化財を曲解し、且誤解したと云ふ事が明らかにされてゐる。言ふ迄もなく文化財は、或る國民の統

一的な力を構成し、更に、その生活様式を具現してゐるものである。しかしながら、それは又分化し、非統一性を創造し、しかも國民的な力を否定する基礎として現はされてゐる。印度の宗教的觀照、例へば、印度教などは、人生を否定する。しかも消極的な教義として解釋され、而もそう言ふものだと世界に流布されて了つてゐる。然し、それらの觀照は、實際には、動態的な考へ方を包蔵するものであり、人生を肯定する強い教義なのである。かくて右のやうな誤解を犯した責任は、全く、ユダヤ的な唯物主義によつて強く影響された英國的精神にあることは言ふ迄もない。

同様に、又印度のカスト制度及び各種の言語に對しても、多くの誤まつた喧傳が行はれてゐる。カスト制度の起源は、人種問題及び職業及び經濟制度の中に<sup>もと</sup>覚める事が出来る。然しながらカストは或程度印度國民の、政治的な發展に對する障害とはなつてゐるが之のみが印度社會の痛とのみ謂ひ得ない。これは何れも独自のタブーと、道德と、習慣とを有つて居り、相互に完全に調和する個々の協同體さへ形成してゐる。之によつて又著しい寛容と忍耐とが修鍊されてゐる。印度教徒、又は回教徒、佛教徒、ジャイナ教徒、シーク教徒はそれぞれ、大して差別



されることなく彼等の制度の中に取り入れられてゐる。而もその相異點は何等敵對の根據とはなつてゐない。實際、彼等はその立場に應じ、正しく導かれるならば、高度な政治的權力をさへ打建て得る地位にある。同様に印度の言語財は十二の封鎖的言語協同體を形づくつてゐる。これ等の言語の力を内政的發展に利用するために、これを組織的に取り扱ふならば、非常に効果をもたらす得るのである。ところが、英國人はこの言語上の協同社會を崩壊させ、しかも、これを印度統一に對する一大バリエードと見做して來たのである。

これに反し、現代政治的な區分は、實際上、明かに、印度における何等かの文化政策的な權力の成立に重大なる障害を造り出してゐる。人種學的、及び人類學的見地から、數千年來同じ考へを持ち、且つ同じ立場に置かれた民族は、例へばベンガル、其他の諸州又は各王侯國に於ける如く、あれや、これやの特徴的な種類に分離され且つ相互分解を餘儀なくされた。印度にをけるカースト的區別、州の間、及び印度人、ヒンズー教徒、回教徒、佛教徒、キリスト教、並びに其他の宗派の間、各種の言語等の間、及び王侯國と、英系印度人との間に於ける對立は、所謂「離間せしめ支配する政策」によつて、除かれる所か、ここでは英國の至上權を更に確保

する目的を有する外部から組織的に加へられて來た。結局權力が物を言ふものだと云ふ事が明らかとなる。

又印度の藝術は、如何なる場合でも、その使命の實行を碍げられて來た。マクドナルド首相でさへ當時次の如き言葉で、かかる方策を批評してゐる。即ち「印度の藝術は最も無視されたものであり、そしてその産業的な色彩のある幾つかのものは文字通り壊滅した。しかし非常に衰へてはゐるが村落には尙、藝術は残つてゐる」と。他面、英國的藝術は例へば、ニューデリー市の建設に見るが如く、國民の意志に反して印度に輸入された。此のデリー市は、ハーディング卿が「特別の子」と名付けたもので、「世界最大美都」の一つと謂はれてゐる。これに反し、イー・ビー・ハベル氏は英國人で而も有名な印度藝術史家であるが、「數代に互り窮乏裡にある農民の財布からの搾取による官僚主義的な專横の記念碑であり政治的なプロバガンダとしては味方に對するよりも敵に對して一層有益である」と批評してゐる。ハベル氏は藝術に關する限り、印度に於ける英國の支配を「徹底的な無視と、實際的無獎勵」と云ふ表現を以つて判決を下してゐる。かくて印度藝術は印度の内部的な統一の確立手段とならなかつたと云ふ事



が英國人によつてすら簡潔に證明されてゐる。

ヨーロッパに於てお伽噺のように廣く流布されてゐる印度の社會的缺陷、例へば寡婦の火刑、幼兒婚姻、深閨屏居制などはすでに百年來、殆ど何等の意義を有つてゐないし、又は自然的にも生物學の見地からも全く説明不能なものと見做されうるのであるが、その起源の大部分は印度に於ける「白き大人の囃歌」に求められるのである。つまり、此等は大體にをいて、ロイター通信社の嘘工場で、でつちあげたものであつて英國政治家ですら「英帝國の云ひ抜け」だともみてゐる。此等の謂はゆる社會的な缺陷が、萬一、何處かに尙存在するとしてもそれは内政的建設に對する障碍とはなつてゐない。

阿片や、アルコール吸飲の如き他の社會的缺陷こそ、國民保健的にみても亦財政政策的見地から見ても明らかに内政的建設に對する重大なる障害をなすものである。嘗ては自ら全國民が宗教的、道德的、及び風土上の見地からこれ等を禁ずると共に輕蔑してゐたものである。

しかしながら英國人はこれを獎勵し、しかも時によつては武力を以て普及せしめた。思慮ある人々には、此の場合、英國政府が恰好の収入源としてゐる立場が明かに諒解されやう。かく

て英國政府は一方にをいて課税によつて利用し、そして他方において無力な防備なき國民を、大した武力を用ひずしてたやすく支配する事が出来たのである。かかる方法によつてイギリス政府は支配力を強化するために國民を壓迫し、その結果、國民は肉體的、精神的にその精力を失つてしまつた。結局、反抗の力もなく、又發展の能力も無くなつてゐる。確にかかる外國人による支配の下にあつては、印度の國民的な力は、あらゆる點に於いて、漸次崩壊し行かざるを得ない。印度の國民會議派が、かかる缺陷を除去し本來の國民性の強化並びに確立のため、多幸なる制度を創造すべく大規模な對策を講ずるに至つたのも極く近年である。

### (五) 印度内政の三方向

英國は印度に對する數百年に亙る純經濟的な支配の段階を終ると、一七五七年の初頃、遂に印度の政治的地位に干渉を開始したので、内政問題に關する印度人及び、英國人間の鬭争が惹起されるに至つた。それ以來印度の内政は大體左の如く三つの流れに分類されてゐる。

#### 一、英國的政策



## 二、王侯的政策

### 三、國民的政策

此の中、英國的政策と王侯的政策は否でも應でも全く同一歩調をとらざるを得なかつた。これに反し、國民的政策は一八八三年以來、漸く組織的に發展するに至つたものであるが、殆ど百八十年間に目覺しい發展をとげた。けれども現實的な形體と權力を備ふるに至つたのは僅か兩三年前からである。一八五八年以來、印度に於ける英國の政策は、或る點に於いて、グリーヤソン教授が明かにしてゐる様に、一種の「偽帝國主義」たる根性を示してゐる。政治的權力が英國の手に移らぬうちは、印度に在りては、一八六〇年まで二重行政制度が存續してゐた。かくて、一八六一年以來、漸次に立憲的な形骨に發展し、そして一八九二年から、一九〇九年に至る間に中央集權的強力政策が實現された。英國議會は、この制度が大なる弊害を有することを悟つて地方分權化によつて、自己の權力を再建するための新しき政策體系を樹立する事に努力した。當時、「離間せしめて支配する」政策は、特に國內的事件に於いてその公的にして周知な表現を獲得したもので、爾來印度政策は、未曾有急速な發展を遂げるに至つた。

一九〇五年、嘗てカーゾン卿がベンガル州の分離を決定した時、全印度には反對の火の手が上つた。「チラク」一派によれば「國民は、かけ引にはかけ引を、外交には外交を、又、金權力に對しては金權力を」以て對抗する覺悟であつた。かくの如き憤激をなだめんとしてイギリス人は印度に對し、新しき政治的改革的斷行を約束した。かくて一九〇九年に於ける「モーレイ・ミントの貨幣制度改革令」が登場し、之れは一九一九年まで實施された。この改革は、又ベンガル州の分離を既定の事實なりと宣明し、且つ、それによつて國民の年來抱いてゐた希望を、無慘にも覆へしてしまつた。イギリス人が何等かのいやすべからざる不正を行つた場合には、きまつて、憤激する國民をなだめるため、政治的な改革を行ふと共に、全面的に改善を約束する事が常である。之れはイギリス人が内に其の心組など無いのであるが、實際にはかくして二、三年も経過すれば次第に國民もおだやかになると考へたからである。しかしながら何れにしても新しき改革法令が世に出た時、時效にかかつた事件は總て「既定の事實」と云ふ空疎な表現を以て擁護され、しかも國民を更に新しき命令により束縛して來た。これは印度に於ける英國の時の利益を利用する戰略であつた。



かくてこの法律の改正（一九〇九年）の直前、回教徒は英政府當局と協調して「全印度回教徒聯盟」を結成した。これも「離間せしめて支配する政策」の現れである。現にこの抱合の後には回教徒の願望と要求とはも早や印度教徒と同一ではなくなつた。政治的、經濟的、社會的又は文化的性質の如何に拘らず、凡ゆる事件に於て回教徒は特別の代表を要求した。新しい改革は喜んでかかろ望望を法律的に承認したのである。

また總督の行政會議に於いて初めて印度人が議員として参加を許され、又印度の國務大臣の閣議には二人の印度人、即ち各一名の印度教徒及び回教徒が参加した。尙その他實際上には餘り重要性のない二、三の法律改正が行はれた。しかしながら、英國的「民主主義」にとつてはこれ等の改正は、極めて重大な意義をもつてゐた。即ち英國的の自由主義は印度追隨派の信頼をかち得、同時に國民主義者と追隨主義者とを離間せしめやうと欲してゐたからである。追隨主義者は此の法律改正に對して全く満足を表してゐた。しかし、これに反し極端な國民主義者は痛く失望を経験した。といふのは新しき改正は豫め要望されてゐた議會主義的政府機構を設置するといふ可能性が全然考慮されてゐなかつたからである。故に、彼等はあらゆる手段をも

つて計畫的に國民を煽動した。一九二二年には更に「回教徒——リガ」が國民會議派の如く印度に對する自治を要望した。しかし會議派が自治領の地位に準ずる自治を要求したのに反してリガは印度人に適當した自治制度を要求したのである。明らかに回教徒リガが英國政治家の影響を間接に受けてゐたことがわかる。

過激論者は、この英國の不確實に忍従し得ず、而も英帝國の支持を直ちに排除すべく闘争を開始したが、彼等はこのボイコット運動を續行すると共に、之を強力なものとした。かくして一九一四年、世界大戰が勃發した時、遂にロイドジョージは追隨主義者の援助を受け、印度に多くの約束を與へることによつて回教徒及び土侯を味方の陣營に引き入れる事に成功したのである。勿論その時も印度は内政状態を改善すべき絶好の機会を逸したのである。何となれば、戦争が終らぬ中にイギリス人は、再び周知の如き強壓手段を取るに至つたからである。回教徒追隨論者及び過激論者は再び團結し、そして英國の主權に對し「ボイコット」と言ふ古めかしい闘争手段を以つて挑戦した。かくて一九一九年には所謂「モンターギュー——チェムスフォード法」によつて再び新しい法律上の改正が加へられたが、またもや大なる失望を喫した。即ち



中央政府には一、二人又は數人の印度人がメンバーとして参加を許され、そして州政府にも同じく二人の印度人の大臣が置かれるようになつとはいへ依然として印度人は久しく自治制度を採用し得なかつたのである。またこれ等のメンバー及び大臣は一定の投票権を有することになつてゐたが、何等かの形において國民的な力を強化する権限は與へられなかつた。第一に、これ等の契機は追隨論者一派から出て來たもので、そして彼等の利害は國民會議派が代表するものとは異つてゐた。第二には、追隨論者の所謂幸福な「專制政治主義」の原則は英國の民主主義によつて詳細に規定されてゐたのである。確かに州に於いては印度人は若干の權利を獲得し所謂兩頭政治が行はれるに至つた。しかしながら全事件は、「離間せしめて支配する」原則により、しかも、全く極端な處理を受けたのである。「印度」と言ふ概念はこれら法律改正に於いて全く消滅してしまつた。

だがこれに代つてカスト、種族、宗教、宗派、黨派等が表面に現はれて來た。そののみならず選舉の方法は多種多様に規定され、而も、それが個々の州では別々に實行された。アングロ印度人、中立的な英國人、印度人、基督教徒、回教徒、シイク教徒等々は夫々自己の代表を有

つてゐた。その他、個々の經濟的集團及びその他の集團は、地主、領地所有者、歐洲人、歐洲的印度商人、大學生等の如く特別に分類された。かくして「離間せしめて支配する」原則は最高の支配權を達成したのである。

#### (六) 州の政治とガンヂーの反抗

しかも、洲に於いて行はれてゐる「兩頭政治」は單なる幻想に過ぎなかつた。即ち、この原則によれば第一に、文化的部門、たとへば、教育、衛生制度、地方行政等は委任部門と名づけられた。然しそれ等は多かれ、少なかれ、印度人の支配下におかれてゐても、現實財政上の權限は無かつた。第二、純經濟的、政治的並に、軍事的な事項は留保部門と名づけられ、しかもこれは直接、英國人の支配下に置かれてゐた。中央政府に於いてはこれに反し、印度人は制限付の執行權すら、未だ嘗て與へられた事はなかつた。

英國議會が印度人に繰返し約束したやうな自治の可能性は行政機關に、お呪禁に等しき、しかも英國本位の改革を行つたモーレイミントの改正にをいても、亦「離間せしめ支配する」政策



を單に完全に實行したモンターギユ、チエームスフォード改正に在りても無論、全然片影すらも認められなかつた。英國的な概念に従へば、これらの改正は印度政策に於ける大なる進歩を意味する。しかしながら、實際には、一八五八年から一九二一年に至る間全く何の進歩もなく英國の權力が一段と強化されたにすぎない。この兩頭制度に對して十年の試験期を必要としたのは、英國の有名な「時により利益をうる政策」に従へば、むしろ當然であつたのである。しかしこの制度は州に於いても拒まれたので、勢ひ新しい法令が導入されねばならなかつた。この行政制度及び印度にける政治的狀態を吟味し、それに必要な變革を加ふるために、英國議會は、サイモン委員會を設置し、印度の政治問題を組織的に討議する爲め圓卓會議を開くこととした。竟に、これは漸く實現して一九三二年、初めて圓卓會議開催の決定が發表された。

印度の政治狀態を改善し、印度國民の要望を充足するため、茲數十年來、幾多の委員會、討議が行はれ、反覆して約束は與へられたが、何等の結論にも到達せず、しかも英國は有效な干渉を意識的に行つた。それ故、印度の國民會議派は、ガンジ一の指導の下に委員會や、陳腐な議論をポイコットし、打ち壊すことに決心した。一九二七年から一九三七年迄國民會議派は、

反抗、消極的抗爭、英國商品のポイコットのごとく、彼等獨特の武器をもつて倦むことなく闘争を續けた。一九三〇年と、一九三四年の間に彼等の運動は、最高調に達した觀があつた。英國政府も亦これに對し、峻烈な對策を講じ、一九三二年の半ばには殆ど全印度が軍律の下に統治された事があつた。英國の軍隊と、サッチャグラヒ（印度國民會議派黨員）との間に、根本的な闘争が行はれた。印度人の軍隊は、平和的に闘争する國民會議派黨員に對し同志的な感情から發砲することを拒んだ。殆どすべての政治的指導者及び十萬人以上の印度國民會議派黨員は、英國商品、アルコール、阿片のポイコットと、税金拒否の運動に参加した。が彼等は何れも、虐待され、壓迫され竟に投獄された。にもかかわらず、國民會議派黨員は抗爭を止めなかつた。かくて、英國の印度における政策、特に全體の行政機構は殆ど破滅にひんしたので、遂にイルウィン卿は（今日のハリファックス卿）外交手段によつて巧にガンヂ一と妥協することとなつた。

ガンヂ一はまたその後、圓卓會議に出席したが、全く失望し、不満を抱いて歸國した。と言ふのは圓卓會議の提案、計畫、及び決定は單に印度を一層完全に英國の鎖に縛りつけやうとし



たにすぎなかつたからである。即ち印度の自治については、一切問題にされなかつた。州自治及び聯邦政府は、單に印度に對する名目上の政治的進歩を示すものに過ぎなかつた。英國議會は、この新しい行政制度を一九三七年の初に實行に移そうと欲したが、しかし、脆くも失敗した。一九三七年の初から同年の七月まで、印度には根本的に言へば、充分強力な政府は存在せず、かくて一般的な政治的デットロックに逢着したのである。當時新憲法に従ひ州自治が行はれるに際して、獨裁の地位にをかれる州知事は、州内の事件に干渉せず、又は手を出さぬように約束してゐた。そこで國民會議派は之れに同意する旨を聲明し、そして一九三七年七月十四日政權を握つた。彼等は最初、選舉により多數黨たる地位を占め、六州にをいて、屢々自己の内閣を組織し、後又三州(N・W・Fシント、アッサム)を支配下に入れ、ここでも自己の内閣を組織するに至つた。

かくの如く自己の内閣を組織し得たにも拘らず、ベンガル、パンヂヤブ、兩州を除く印度全州にをける國民會議派は、洲にをいて知事に、全行政にをいては總督に、獨裁的全權を規定せる新憲法に不賛成なる旨を聲明した。加之國民會議派は「自治體審定書」によりて政權を得て

ゐるのであり、従つて一般的自治権によるのではなく、特殊の選舉権によつて政權を得てゐるのである。その上、イギリスは王侯國とその他の諸地方とを嚴密に區別して、その政治的モットーたる「離反せしめ支配する」政策を強化した。この政策を根本的に覆へすために國民會議派は權力を把握したが、而も、英國の利益となる聯邦政府をつくらうとは欲してゐない。この權力把握以來、國民會議派としては州の自治を實行すると共に道徳的、文化的、社會的、經濟的見地に於いて若干有意義な對策を樹立し、且つ部分的ではあるが既に之れを實行に移した。之れが同派革新政策の片鱗と見られるものである。

### (七) 國民主義者の理念分類

既に指摘した如く國民會議派内の印度國民主義者はその政治的理念、及び活動からみて次の如く分類される。

- 一、右翼……これは印度の追隨主義者から成り、立憲的に一定の制限付で自治領たる地位を要求するものであつて、英國としても、これに對しては過渡期的なものとして不満でな



いことは明かである。右翼の理念は印度に對して「充分開花せるデモクラシー」をもたらすにある。印度土侯の支配下にある多くの人々は、既に、多かれ少なかれ、かかる要求を抱いてゐる。しかしながら、彼等は依然として英帝國に屬する事を欲してゐる。

二、中央派……これは今日特に多數黨をなして居り、既に一八八五年——一九〇四年には會議にをいて、支配的な勢力を有つてゐたし、同時に現在の國民會議派の基礎をなしてゐるもので、しかもガンデー及びその一派によつて考へられた計畫及び要求を堅持してゐる。その理念は、自治領たる地位で、英國の束縛をうけたり、又は英國側から與へられた憲法の範圍内で内政を獨立せしめる事でもなく、むしろ印度に對する、即時且完全なる自治を實現するにある。しかしながら暴力と革命的な方法——過激論者が欲し又努力する如き——をもつてせず、むしろ完全なる平和手段及び消極的な反抗によつて之を獲得しようとしてゐる。追隨主義者の場合に於ける如く彼等も印度に對して民主主義的政府形態を打立てようと云ふのである。

三、左翼……以上のプログラムとは反對に左翼は印度の共和主義者及び他の過激論者からなり、そして一九〇四年——一九三二年の間に國民會議派に於いて特に勢力を有するに至り印度をして、英帝國及び一般に英國的支配から迅速に解放すべきことを要求してゐる。左翼は印度に聯邦共和國を打建てんとし、そして地方 (Land) に對しては、官僚的な政府形態を要望してゐる。

それのみではなく、近年新しい政黨「前進派」(Forward Block) が前國民會議議長チャンドラ・ボースに依つて國民會議派の中に造られた。この黨は「非暴力」及び「非協力」の原則をモットーとする。しかしこれは結局州の統治に對し(州の自立)十八年間に互る鬭争の後漸く獲得した権限を放棄することに他ならない。この方法が何等かの意義を有するか、又は大なる弊害をもたらすかどうかは現在のところ何れとも斷定出来ない。彼等の努力は印度に對する獨立的な憲法をつくり、そして、英國の立憲的獨裁に従はない點にある。そればかりでなく彼等は明らかに次の如く言明してゐる。「英國の敵は印度の味方である。この認識に従つて我々の外交政策を樹立せねばならない」と。更に彼等は政治の一切が印度の手に移さるべきであると主張してゐる。



以上の例からまた、内政の弊害は概ね印度人自らの責任だと云ふ結論となる。總ての黨派が一つとなつて、しかも印度の幸福を望むならば、土侯の考へ方がどうであらうとも、それとは全然無關係に、彼等の目的を少なくとも、部分的には直ちに達成してゐたのであらう。

印度の國民會議派内部に於けるこれら總ての黨派に共通的な、利害は明らかに彼等が英國の束縛から印度を開放し、そして貿易及び、財政的事項に於いて英國の特權を排除しようとする點に有る。彼等は相互的原则によつて、あらゆる國民に、同一の可能性を、特に貿易問題に於いて與へようと欲してゐる。而して現在の狀態をかう推測する限り、印度の將來は右翼にもまた左翼にも存せず、むしろ中央派殊に前進派の消長にかかつてゐるものと思はれる。

#### (八) 印度を昏迷にする土侯

前顧の如き検討により明となることであるが印度國民會議派黨員と——例外なくあらゆる黨によつて遂行すべく企圖されてゐる——英國議會によつて規定されてゐる内政との間には強力な鬭争的對立がある。これに反し、土侯國及び英領印度の間には國內事件に於いては、注目す

べき偶發事件とか公然表面化する嫌惡感等も存在してゐなかつた。それは當該國自身、又は印度の他の何れの地方に關する場合でもそうであつた。最近國民會議派は土侯國に於いて宣傳を行つたが、久しく土侯は印度の他の部分から全く孤立してゐた。特に二三の例外をのぞけば土侯はあらゆる意味に於いて殆んど無力である。彼等はオードンネルが指摘してゐる様に「學童」の如き存在である。しかも六百餘の土侯及び、その祖先は或る意味で三億五千萬餘の印度人を數代に互つて、英國の隸屬下に衰退せしめた責任者であると謂へる。政治的見地からみると、土侯は多かれ少かれ傀儡に類するものであり、英本國と間取引も行つてゐる。ただ經濟的にみれば一打許りを數へる富裕土侯が彼等の中に光つてゐる丈だ。土侯問題は表面上極めて複雑してゐるが、嘗てマクドナルド首相の警告通りに行ふならば客易に解決される問題である。彼は次の如く言つてゐる。即ち、

「われわれの直接關係を有し、そして、われわれが土侯の未丁年の場合に統治するこれ等の小さな政府（土侯）は明かに何處か本來、所屬すべき、土着本國（Native-Land）に合併されるべきである。」



經濟的なまた尠くとも、表面上政治的権限をも有せぬ土侯は、彼等が藩屬せる大土侯國または同一の地理的乃至政治的所屬關係にある州と併合することによつて、同化作用を行はねばならない。かくしてこそ、初めて全印に對する健全なる内政上の發展が可能となるのである。さもなければ前進派やボースの動向が如何あらうとも當分、印度の政治的状態は變化もなく、昔のまままで何等改善されぬであらう。

假令、若干の大土侯が自身立法的な會議及び立憲的な行政制度を創つたとたところで、土侯は二三の例を除けば恐らく眞の主權者となり、全くの獨裁政治を行ふであらう。其故、全土侯國の政治的發展を今から考慮する場合に、土侯國と爾餘の印度を緊密な關係に入らしめ、民主的基礎の下に全印度の政治的統一を打建てようとすることは、英國議會が、表面上要望し、そして國民會議もその最高の目標と考へるところであるが、これは不可能に近い。世界の考へ深い政治家は誰でも印度の土侯は印度の自由喪失を招來した責任者であり、印度の स्वराज (自治) のため激しい鬭争をなすべき責任があると認めてゐる。然し土侯側にすれば、その個人的利害は、英國の屬國となつてゐる場合の方が、印度の獨立聯邦政府の監督下に於けるよりも一層よ

く保護されることを知つてゐる。かかる土侯の心理を、底の底までよみとつてゐる英國は、かくて新憲法に於いて次のことに同意を與へた。即ち土侯が自發的に同意せぬ限り、土侯と英政府との現存關係は、新に近き將來樹立さるべき印度聯邦には引繼がれぬこと、換言すれば、土侯には何等の影響をも與へぬと言ふことこれである。しかし他方に於いて英國議會は計畫的に土侯がその國內に於いて、既に國民會議派と密接な關係を有する民主的アデーションの力を弱化せしめ、しかも土侯國內に特殊の反國民會議派組織をつくらせ、國民會議派と土侯國との握手を出來得るかぎり妨害せしめた。これによつて土侯と國民會議派が握手しないことが英國の利益であるといふことが明に推斷されるわけである。

しかし土侯本來の權力及びその法律上の權利、更に英國議會の立法上の権限を觀察するならば、そして英國人が印度の健全な政治的發展を配慮する意圖を實際に持ち合してゐるならば、英國人は、直ちに土侯の聯邦政府合體を許すか又はその要望をなし得る權力を握つてゐる筈である。この點に關しエム・ヴィスヴェスワラヤ卿は次の如く指摘してゐる。「印度政府は印度土侯をして聯邦に加入せしむるに充分な權力と影響力を持つてゐる。」と。又バタチャール教



授は、法律の見地から次の如く説明してゐる。「法律的及び憲法的見地からすれば、印度國家は國際法に於ける地位をも有してゐない。主權國でも半主權國でも又は保護國でもない。さらに對外的及び對内的主權も持つてゐない。従つて印度聯邦政府が出来た場合、主權の全部をこれに移すことには何等の法律的な障害もない。」

にも拘らず、英國議會は聯邦政府への参加は土侯の任意事項と宣明した。抑々英國議會は、土侯が如何なる法律上及び憲法上の權利を持つてゐるや否やに就て考案があるのかどうか、又英國議會が土侯に對して有するその本來の主權を秘密にしようとしたかどうか、更に土侯を聯邦から出来るだけ敬遠すると共に、現在の分離線を平衡に維持することが英國の自由放任政策の戰術であるかどうか、之が主權をさらに確保せんとするものであるかどうかは、何れも極めて疑問である。

政治的にみると從來セイロン、ビルマ、及びベルヂスタンは印度の内政上特に未解決な課題を残してゐる。勿論これらの地方は歴史的、地理的、文化的、及び經濟的見地から結局地政的に考察して印度に屬してゐる。しかるに英國人はこの等の地方を漸次印度から引離し、帝國直轄

植民地、英領ビルマ、ベルヂスタンの如き名稱を冠したのである。ハウスホーファー教授がビルマに關して言つてゐるように、これ等諸地方は、やがて「印度と支那との間の緩衝國となるであらう」。しかしこの場合でもこれ等の地方が印度の資本及び軍隊によつて征服され、そして人類學的、人類分布學的及び經濟的に、部分的ではあるが強く印度に結びついてゐると言ふことは輕視し得ない。加之、ビルマ及び場合によつては、ベルヂスタンは漸次緩衝國とみなされる場合、タイ、雲南及び部分的に、イラン及びアフガニスタンの地位は、徐々にその價值と意義とを失ふであらう。果然ビルマは日本の主導力によつて獨立の方向へと進んだ。

何れの場合にせよ、地政學的に觀察すると印度の内政は四つの種類に分けられる。即ち、一、國民會議派による統治、二、土侯統治、三、非國民會議派統治、四、政治的に離れた印度諸地方が之である。内政問題に關する以上の検討によつて、數年前まで全く英國の統治下に置かれてゐた印度の大部分が、現在州自治を規定せる新憲法實施後は、國民會議派によつて統治されてゐることが明かにされたものと思ふ。現在尙國民會議派の勢力圏外に置かれてゐる二つの州（ベンガル及びバンジャブ）があり、ここでは、名目的に回教徒が多數を占めてゐるので、



障害をなしてゐたが、漸次會議派の支配下に入りつゝありと傳へられてゐる。しかし、尙士侯問題は未解決のまま残されやう。土侯が自發的に、國民的統一の達成に助力し、このため場合によつては彼等の個人的利害を犠牲にする覺悟を有するならば、近き將來に於ける印度の内政上の安定は大した困難をみずして實現するであらう。

要之、印度に於ける政治的に分離せる地方に關する諸問題は當分解決し難き事實として存続するであらう。

## 第四章 英帝國の核心としての印度

### (一) カラクリの犠牲

三たびインドに足跡を印した著者は、竟に印度の研究を實際には拋棄して了つた。それは誰でも印度の研究は一步足を踏み入れると先づその複雑さに目を奪はれ深入りすればする程、眩惑されて了ふからである。三千年來同じ生活をして來たのではないかと思はれる様な人達が黙々と英本國の擄取に甘んじてゐるかと思ふと、他方にはモダンもモダン、バックワードでなければなりませんといふ様な人達もゐる。

人種といへば、大別して四つ或は五つに分れ、黒いのもあれば白い人もゐるし、灰色のもゐる。こまかく分けたりきりが無い。話す言葉さへ無數に分れ、五百三十九種の言語がインドに流通してゐると數へた丹念な學者が獨逸にゐる程である。其上宗教に於いては、印度教回々教



分裂と言はれて有名な丈に、此のヒンズー回々兩教が實はいくつもの分派に分れ、而もそのほか、シーク教、キリスト教、佛教等の信者の數も侮り難い勢力を有つてゐる。生産の様式にしてからが、非常に遅れた封建的な殘滓が、平氣で高度な資本主義の様式と混淆してゐるといふ有様だ。而も之等に關聯して所謂「カスト」とか「藩屬國」とか印度特有の概念が數へ切れぬほど加はつてくる。

政治的分野に入つてくると、民族運動が戰時平時を分たす強い民族信念から迸り出て、本國の指令に動く總督の嚴重な鉗制に反抗し、向けられる大砲にひるまず突入して行く。獨立を叫ぶ激しい政治的現象の後を追ふて飛行機の機銃掃射が浴びせかけられても彼等は平氣で「先驅者の悲哀」だと觀念する。

英國が此の國を占有すると總ての土地を餘す所なく英國國王の所有だと宣言して了つた。農民が支拂ふ最も重要な租税たる地租は借地料の形に變へられた。これらの借地料化された租税を集めるために、借地人が指定され、その指定された借地人は、自分で轉借人を指定して、更にそれらの轉借人は又自分の轉借人を指定するといふ風にして次第に寄生蟲的階級が生れて來

た。又これと相並んでこんどは高利貸が出て來た。此の高利貸は不景氣が來て借地料を支拂ふ金のない百姓達に高い利で金を貸す用意がいつも出來てゐる。かうした仕組の結果として印度の百姓は總ての財産を失ふと同時にその未來への希望をも段々失つて行つた。

一切を失つた百姓達は町へ流浪に出た。忽ち都市は失業者で氾濫し、一つの職場を安い賃金で競争し合つた。それでも民衆は職を失ふか、でなかつたら最少限度をさへ割つた生活費にも足りぬ賃銀や俸給を奪ひ合つた。斯うして彼等は永遠に浮ばれぬ生活、ごく低い水準の衣食住すら満足に與へられぬ生活を餘儀なくされてゐる。これが今日の印度國民生活經濟の様相なのだ。だが、これこそ英國の印度政策のカラクリの犠牲なのである。

## (二) インドは民族體か

インドは民族體か——印度人の生活や氣質や理想や、そしてその政治、經濟、社會の現象が餘り複雑なのに幻惑されると、印度は單一民族體をなさないのではないかといふ疑念すら起つてくる事がある。



一體「民族」とは何か？といふ事から簡單でも規定してかゝらねばならないが、民族の概念は随分六ヶ敷い。普通「國家」と「人種」と「言語」とを指標として説明してゐるが必ずしも正しくはない。ドイツのシュパンといふ人は「民族協同體」の理念によつて説明してゐるが、一番科學性があると思はれる。だが日本の見解に立つて最も科學的だと信ぜられる民族の概念を述べてみよう。

民族は人間の或る共通性を有つた集團であり、それは必ずしも人種的なものでなく、歴史的に社會的に創られて來たものである。従つてそれには尠くとも四つの共通性を有たねばならない。即ち言語の共通性、領土の共通性、文化的傳統の共通性（民族性）、經濟的社會的共通性が之れである。——高麗文化と出雲文化を吟味しながら現代の社會的經濟的一集團となつた半島と内地の關係を考證すれば最もよく判らう。——又更に經濟的社會的連繫の精神は、本來の性質上、封建或は、それ以前の社會に於て生れる筈はないのであるから、民族は人間が封建制を自ら脱しやうとした時に始めて形成される。

それではインドは單一民族を爲すか。一寸見きはめは怪しい様だ。

第一インドの言語は四つ以上の系統に分かれ、更に無數の分派があり、大別しても五十以上に及び而も統一的共通性を有たない。第二にインドの自然的境界は非常に明瞭であつて一つの別世界をなす様に考へられてゐるが、西北國境の如き必ずしも閉鎖的なものでなくアレキサンダーや回教徒の如きは易々とこの國境を突破して侵入した歴史を有つてゐる。第三に文化的な傳統的心理、いはゆる民族性があるかどうかと云ふ問題は、インドの場合最も怪しい様に思はれる。インド精神生活の中心をなす宗教が、ヒンズー、回教に完全に分かれ、兩者の間に共通性を求める事は困難である。第四に經濟的社會的連繫は自足的閉鎖的な共同體を中心とするインド社會に全くなかつた様にも考へられ、又現在此の地には型の異なる生活様式が錯綜しつつ併存し、共同體に固執する老人と近代的工場に働く労働者との間には何等の連繫もない觀がある。

### (三) 逆の眺め方

インド人の氣質や生活や精神から検討してみても、ではインドは一つの民族體をなさないものであらうか。



先づインド人の有つ共通性だが、言語が幾種類もに分かれてゐる事は確かにインド文化發展の障礙物となつた。しかしながらインドは必ずしも共通語的なものを全く有たなかつた譯でもない古來バリー語、アバランシア語の如く割合共通に通用した言語があつたし、近代に至つて回々教徒がインド征服を行つた後は逆に回々教の言葉をインド化せしめ、こゝにペルシア語、アラビア語、アバランシア語を混合して、新しい言語（ヒンドスタニー語、ウルズー語）等を形成した。之れは今やインドの共通語として少くとも一億三千万人、多く見積れば二億以上の人々の間に話されてゐる。してみれば必ずしも言語上の共通性が絶無だとも言ひ得ない。次にインドが過去に於て他からの攻略を受けた事は事實である。然しインドほど地理的統一性を有つ所も尠からう。その廣大な面積にも拘らず三方を海に圍まれ、一方は峻嶒な山脈に切られて殆んど完全な自然的統一體をなし、而もその領土内に何等の自然的障礙を有たないインドは、第三のみではなく、インド人自身からも完全な統一體と思はれて居り、封建の時代すら統一の要望が常に考へられて來てゐる。

第三に共通的民族はないか。此は特に宗教的對立を強調する人々の道げ道となつてゐるから

稍詳しく検討してみやう。インド文化に固有な特徴が一つもないとは謂へない。又インドの風俗、習慣に何等の共通性もないと考へられない。非常に多くの種族に分れ乍らインド程統一ある慣習法を持つ所も少いであらう。インドに統一ある民族性がないといふ人達は、結局宗教的對立に根據を措くの外はない。成程、宗教對立の深さはインドの基本的特徴の一つをなしてゐる。然し乍ら、インドの回々教がヒンズー教的色彩の濃い事は事實だ。詳しく言へば八千萬に達する回教徒の中、約六千萬人の（七十五％）は改宗したインド人であり、彼らは一様にインド人の宗教的祭典にも参加し、更にインド教の偶像を崇拜してゐるに拘はらずイギリス人はインド人と回々教とを區別し、而も自己の利害から彼等を對立せしめて漁夫の利を得て來た。又シーク教も大體回々教とヒンズー教との混淆と言はれて居り、佛教もここではヒンズー教に近いころした點から見るとインドの宗教はヒンズー教の絶大な影響下にある事が判る。インド文化の中心をなすもの、またヒンズー教的思想である。

ヒンズー教がアーリア的なものから出發したとは言へ、現在インド人口の七〇％近くが此の宗教に屬する事は此の宗教的影響がアーリアのみに止らず、インド人大部分の傳統的心理とな



つてゐる事を示してゐる。又回教、ヒンズー教内の分派にしても、簡単に言へばインドの多民族性に基くものと言ふ事が出来、その分派的傾向も種族的對立の減退と共に統一化の方向に向つて進んで來てゐる事を指摘し得る。

又第四の經濟的社會的な觀點からは、前顯の様にイギリス人が最初にインドに見出した姿は農村共同體を中心とする自足的な閉鎖的な自然經濟であつた。而も之は王朝の幾變遷にも拘らず、一貫して變らないインドの社會的經濟的構成の基底をなし、ここに所謂アジア的停滯社會を作りあげて來た。然し資本主義は自らの顔に似せて世界を作る。イギリス近代工業製品の侵入は忽ちにして、此の閉鎖的な農村共同體を突き崩し、一擧にしてインド社會を世界市場の中に入れて了つた。此の過程の中にイギリス産業資本と、インド封建地主との抱き合が見られたとしても、同時にインドに於ける資本主義の發展が開始された事は否めない。此の變革は單に一地方で起つたものでなく、インド全體が負ふべき運命であつた。

然し更に細かくインド人の氣質や生活や精神から検討してみることに依つてインドが一つの民族體である事は疑ひ得ない。如何にインドが複雑な様相を帯びやうとも此の事の核心に變化

はない。かくてインドの民族運動は單純でない。會議派で出す協議の一つ／＼に意義を求め、ジンナーの言葉に宗教的對立の根源を探す。斯うした現象の研究も勿論必要なのである。

#### 四 「バリア」と「アングロインディアン」

インドには回教徒の外にバリア（奴隸）と稱する階級がある。これはインドの性格を觀る場合、極めて重要な要素をなす。バリアはインドの原住民の一部である。純然たる人種の見地から言へば、バリアとインドゲルマン系のインド人とは文化的社會的に全く異つてゐる。現在バリアは全印度に四千九百六十萬人を數へてゐるが彼等の低い地位といふのは單に經濟的問題に根ざすのである。彼等はバリアと言はれて侮蔑されてゐるが、信仰上からはインド人の部類に入れられる。イギリス政府は一九〇九年、八千萬の回教徒に特別投票權を附與し、それによつて、インド人の國民的權力を弱める事に成功した。

一九三二年バリアにも特殊な政治力を與へた。此の外にはイギリス人はバリアの經濟的乃至社會的境遇を向上させる様な好意ある態度を曾て示した事はない。反之國民會議派は此の爲め



に絶えず努力し、而も相當成果を收めて來た。英帝國主義者の本來の目的からはバリアを憲法上インド人から離して而も自己の陣營に引入れる事にあつた。ガンジーは之に抗議して、幾度か聲明を發して來てゐる。英政府のよこしまな計畫はガンジーの抗議とハンガーストライキによつて挫け今日バリアはインド人と結合してゐる。

更にバリアに亞いでアングロインデアンは印度政治の上に極めて顯著な役割を演じてゐる。彼等は本來一六一二年以來、イギリス人とインド人の混血によつて現はれたインドの新しい階級である。その數現在十三萬八千人、政治的に見ると、彼等はインド人とイギリス本國との間に介在する特殊の權力強化の手段に用ひられてゐるものと謂へよう。明瞭に云へば英帝國主義は印對に對する限り、アングロインド人階級の上に打樹て、これに依存し、而も今日その双肩に懸けられてゐる。

アングロインド人はその始め、即ち一六三〇年頃から最近迄文化的、經濟的、社會的、道德的、政治的及び軍事的見地に於てイギリス側に與し、而もその母國たるインドには徹頭徹尾逆して來た。そして今日、彼等の多くは、郵便、電信、鐵道の如くイギリスの保安事業及び、

戰略上の業務及國防關係といふ極めて主要な役に就いてゐる。

#### (五) 阿片とアルコールによる民族弱體化の標本

インドは世界中一番多く阿片を産出する。そしてその約半分がインドで消費され、残りの半分が輸出されてゐる。阿片の輸出を盛んにする爲に、イギリスは支那と二年間も戦争してゐる(阿片戦争)。インドが消費する阿片は毎年約百七十萬ポンドに及ぶ。その製造、吸飲は我が日本に紹介されてゐる様に決して秘密の阿片窟で行はれてゐるのではない。官立の阿片販賣所が七千もあり、その製造も純然たる政府の事業となつてゐる。そして世界の醫學によつて定義されてゐる人體に有害な阿片の吸飲を奨励してゐる。イギリスがインドに侵入する迄インドに於ける阿片の吸飲は極く穩かな程度で、今日の如く公然且つ廣大には行はれてはゐなかつた。それは國民の宗教上の信條がこの事を堅く禁じてゐたからでもある。故にガンジューも

『イギリス國民が來る迄インドでは如何なる政府もその税金を欲しさに阿片の吸飲を奨励し阿片の害毒を此の國に植付けた政府は嘗てない。阿片の消費は今世紀に入つてから著しく増



加してゐる。英政府は恐るべき墮落と言語に絶する惨めさと、癒し難き病苦と災厄をインド國民に齎した」

と憤慨してゐる程である。だが英政府は阿片の課税なしにはやつて行けないと宣言する。一九二三年に政府の緊縮委員會が發表した報告書によると「阿片の販賣高を維持する事が重要な財源である。」と強調してゐる。曾てアッサムといふ地方でガンジーを奉ずる人々が酒と阿片への反対運動を起した事がある。此の道徳的な説得によつて此の地方に於ける阿片の消費高は五十%も減じたが政府當局の干渉に逢つて此の運動に参加した六十三人中四十四人は投獄されて了つた。

容易に制限し得る世界中に於ける阿片の生産高を醫學的及科學的に必要な量に制限するならば勿論阿片の密輸もその巢窟も根絶し得る筈だがイギリスは之れに反対する。何故か？ 曰くインド民族を弱體化する政策上との關係からなのである。

何故インドを阿片と酒の悪影響下に置かねばならないか？ 何故町々の阿片販賣所が阿片溺飲者の群を誘惑するか。英の印度政策の裏にはこんな悲惨も織込まれてゐる。即ち田畑や工場

で働かねばならぬ印度の女達が子供達に飢えて泣き叫ばれて堪へられぬ。そこで手近な阿片を子供達に與へるといふ方法が聰明な英人によつて教へられ、かくてインドの平均壽命が僅かに二十六年といふ結果と民族の弱體化とが齎されたが之れがイギリスの思ふ壺なのである。(子供達の九〇%迄は二歳になる迄に阿片を飲まされてゐる) 而もボンベイでは今日毎年一千人の子供の中六百六人は死亡するといふ驚くべき統計が示されてゐる。又それがベスト、コレラ、癩病、結核等が猖獗を極める理由なのであり、一九一八年から翌九年にかけて流行したインフルエンザが飢餓と阿片と酒による害毒によつて一層弱められてゐたインド人の一千二三百萬人を死に至らしめた理由なのである。——大戦四年の全參加國が失つた總人員より多い——。哀れなインド人達は英の此の計畫的な政策の犠牲として壽命が盡きるずつと以前にかうした不幸な死方をせねばならない。而も英のインド支配の間は此の言語に絶する苦難と絶望から解放されない。

#### (六) 英帝國の核心



鼠色のナフトール染の様な衣を纏ふた女達が牛乳の代りに阿片を子供に與へて泣き叫ぶのが止むと水桶を擔つて仕事にかゝる。生色のない顔に炯々と眼光丈けが鋭く、骨と皮ばかりの姿で街に仕事を求めつゝ財布を振つて思案する。阿片を購つては又よるめき乍ら消えて行く男が多い。土壁の燻つた陋家のカンテラの前に家族揃つて、皿に三本の指を突込んで小器用に手早く口へ辛い食物を抛り込む。人間の生活といふよりは動物的存在だ。それでゐて一度捕はれの身となり英官憲の銃砲の前に立たされても、戦慄しないでニコ／＼として銃殺されて行く。それが信念からか暗愚からかは我々には解し得られない謎を残すのである。

だが三億七千萬、戸籍さへハッキリしない國民も多いので正確には四億とさへ謂はれてゐる此らのインド人が悉く無感覺なのではない。成程低い生活と去勢された身心乍ら熱帯民族特有のネバリも残つてゐる。傳統的文化から來る聰明といふよりも、理智的な半面も枯れてはゐない。だがイギリスの搾取的欺瞞政策を反撥する丈けの力はもう有つてゐない。殊に宗教關係によつてイギリスの所謂「離間して支配する政策」の犠牲となつて國々は反目し合ひ、その上未だ開發されぬ富源や、限らない物資に恵まれつゝ人種、宗教、言語の雑多さも障碍となつて彼

等は獨立出來ない。

僅かに十二三萬のイギリス人に牛耳られつゝ四億の人口を擁して英本國四千五百萬を脅かす力とはならず、その歴史に呻吟して行く。六百を算へる諸土侯が、全體の四割の領域を統治してゐても之は決して印度人の味方のみではない寧ろ英帝國の道具の様な立場が多い。

イギリス國王が皇帝といふ稱號をもつたのはインドに對する關係から始まる。「我が帝國云々」と尊大な事を言つてゐるのは、一切インドに關聯する場合に限られてゐる。英國の帝國としての經歷はインドに於て始まり、而も此の國を支配してから、世界にその領土を擴げて行つた。例へばインドの防衛の爲めと稱してアデン、南阿もサイブラスもイラクもベルジスタンも更に支那や東南アジア、竟には太平洋と印度洋に跨るあの重要な土地を次々とイギリスは領有して了つた。嘗て副王（總督）カーゾン卿も「インドはアジア大陸に於ても亦世界中に於てさへ最も有力なものたらねばならぬ」と言つた事がある。インド中央に位置してゐる事、驚くべき死亡率に不拘、常に人口は増加しつゝある事、多くの商港をもつ事、戰爭に備へて量的に間に合ひ、アジアへもアフリカへも軍隊をイギリスの壓力でとまれ彈丸の代りに供給してくれる



といふ有力な軍事的資源がある事。又豊富な軍需資源はそのまま最近の生産工業の設備と相俟つて國防力を充實してゐる事——これらは悉くインドが測り知れぬ價値を有つてゐる事を證據立てゝゐる。實にインドはイギリス防衛の作戰本部なのである。香港、シンガポールは唯その一面的軍事作戰據點だつたのである。

斯うした事柄を考慮に入れると「若しインドが崩壊する場合、イギリス帝國も亦崩壊するであらう。何となればイギリス帝國の核心はインドだからである」

といふ言葉には正常なものがあると思はれる。

インドは「世界的勢力への黄金の鍵」でありインドがイギリスの支配を受けなくなつた時イギリスは世界的勢力を失ふのである。ビルマ裁定後の皇軍が長驅してベンガル灣を越え本格的にもう一度セイロン島のコロンボやトリンコマリに空に鵬翼を伸ばす日、それはインド四億の民に黎明が告げられる時であり、同時にイギリス帝國に寂滅の挽歌が奏でられる事を意味する。何となれば印度洋の制空海權はやがて獨伊の地中海戰略とスエズに握手すれば東亞と歐亞の脈絡となるからである。

## 第五章 轉換期印度の政治情勢

### (一) 會議は踊る

植民政略の根幹が搖ぎ出して國民會議派の態度が硬化すると、チャーチルはワシントンに飛び英皇弟グロスター公がインドに急行したのは昨年である。何れも彙を掴む英國の敗戦糊塗策だ。共に世界の注目を惹くに足るが宣傳劇の興味以外一步も出なかつた。二千萬トンの船舶を世界に誇つた英國が、物資輸送の船舶をアメリカにねだらねば、四千五百萬人の生活も軍事工場の運轉も怪しくなつて來た證據である。更に北アフリカは獨伊から東部南部アフリカは日本から脅威を受け、急ぐインド西アジアの軍略上の諸問題等が、旬日に互つてワシントン會談として放送されたが、第二戰線展開問題にせよ、船舶問題にせよ、討議はし得ても成案は始めから危ぶまれた。唯チャーチルが訪米した時は必ず大宣言を發する過去の例によつて、一昨夏の



大西洋會談後の所謂「大西洋憲章」や昨年十二月の會談後の「反樞軸宣言」の如く、此の時の會談後も「米英戰爭協力宣言」といふ様な形式を發表してお茶を濁した。

然し如何に「戰爭目的や戦後協力」に關して宣言を繰返し發表してみても、米英自身の敗戦を糊塗する以外の何物でもない。當時尙「陸戦に於て一時も占領した事なく、海戦で一地をも占據したためしなき」米英であつた。チャーチルの懇請によつて「インド問題」を俎上に、大西洋憲章の趣旨と同様のものをインドに適用する旨の大宣言を行つて我國へ對するデモストチオンとなす事が關の山であらうとは最初からの噂であつた。

時恰もインドには英皇弟グロスター公とリンズゴー總督とインド英軍總司令ウェーヴェルの首腦會談が開かれてゐた。ワシントン會談の側面掩護射撃が效力を有つ程インド内部は餘裕をもたず、ガンジー、ネールにアザット議長迄が當時ベルリンに逃避中のチャンドラ・ボースなどの協力に刺戟されて對英闘争開始に意見の一致をみたといふ國民會議派始まつて以來の各派協調一致の獨立運動推進が決して行つた。

インド民衆の澎湃たる内外の獨立運動の氣勢と革命勢力の表面化とは食糧饑饉に拍車をかけ

られて既に一切手後れとなつてゐる。リンズゴー總督はガンジーと民衆を離間して對英信頼をつなぎとめんとし又、ウェーヴェル總司令官はインド離反の防止策として強壓武斷政策を採り、既に空軍を動員して機銃掃射による暴動鎮壓に乗り出すといふ軍政首腦部の區々の政策となつて現はれた。グロスター公の居中調停乗出しも何等奏效せず、インドに於ける英國の軍政機關の對立によつて内部から崩壊すべき危機もあり、インド獨立運動の防壁はガンヂーの決意、チャンドラ・ボースの東亞出現と積極的獨立運動の推進と共に、英國の煩悶を後へにインド民衆の鬱勃たる離反獨立の決河の勢は阻止すべくもない。樞軸牽制とインド抱擁の足搔きに、ワシントンにニューデリーにカサブランカに、アダナにと會議は踊つても結局徒勞に邁い。

## (一) 轉換と決算

かくて世界各戦線に於ける英國の敗退は一應頼られる米國にのみ幸ひしてゐるかに見える。カナダは平時から産業的經濟的従つて政治的にさへ米國に依存してゐたから殆んど造作なく開戦と同時にアメリカ國防力の一部に編入され、實質的には英領から離脱して了つた。東亞に於て



もイギリスの相亞ぐ没落はアメリカの濠洲奪取を解明的にした。殊に蘭印の滅亡とフィリッピンの抹殺は狼狽するアメリカに濠洲を代替せしめる大きな動因となつた。即ち濠洲は殆どイギリスのものではなく、アメリカの方を向いてゐる。唯それも珊瑚海海戦に亞ぐシドニー港強襲作戦の頃を區切として米國からも孤立を餘儀なくされ、所謂「太平洋の孤兒」となつてゐる。これはソロモン諸島の奪還に幾分米は退勢を挽回したとしても運命的には同斷である。殊にアフリカ東南方インド洋上佛領マダガスカルを強盜的に占領して、インド洋の作戦態勢を維持せんとした英國に對する日本のスワレズ灣奇襲作戦は、その根據地をアフリカ南阿へ後退せしむるものとして重大な意義をもつ。インドを始め南阿聯邦その他アフリカ諸領地にも次第に之れに倣ふ國々が出て來るであらう事に、今世界の視聽は蒐められてゐる。

殊に傾きかけた大英帝國にとつて今最も重大な問題は人的及物的資源の補給に最後の望みをかけてゐるインドの歸趨である。凡ゆる術策を弄し、インド人を未開野蠻のままに重壓し、飽くなき搾取を続けると共にインドの二大政黨たるネルルやガンヂーの國民會議派と、ジンナーの印度回教徒盟聯を相抗争させインド人の要望たる「インドの獨立」を幽遠の彼方に推しやらう

と企てたイギリスの對印政策は、大東亞戰爭の徹底的敗北によつて、皇軍の脅威が直接にインドに加はるにつれ、否應なしに大轉換を餘儀なくして行つた。

此の場合にもアメリカは歐洲に於ける第二戰線の計畫と並行して恰も濠洲のそれの如く、インド奪取の陰謀を忘れてゐない。現に昨年クリップスが英特派使節として老獪なインド懐柔にかゝつた當時でも、アメリカも亦ルーズヴェルト大統領の懐刀として陰然たる勢力を有つジョンソン大佐をインドに特置して其の側面援護と見せかけ、實際にインド籠絡の怪腕を振はしめてゐた。そしてクリップスがロンドンに引き揚げた後でも尙、ジョンソンはニューデリーに居据つて縦横の暗躍を續けた爲め、遂にインドを繞る英米暗闘劇的一幕となつて現はれたが其の直後はチャーチルからルーズヴェルトにインドの防護を相談せねばならぬ土壇場に立到つてインドの情勢は猫眼も昏ならぬ急變を示して行つた。

本來大東亞戰爭勃發當時のイギリスのインドに對する政策は尙強硬なものであつた。一昨年十二月インドの國民會議派及回教徒盟聯を除く従つてインド政界の主勢力を除外して最も穩健な各政治團體代表を網羅した全印非黨會議がイギリス政府に對し



(イ) インド國民政府の組織

(ロ) 行政會議のインド人への明渡し

(ハ) 地方自治政府の復活

(ニ) 戦後に於ける自治付與の時期明示

等數項目の要求を提出した時チャーチル首相は一月二十日、昨年初頭のイギリス議會でインド統治に關し演説し、「インドの最有力者數人がなした提案は、現在戦火が開かれてゐる際、實現は未だその時期でない」と、強く之れに反對してゐたものである。

然るに皇軍のマレー制壓、亞いでシンガポールの無條件降伏、ビルマ戡定といふ新展開の諸情勢によつてインドの受けた動搖は甚だしかつた。特に昨年二月十八日、皇軍シンガポール入城當日行はれた東條首相の聲明はインド民衆に非常な力と活力とを與へ獨立要望の聲は全インドに滿ち溢れて來た。かくてイギリスの狼狽甚だしく、急に内閣の大改造を行ひ、前駐ソ大使クリップスを國璽尙書として戦時内閣に入閣させ印度懷柔に乗出したわけである。

因みにクリップスは労働黨出身の左翼で、親ソ派の驍將、共產主義ソ聯に知己多く、且つソ

聯の南下に備へ、インド懷柔の一石二鳥を狙つたチャーチル改造強力内閣の新布告として注目されたものである。その後皇軍の進撃は一層目覺しく、三月九日には全南印の無條件降伏となり、十二日戦捷第二次祝賀の當日又も東條首相はインド濠洲に呼びかけ大演説を行つて濠洲の反省とインド民衆の蹶起を促したものである。日本が内に總選舉後翼賛の政治體制に新發足をし、外に先づビルマの要衝マンダレーを陥落して、蔣の生命の綱と頼むやいふよりは英米の誇稱する政略的援蔣ルートを斷絶し、次で全ビルマはが領有に歸して益々國威を内外に示して行つた。この事は蔣がさなぎだに憂へてゐる石油と米の唯一の補給路の喪失を意味するのみか英領インドの足元に火がつき日本の脅威と共にイギリスの狼狽はその極に達した。

殊に泰國の好意によりバンコックに本據を置く在外インド獨立運動の統一戦線の結成は、英米を焦燥せしむるに充分である。況んや此の新聯盟の運動が本國に於けるガンジー、ネール等國民會議派の同志と獨立への實踐決意に於て一致した事、ベルリンにゐたチャンドラ・ボース(同派急進派)の全的支持を受けるといふ力強い新展開を示して行つた。

而も六月十五日からバンコックに在外インド人代表によつて獨立大會が開催され、樞軸國側



からも有形無形の支援を受けてゐる。殊に大會第一日、東條首相等のメッセージによつて明確にされた「民族獨立の運動は民族自身の手によつて」のスローガンは一層堅持され、本國に於ける獨立運動戦線に於てもガンジー、ネールの提携は再び強固となり、澎湃として捲起るインド内外に於ける獨立の熾烈な民族的欲求は止まる所を知らない。佛印、交趾支那のインド人二千名を始め全東亞の領域、アフリカ、近中東諸地方からも支援又は直接代表を派遣して氣勢を擧げた。かくて没落英國の前途も此のインド獨立革命の運動と共に新しく決算を迫られた。

### (三) 國民會議派の實力

一體インドの政治的動向を決定する主勢力は何といつても國民會議派である。本來國民會議派は、一八八五年當時インドに在住してゐたイギリス人アラン・ヒュームの主唱によつてといふよりも、英政府及印度總督の命を承けて、當時漸く盛り上つて來た民族主義に對する緩衝地帯たらしむべく創立されたもので、初めは印度におけるイギリス人と印度人との協同、印度の行政機關に印度人を多く採用せしむる事を目標とするといふ至極穩和なものであつた。はつきり

いへば自由主義的な團體たる存在であつた。故に當初の會議派主領ゴカールの時代は、印度政廳さへも好意を示してゐた程で、一九〇〇年當時に於てさへ、同派の政策は、印度における自治政府の確立を目指すと同時にイギリスの主權下に在る事を是認し、イギリス帝國內のインドといふ立場を絶對的のものとしてゐた。

然るに一九一四年に歐洲戦争が勃發するに及び、その翌年隱和派ゴカールの病歿を契機として積極的な反英派が會議派の大勢を左右することになり、會議派は依然反英積極運動を執るやうになつた。即ち一九二九年には、遂に「印度國民會議派の經濟目標とする所は印度全域をイギリス帝國の覇權から脱する完全獨立にあり」といふ所謂ラホール宣言を發するに至つた。

それから後の會議派の運動は、漸進的な分子でさへも、印度完全自治を要求し、大戦を以つて眞の實現の好機であるとの叫びが高まる一方、歐洲に於ける戦雲は容易に收まらず勝敗の數の豫想がつかなくなかつた上に印度民衆はその子弟を戦線各地へ送り出してゐるのみか、巨額の戦費を負擔しつゝあつたため、完全自治獲得要望の聲は漸次民衆の間にまで擴がつて行つた。そこでイギリス政府ではモンタギユ印度事務相が、イギリス議會において「イギリス政府の方針



は印度人を印度の行政各部に益々多數採用し、且つ英帝國の機構内部における一地域として、やがて責任政府を組織せしめるといふ目標の下に自治制度の逐次実施を行ふ」といふ聲明を行つて、印度輿論の緩和を計らざるを得なかつた。

所がこの口約は全くイギリスによつて反古にされたのみか、却て印度人の自由を束縛する法律の制定となり、ガンデーは起つて國民會議派を指導し、不服従運動によつて印度獨立に邁進することとなつた。これに對するイギリスの彈壓も亦猛烈で會議派の指導者達は次々に逮捕され一九三〇年までに投獄されたもの二萬七千名に及んだといはれる。(拙著「印度は懇へる」参照)

此の間イギリス政府は、一九二七年十一月英印紛争の根本的解決策を見出すためと稱して自由黨領袖サイモンを首班として印度現地の調査を行はしめ、これに基いて所謂英印圓卓會議なるものを三回に亘つて開催した結果、一九三五年に至つて、改正印度統治法即ち印度憲法が制定された。これは英領印度の十一州及び六百有餘の土侯諸國等の全印各地を綜合して印度聯邦政府を組織し、英領印度の人民に自治權を與へ、從來英領印度の一州を成してゐたビルマを印

度から全く分離させるといふ三つの要素から成立つてゐた。

聯邦組織に關しては、土侯諸國それらの住民過半數の賛成によつて聯邦加入の意思表示をしたものと見做し、土侯諸國六百餘の中少くとも二十數ヶ國の加入があつて初めて聯邦組織が結成されることとし、英領印度十一州の行政機構としては、イギリス當局の任命する州知事の下に制限選舉により州立法會議及び州政府が設けられることになつた。その結果原則としては州政府は自治を與へられた理になつたが、州知事は治安維持の緊急な場合等には、州議會の議決如何に拘はらず、必要な措置を取ることが出来る權限を保留するといふので實質上は決して完全な自治ではない。

又この新憲法によると、印度皇帝即ちイギリス國王の代表者である印度副王は、聯邦議會における否決權を初め軍事、外交、信教等について獨裁的權限を享有することとなり、新憲法の下においては印度の完全獨立はおろか、完全自治領の地位さへも得ることが出来ないこととなつた。

これに對して國民會議派が反對したことは云ふまでもなく、愈々一九三七年二月に、新憲法



に基く英領印度各州の州議會總選舉が行はれることになつたが、會議派は「新憲法廢棄」の旗幟を掲げ、更に制限選舉を廢し普通選舉により眞の國民議會を開き、印度人自身の手によつて印度憲法を改變制定すること、小作制度の改革及び農村負擔の是正、八時間勞働制及び義務教育の實施、其他社會政策の斷行、政治犯人の待遇改善等の標語を翳して大々的に運動を開始した。その結果、會議派は十一州の内六州において絶對多數を占め、二州においては過半数とまでゆかなかつたが、それ／＼第一黨となり、合せて八州に於て州政府を組織するといふ壓倒的な大勝を得たのであつた。あらゆる奸策と壓迫の中に行はれた總選舉において示したこの大勝こそは、印度の將來を示唆するものであつた。

#### (四) 利用された派内の對立

其の後の印度獨立運動において國民會議派が最も大きな役割をつとめて來たことは云ふ迄もなく將來も亦一番大きな力となるであらう。然し、會議派の内部が完全に一致してゐたわけではなく、ガンヂー、ネール、ボース、それ／＼意見を異にし、急進派あり、漸進派あり、中間派

ありといふ工合に幾多の弱點を有つてゐる、又民族主義の基礎に立つ爲め、その中に凡ゆる「人種」「種姓」「宗教」「職業」を網羅し、インド民族全部の大團結を目標としてゐる。つまり印度教が大部分といつても回教徒、シーク教徒、ジャイナ教徒、それに婆羅門僧や賤民さへ入つて居り、國家主義者、共產主義者等雜然としてゐる所に缺點がある。殊に國民會議派の主力をなす印度教徒と、印度回教聯盟との軋轢は、印度獨立の一番大きな障害と見られて來た。老獪なイギリスの狙ひは實にここにあつた。常に裏からこの争ひを助長し、表面では印度の自治はこの兩派の完全な提携が先づなされてからだと逃げてゐたのである。しかし急激に勃興した民族運動の浪は、かう云ふ内部的な障害を吹き飛ばして了つた。

イギリス政府が國民會議派に期待してゐるのは、ネール一派の反全體主義思想にある。即ちイギリスの見解によれば、國民會議派は「民族主義」と「反全體主義」との二つの要素から成つてゐる。民族主義とイギリス帝國主義との間には妥協は困難であるが、印度の反全體主義と目下の大戰に於けるイギリスの立場には大きな共通點があり、この點から見ればイギリスと印度との妥協は必らずしも不可能ではないといふのである。この派の代表者が即ち、ネールであ



る。イギリス政府がクリップスを印度に派遣したのも奥にこのネール以下の國民會議左派との間に共通點を見出して印度の協力を得ようとの魂膽であつた。大東亞戦争の勃發に際して先に投獄中だつたネールを釋放したのも、その目標はここにあつたのである。

しかしクリップスの狙ひは完全に失敗した。全印度民衆を満足させる解決案を持たぬイギリス政府が、インド各派の抗争を使噓し、その間隙に乗じて壓政を持續しようとするのは止むを得ない所であらうが、インド民衆の自覺と、世界情勢の急變は、最早イギリスの傳統政策を以つてしても印度を懐柔することを許さなくなつた。残る手段は、密かに用意した武力彈壓であり、ウェーヴェル政策の斷行である。

印度は幾度もイギリスの新提案を拒否してゐる。そして颯起する毎に大虐の嵐に見舞はれるであらう。しかし所詮榮譽ある獨立が自然に熟柿の如く落ちて來ることは絶對にない。嵐の後にこそはじめて「印度人の印度」は實現するのである。此の英官憲武力の嵐と民族主義の革命の暴風とは錯綜して起つてゐる。否既にウェーヴェル・リンリスゴアの對立を縫つて民衆颯起といふインド離反の暴風は荒い雲行にその片鱗を示して行つた。

### (五) 英印會談以後

英印會談は前顯の如く策士クリップスの強引にも不拘一應決裂したがインド内政の混亂はかくて一段と拍車をかけて行つた。

一體インド各派によつて拒否を表明されたイギリス側の提案は外交史的に吟味すべく、極めて多くの意義を有つてゐる。要約すると

(イ) インドは英國の反樞軸戰完勝後に聯邦として自治を許すこととし、これがため印度新憲法起草委員會を設置する。

(ロ) 新憲法は受諾することを要せざるインド内の各州には引續き現在の憲法による地位を維持する權利を保留する。

(ハ) 國防は依然英國で管掌するがインドに軍事會議を設けインド人代表を参加せしめる。但し此のインド人代表の任命權は英國が有つといふのであつた。

クリップスは印度側の強硬態度に慌て、本國に請訓の結果、印度に國防相を置いて會議派領



袖ネールをその椅子に据えるといふ妥協案を出したのである。だが印度側殊に會議派の要求してゐるのは国防相の椅子ではなく、国防權自體の委譲にあつた。軍の統帥權を依然ウェーヴェルに握らせておくのでは形式的に印度人を国防相に任命しても無意味だと主張した。他方また若し英國が印度に對して軍司令官をも含む一切の国防權を認めたとすれば英帝國の王冠中の最も美しい寶石たる「印度」の放棄を意味する事となる。殊にガンデーの信念は印度を戰爭に捲込む事自體に飽逆反對してゐるのである。

かくて會談は決裂してクリップスは四月十二日印度を一應引揚げたが、此の經過に東亞戰局の驚異的發展、殊にベンガル灣を中心とする我がインド洋の大戦果がインドの指導者や一般民衆に日本の實力を十分知らしめた結果があづかつて力あるは謂ふ迄もない。決裂後英國は勿論インド問題にここで終止符を打つ筈はなかつた。本國はしばし靜觀して、リンリスゴ―總督とウェーヴェル軍司令官に委せて根本的な處置を米國との協議にもとめた。此の結果が總督の民衆懷柔政策と軍司令官の焦土化政策の對立と化して了つた。即ち總督は六月十三日インド各地に抑留中の共產黨員二千四十名を悉く釋放して對ソ媚態によるソ聯の協力と英ソ條約成立に呼

吸を合はすと共に、専ら民衆籠絡を企圖した。反之ウェーヴェルは印度を焦土化しても強壓政策以外方途なしとして、ベンガル州始め東南部一帯五州に互り戒嚴令さへ施行して次第に軍政地區を擴大したものである。

而も此の時國民會議派内部の對立は永年の拮抗を一擲して、ガンジー、ネール、アザット、ボース何れも歩調を一にして對英決戰の態勢を整へるに至つた事は印度内政の劃期的事件であり、印度自體の大轉換を示すものとしてインドの決算を豫想せしめた。

たが然し一體インドは印度人の印度とするのか、英米人の印度とするのか。アジアの印度とするのか。前大戦では英國の爲め百三十餘萬の大軍を派し、二億四千萬ポンドの軍費、二億五千萬ポンドの軍需品を提供したに拘らず、戦後に印度が得たものは何か。唯英人の不信と不義であつたではないか。ベルリンと東京にゐた印度の志士兩ボースも共に此の點を幾度か繰返しラジオを通じ民衆に懇へて來た。又我々も印度が又しても英國の手管にかかる事は見逃し得ない關心を有ち、樞軸側が協力して精神的支援を吝まない理由でもある。

東條首相が謂ふ所の「印度人の印度」建設は刻下の急務であり好機でもある。英の覇權を脱



し、獨立の面目を保持し、我に協力し、政治的經濟的に有無相通するに至れば東亞を英米から奪還せんとする我々の運動、共榮圈建設戰にその效少しとしない。我が印度洋作戦の大眼目が印度及印度洋に於ける英國勢力の撃碎にある事はその實績の示す所である。敵は他迄英國である。インド三億八千萬の民衆を決して敵としない。

此の明白な理義を解するものは國民會議派としては、領袖ネールに非ず、議長アザットにあらず、ガンヂーに非ず、ボースの如くである。だがジンナーの回教徒聯盟も、今次會議派と提携したもの、究局の目標たる北印度に彼等の獨立王國を分立せんとするバキスタン主義を抛擲するには至るまいと思はれた。従つて之れ亦日本の眞意を何處迄解し得るかは疑問である。だがその後回教徒聯盟も、國民會議派の統一戰線に急激に合流の大勢となつた。インドが依然英國の軍事的支配に甘んずるならば、インドは英國撃滅の爲めに行ふ皇軍の攻撃によつて大なる戦禍を蒙る事も亦己むを得ない。此の決意も亦インド全民衆の對英協調の爲めに戰線が統一されるといふ一臂の力ともなるであらう。

## 第六章 印度再生の原理とガンヂーの思想

### (一) ガンヂーの本體

印度の民族運動と國民會議派とガンヂーとは同義語として今日世界に通用してゐる。今年七十四歳といふインド人としては稀有な生命記録をその多難なインド民族運動史に刻みつゝも眞にガンヂーの本體と思想を理解する事は容易でない。これも三度インドに足跡を印した著者も實際には既にインドの複雑さに眩惑され研究も抛棄し勝ちな理由なのである。

ガンヂーは思想家であると同時に實際家であり、政治家であると同時に宗教家であり、その複雑な性格と思想内容と實踐方式とを眺めると全くインド的な特異性に充ちてゐる。而も過去三十年、南阿に於ける苦酸の出發から計算すると五十年、殊に歐洲大戰中及び大戰後のインドの政治はガンヂーを除外して論じ得ない。インドに起つた民族的覺醒の暴風に彼程大きな役割



を演じた者はないからだ。ガンジーの思想を論ずる爲めには此の思想と人生觀を流轉させた彼の若き時代に遡らねばならぬ。

### (11) 第三階級「吠舍」の出身

印度教——婆羅門——カスト制度、此の一聯の概念なくしてインド人の社會生活は理解されない。印度人の七割近くが印度教を奉じ、之はインド古來の宗教たる婆羅門教に由來する。従つて婆羅門を尊敬し、業服輪廻を信じ、牡牛を神聖視する事婆羅門教と同じである。唯印度教はカスト Kaste (獨) Caste (英) (族姓又は種姓の謂) を奉ずる。「印度教とは印度社會組織の別名だ」と謂はれる程複雑極まる宗教である。その内容は科學的に説明し得ない。信仰の對象は木石、動物、生殖器等の靈から聖者、幽鬼、半神、無數の寺院殿堂に至る迄、神と名のつく數も三億に上ると謂はれてゐる。

かゝる宗教が獨特の風俗、習慣、禮儀、作法、道德の社會的規範等と絡んで信者の生活は全く世界の奇觀を呈してゐる。殊にその道德乃至社會生活の規範として印度教の特色をなすもの

は何といつても「カスト問題」である。

カストは科學的に「社會階級制度」だと簡單に規定し得ない。ガンヂス河流域に原住してゐたドラヴィダ族が、外來のアリアン民族に征服されて、多數の小邦國に分裂し、征服者は又その勢力の大小によつて、階級を別にして行つた事から發生したと言ふ事は正しい様である。唯「マヌ」の法典によるとカストの起源は「梵天」にあり、ブラーマの口からは婆羅門が、双肩からは刹帝利が、腿からは吠舍が、足からは首陀羅が生れたといふ事になつてゐる。故に初期のカストは次の四階級を意味してゐた。

- 1 婆羅門 (Brahmin) (バラモン) (最上の階級にして僧侶に限りその數少く絶對尊敬を受く)
- 2 刹帝利 (Kshatriya) (クシャトリア) (第二位王侯武士階級にしてその數も尙多からず)
- 3 吠舍 (Vaishya) (バイシヤ) (征服アリアン族の弱小階級農牧商工を主としてその數稍多し)



4 首陀羅 (Sudra) (スードラ) (被征服ドラヴィダ族にして賤業階級に屬し、人口

數最も多し)

此の四階級は婆羅門教時代には關係嚴重を極め、身分職業は世襲で固定し、他階級との結婚も認められなかつた。

然るに年代を経て人口も増加するに従ひ、征服階級の前三者間では互に下級の女子との結婚が許され、且つその子孫は別種のカストを作つて行つた。他方下級男子の上級女子との結婚は許されぬが、之れを犯した場合も亦別種最賤のカストに落された。謂はゞ、これらのカストは無数の「副カスト」を發生し、竟に現在二千三百以上を數へてゐる。而も、原則として彼等カスト間では結婚、飲食を共にせず、一定の職業を守るといふ(此の内婆羅門のみは如何なる職業にも轉じ得る)掟となつて居り、時代と共に現在若干は變化しつゝあつても之が複雑な印度社會生活の根底となつてゐる事は事實である。而も此の他に不可觸賤民(untouchables)——ガンヂーは之を「神の子」(Harijan)と稱し、五千萬人の此の汚穢階級を首陀羅の下位に置く事は印度教の汚點として此解放を叫んでゐる。又此の意味からガンヂー派の機關紙も「ハリジヤ

ン」と稱し相當の發行部數をもつてゐる)といふカスト以下非人階級が特殊部落をつくつてゐる。彼等は學校、寺院、公共物に立入る事も禁ぜられ、悲惨な社會的地位に置かれて奴隸労働は上等の方で住家食物さへ充分でない貧困なものが大部分である。

従つて印度の宗教改革者や先覺者の中には此のカストの撤廢を印度獨立の前提條件としてゐる者が多い。

ガンヂーは四階級は或程度迄是認してゐるが、ハリヂヤン階級の存在は否定してゐる。そのガンヂーは大體どの階級に生れたかといへばカスト三位の「吠舍」であつて、インドを征服したアリアン民族の中では最下位であつて此の意味では家柄はよくない理だが、職業的に政治家として代々名を成した傳統を有つてゐる。

(三) アフリカとガンヂーの因縁

ガンヂーの名は印度には頗る多い。マハトマ・ガンヂーと呼んでゐるが彼の本名はモハンダス・カラムチャンド・ガンヂーといふ。「マハトマ」とは「偉大なる靈魂」の意味で印度人が



奉つた尊稱である。

一八六九年十月二日西部インドのボンベイ州、カチャワルのボルバンドルに生れたので今年七十四歳、印度男子の平均壽命二十三年二月（日本の四六年五月の約半分——一九三一年調査）に比すれば全く例外的である。印度人が「マハトマ」と奉稱して神格化するのも當然と謂はねばならぬ。家柄から言へばアリアン系（印度征服民族）であつてインドの原住民族ドラヴィタ族の系統を驅使して來たらうが、僧侶、王侯武士に亞ぐ牧農階級に屬する祖先を有つてゐる理だ。然し、この階級迄は職業上卑賤階級の上位であるから職業的自由もあつた爲め、その生家はカチャワル王の諸國に代々有名な政治家を出してゐる。彼の祖父や長兄もボルバンドル王國の總理大臣であつた。父はその後ジュット王國の宰相に轉じた爲め、ガンヂーも七歳にして同地に移り、其處の小學校を卒つた。ハイスクールは郷里に戻つて卒業し、ロンドンに行つて高等教育を受けた。

英國は植民地の王侯貴族乃至有司豪家の子弟を本國に招引して英國的教育を授け、現地懐柔の用具にする事は常套手段となつてゐるが、宰相の子弟に生れたガンヂーも此の平凡な英國的

計畫コースを一應踏んだ理だ。

四年の間英國で法律學を研究し、辯護士の資格を得て一八九一年に歸國した。印度の習慣に従つて七歳にして婚約し、十三歳で結婚してゐる。英國留學は其後の事である。歸國すると直ちにボンベイ高等法院で辯譯士をしてゐたが、英國仕込みの知識青年ガンヂーも此のまゝなら地方王國の宰相に迎へられてお終ひであつたらう。然し、カスト的には比較的卑賤な「吠舍」の副種姓たる「バイシャ」に屬する事と、之が、ジャイナ教と深い關係がある所から、その中心思想もジャイナ教（耆那教）の教理に由來するもの多く、そのアヒサム（不殺生）が好例だと謂はれてゐる如く、特異な情熱と人格と精神とを作り上げて行つた事は一層彼の人生行路を非凡にする原因であつた。殊に彼の母が熱心な信仰家であつた事もガンヂーの宗教的人類愛の精神を育む源泉であつたらう。

彼が二十四歳の時（一八九三年）南アフリカから招聘を受け、インド人移民の權益に絡む訴訟事件を辯護する爲めに渡航した。そして其處で海外に於けるインド人は己が權益を保護し公正な處置を要求してくれるべき自身の本國政府なき爲め孤立無援の痛ましき状態にある事を知



つた。此の社會的體驗がガンヂーの公共的生涯へ發端する動機となつた。

南阿滯在一年の豫定は白人のインド人壓迫に抗して實に二十二年の長きに亘り、殆んど永住を決意せしめたのである。

彼は先づアフリカに於ける同胞の權益の爲めに闘ふ事を自らの使命と感じ、必死になつて彼等の訴訟事件に盡瘁した。彼の今は有名な無抵抗主義的抗争の原理は、その當初南アフリカ及東アフリカ地方に於けるアジア人に對する不當の法律を向ふに廻して闘ふ際に適用されたものである。彼は繰り返し、捲き返し、闘争を續行し、靜然たる抗争を續け、自ら進んで正義の爲めに苦酸を舐めた。

イギリス政府當局は凡ゆる直接的及間接的手段を以てガンヂーを抑壓せんとしたが、ガンヂーは自若としてひるまなかつた。一再ならず、彼は殘虐なる襲撃を受けた。然し、尙それは眞理の道を行く彼を阻止すべくもなかつた、而も奇異の感を一般に有たれるのは、此の限りなき苦惱の中に尙彼は「イギリスの友である」と叫び、イギリスの政治的不正と闘争しつゝ「ブル」や「ズル」に於ける戦争中にはイギリスに助力を與へ、義勇軍や擔架隊を組織したりした事である。

ある。

一九一四年大戰の勃發當時はアフリカにあつてイギリス政府に反抗し、堂々たる聖戰の陣を進めてゐた彼であつたが急遽イギリスに直行し、英國留學中のインド學生を集め義勇軍を組織してイギリスの爲めに戦はんとした。

一九一五年の初め彼は印度に歸國した。ガンヂーが猫の手も借りたい緊急時の英國に其の反抗を中止して奉仕を申出でたのは、その奉仕と犠牲とを以てすれば、石の如きイギリスの頑迷な心をも動かし得ると信じ、祖國印度及英帝國支配下の屬領諸國の人民が、かくて自由と平等の地位を與へられるであらうと考へたが故に外ならなかつた。

ガンヂーはかくて永い間或る意味でのイギリス讚仰者であつた。だが現在のまゝの印度を見る事を好まなかつた。ジャイナ教の家に生れ、母の敬虔な信仰に育まれた彼は流血を嫌ひ戦争を憎惡した。愛國者たる彼は祖國印度が一日も早く自由を獲得せん事を翹望した。だが彼は自己犠牲と内部的な力によつて自由の得らるべきを信じ、暴力による自由の獲得を否定した。

歐洲大戰に直面するや、彼はイギリスに奉仕して英國を動かす事は印度に平等自由の地位の



與へられる好機と信じたのであつた。

#### (四) 眞理と非暴力

アフリカやインドに於ける種々な活動によつてガンジーの名は次第に知れ渡り、且つ新しき抗争法の創始者として有名となつて行つた。故にバンジャラ地方に紛擾が起り、ガンジーが敢然としてその抗争を支持すると決した時、彼は最早や未來に於けるインド獨立運動の指導者として注目されてゐた。されば彼が所謂「眞理把持運動」(Satyagraha) (Satyagraha) を提唱した時、多くの人々は巨大な希望を以つて之を歡呼し、運動の盟約書が起草されると幾千の人々は忽ち之れに署名した。此の盟約書には次の様な文面がある。

「吾人は之等の法律並びに將來任命される委員會が適切と考ふるが如き法律に従ふ事を慫慂に拒否するであらう。更にまた此の抗争に於ては忠實に眞理の道を辿り、いやしくも、生命、人體、財産に對し、何等の暴力をも揮はざらん事を爰に誓ふものである。」

眞理と非暴力の二大支柱に立脚せる「サッチャグラハ」によつてその民族運動が展開され又

指導されてゐるのである。サッチャグラハといふ言葉は一般に「ガンジーの英國統治權に戦ふ方法」であると解されてゐる。つまり「非暴力直接運動」と稱する事が出来る。眞理と非暴力とを信仰として此の運動に参加する者をサッチャグラハと謂ふ「非暴力直接運動参加者」の意に解すべきである。

#### (五) 暗黒法案

大戰終末して、一九一九年擡頭せる印度民衆の政治意識を全然無視した英政府は「國民會議派」の急進派の活動の彈壓を加へんとして、特別法案可決を提議した。約束の自由を與へる所か、苛烈な彈壓が豫示された。英政府は「ローラット委員會」として知られてゐる委員會をつくりインドに於ける革命運動の發展状態を調査せしめた。そして此の委員會の意見書は一九一九年二月六日帝國立法議會に一つの法案の形をとつて上提された。「暗黒法案」としてインドに於て一般に知られてゐる法案であり、之は全インド民衆を燃え立たせたものだ。此の法案は、何等の取調を要せず如何なる人々をでも捕縛し投獄し得る權限を官憲に附與するといふ特質を



有つてゐた。従つて凡ゆる方面から激しく反対され、積極派でさへ排撃した。唯一人のインド人も賛成投票しなかつた爲めに中央立法議會で否決された。然るに一九一九年三月此の法案は實施されて了つた。反対演說會がインドの津々浦々に開かれ、全印度の言論機關は之れが排撃を開始した。インドに於けるガンヂトの華やかな闘争行爲の時代が始まつたのは此の時期であつた。彼は敢然として蹶起し、インド民衆の精神を捉えた。

アメリカの有名な著作家が喝破してゐる様に、キリストと雖どもその存命中はガンヂー程の聲望を世界に輝かせはしなかつたらうとの評には一理がある。ガンヂーは此の「暗黒法案」施行後の最初の日曜日、四月六日を以て「國民的哀愁の日」と定め之を宣言した。此の日は一切の業務を停止し民衆は斷食して「暗黒法案」彈劾の會合をインド全土に開催すべしといふのであつた。斯くして全國的な抗議と罪業が執行されたのはインド史上に於ける最初の出來事であつた。それから間もなくバンジャブに於ける英人暴虐事件が起つて世界の耳目を衝動した事がある。インドの不安は頂點に達し、ガンヂーは「非協力運動」を活潑に展開した。人々は必ずしも之れに始めから同心提携しなかつた。却つてガンヂーの此の計畫を嘲笑する者も多くの指

導者達の間にすら無いではなかつた。然し愛蘭で、かのジンフェインが獨立獨行を唱道した時の如く人々は次第に眞剣に彼の説明に魅せられ、彼の劃策に傾聴し始めた。

ガンヂーの「非協力」といふ闘争手段の價値を民衆が識り、英の不正に對する確固たる抗争方法である事を覺り始めた。此の平和的な反逆、文明的な抗争方法は勿論政府の安定に對しては危険なものであつた。此のガンヂーの主唱せる平和的抗争は漸次民衆の心にピツタリと訴へて行つた。而もイギリスで教育を受け、西歐的な豪奢を知るガンヂーではあつたが一般民衆と同様零細な生活を欲し、大衆と接し彼等の驚くべき貧窮を察してゐた。素朴な襦袢や帽子迄も廢し、生活様式も最少限度に簡素にして此の人格と世にも人間的な靈的な教を以てしたので大衆は動かされて行つた。

#### (六) ガンヂズムスの眞髓

ガンヂズムスには宗教的な匂ひが強い。キリスト的でもあり、トルストイ的でもあり東洋的でもある。それが西洋的であり乍ら印度的な感じの強い所以であらう。その思想の深奥性と變



幻性は理解に苦しむ。中世紀的でもあれば新時代的でもあり複雑怪奇といふの外はない。現代の物質文明を否定しつゝ最近の醫術は嫌ふが舊式醫術は認める。

彼は「印度を支配するものは英國人でなく、現代文明だ。故にその文明の所産たる鐵道、電信、電話といふ印度支配の機關を呪ふ。そして醫學は惡魔の魔術だから廢止して舊式の醫學に復舊すべし」と説く。英貨排斥はするが之はボイコットでなく「スワデシ」運動の完遂だといふ。つまり「スワデシ」とは「自國」の意で比較的遠いものを措いて自己の直接周圍にあるものを用ひ、之れに奉仕する様制限する内在的精神であると説く。之を宗教と政治と經濟の分野に於て先づ實施して來た。従つてスワデシはボイコットの如く一時的な對英經濟行動でなく永久的な主義であり、一國に於ける製造品の生産と分配とを意味し、印度の現實に即すれば毎年六億ルピーの節約となり、又七十三%の農業人口に必要な副業を興へる結果となる。故に「スワデシ」は建設的プログラムだと稱する。此の場合外國品の排斥は自國産業の保護を意味するものでスワデシ主義者は外國人に對し憎惡の感情を有つべきでなく、ボイコットは英國人に物質的損害を興へ之を屈服せしめんとする一時的方便に過ぎないといふ見解をとつてゐる。

かくして「スワデシ」の實行として印度大衆に示されてゐるものが所謂チャルカ（手紡車）とカーデイ（手織の粗綿布）とである。

ガンヂーの説に従へば印度は一年に一人當約十三碼の綿布を必要とする。而も今日の生産額は僅か需要の半分にも満たない。然るに棉花の生産高は所要量を遙かに超え、剩餘は英國日本等へ年々數百萬俵も輸出され且それによつて作られた外國製品を輸入して來た。全印度にチャルカとカーデイが普及されば、農村の窮狀は救はれ綿糸布は自給自足出來、社會は淨められ婦女子の轉落は防ぎ得、乞食を皆無にする事が出來るといふ主張をもつてゐる。

然し現今の進歩せる機械文明を家庭工業へ逆行せしめる事は時代錯誤だといふ反對論に對してガンヂーは、機械文明を興して印度の富強を計らんとする事の錯覺を次の如く説明する。

「紡績業者の誰に聞いても彼等は綿布の供給に關する限り印度が自給自足の域に達するには今後五十年を要すると謂ふ。現在幾百萬の印度人が仕事がなく悲慘な境遇に哭いてゐるが之れが救濟策を何處に求めるか、而も百年前チャルカとカーデイが貧者の生存に對する保證となつてゐた事實を一考すべきだ。且つ工場工業の發達が必ずしも失業者の絶滅を意味しない事は文



明各國の實例が證明してゐる。故に印度が完全に工業化されても失業者は残る。若し農村から害悪、疫病、貧窮、流血、悲惨が除去されるとすれば、それはカーデー以外救済法はない國家の繁榮は一に村落の繁榮に依存するからだ」

斯くてガンデーの此の運動は一九一〇年頃着々と勢力を強化し、一九三〇年には全印度紡績業者協會(國民會議派の別働體團)で取扱つた分丈けでも二十萬以上に職を與へたと報告してゐる。

### (七) サッチャグラハの眞精神

ガンヂズムスの根本はサッチャグラハの眞精神が代表する。そして大體次の三者に要約し得る。

- (A) プラーマチャリン (Brahmacharin)
- (B) アヒムサ (Ahimsa)
- (C) サッチャグラハ (Satya graha)

此の中プラーマチャリンは「淨行」の義であり、物慾生活を斷ち、清淨な生活の實踐を目標とする。ガンデーはよく大事件に遭遇すると斷食を行ふが、之は「自淨」の精神に基づくもので、次第に發展して今日ではサッチャグラハの一手段として慣用される様になつた。そしてガンデーは之を次の如く説明してゐる。

「人力の及ばざる爲、斷食して神に禱を捧げる事は自分の宗教である。信仰の糧を神に覺める者は救はれ希望が與へられる。それは眞理の最後の勝利が透視出来るからだ。自分は斷食によつて自らを淨め、一切平等の無我愛を獲得する。従つて斷食によつて「量り得ざる貴重な平和」と「無限の歡喜」とを味ふが、出鱈目な斷食は思慮なき模倣として大禁物だ。そんな斷食の背景には屢々暴力さへ潜んでゐるし、無益の饑餓を意味するに過ぎない。」

第二の「アヒムサ」(Ahimsa)は不殺の意味であつて前顯「プラーマチャリン」が自己に對する道德原理とするならば「アヒムサ」は對人乃至對社會の道德原理である。佛教で謂ふ「不殺生戒」に相當し、常に消極的他殺を誠むるだけでなく積極的に萬物愛護を主張する。之れから發展せるものが、次の標榜する「非暴力」の思想である。ガンデーに従へば「世界は餘りに



もヒムサ（殺生）に充ち満ちてゐる。然し人間の道はヒムサである。非暴力は人類の規範であり、暴力は獸類の法則だ。アヒムサこそ何物も抗し得ない強力な武器であり、人生最高の至善である。非暴力の第一歩は日常生活に於て真理、人道、忍受、親切を陶冶するにある。それは理論でなく実践であり、不變の信條たるべきものである」

かくして彼は非暴力主義を徹底的に信奉し、此の方法によつてのみインドの獨立は可能されると信じて居り、暴力で獲得する獨立は眞の獨立ではないと主張する。従つて彼は國防警察に就てもその不必要を力説し、之らの施設は元來暴力を前提とするものであるからだと謂ふ。

第三のサッチャグラハは Satya（眞理）を Graha（把持）するといふ意味であり、ドイツ語では “Bestehen auf Wahrheit” と言ひ、英語では “Insistence on truth” と譯してゐる様である。共に眞理を greifen するといふ精神から來てゐる。ガンヂーの説明に従ふと「眞理は神の最も大切な名前であり實際眞理を除いて何物も存在しない。故に眞理は神なりといふ方が、神は眞理なりといふよりも一層正確である。眞理ありてこそ純眞なる知識があり、眞の知識があつてこそ常住の歡喜がある。故に神の中には眞理と知識と、歡喜とが常に並存してゐる

る事を認識する。眞理に對して献身的に奉仕する事が、我等の存在の唯一の理由だ。我等の凡ての活動は眞理に向つて集中されねばならぬ。眞理は常に言語、思想行動中に存在せねばならぬ」と謂ふ。

### （八） インド再生の原理

かくして彼は眞理の把持を宗教的信條とし、此の最高原理に則つて凡ての問題を指導する。即ちサッチャグラハは眞理を味方として世の不正不義に對抗せんとするものである。不服従も非協力もその具體的行動の現れなのである。サッチャグラハの細目的内容は、交渉、仲裁や宣傳煽動から示威運動最後通牒に迄及ぶ。最後の方法はガンヂーが既に二回に亘つて行つた所で第一回は一九二二年非協力運動を起すに先立つて當時の總督レディングに對し、又第二回は一九二二年當時の總督アーウィン卿に對して不服従運動開始のブレリユードとして突付けたのであつて、一種の英國官憲に對する條件付宣戰布告を意味する。

此の他、ストライキ、グールナ（坐込み戰術）それに前述のスワデシ運動、納稅拒否、更に



社會的ボイコット等の凡ゆる手段によつてインドを救ひ、英國的政權に代るべき新政權を樹立する事を最後の目標とする。即ち舊政權の有する一切の主權を否認して漸次之れに民族運動による壓迫を加へて行き、遂にその滅亡と解消を招來せんとする方法である。

サッチャグラハが、いつ此の段階に迄達するか、勿論遠き將來とされ、ガンヂーも亦極めて永き運動と觀念してゐた矢先インドにとつては降つて湧いた様な大東亞戦争である。皇軍の威武がその隣國ビルマ迄及び、既にインド、アッサム地方へさへいつでも波及し、ガンヂーの生れ故郷にも及ぼし得る勢を示して來ると、ガンヂーは再び國民會議派の指導權を自身掌握して回教との提携、内外インド勢力との呼應、英米軍隊の撤退要求、東條首相の聲明信頼といふ風にサッチャグラハは加速度で進行を續けてゐる。インドにかくて黎明はいつ來るか、サッチャグラハの結實はインド再生の原理として今再び世界の注目を惹くに至つた。

## 第七章 植民專制の第一段階

### (一) 初期に於ける植民地競争

英國の農奴制度が廢止されたのは十四世紀末葉で、他の歐洲諸國よりは遙かに早かつた。これは自給自足的封建社會内に於ける物資諸關係の發展に依る當然の結果であり、農奴制度の廢止と同時に商業資本は著しく發達した。英國最初の輸出貿易に於て首位を占めたのは羊毛であり、之れは特に北歐の諸國を販路としてゐた。嘗ての佛領にして現在ドイツの占領地域となつてゐるドーヴァー海峡地帯は、英國最初の植民地であつて、英國貿易が極めて有利に保護されて來たのは此の地方の爲である。英國の封建制度がその内部に於ける新しい資本主義社會の成長の爲め既に崩壊に傾きつつあつた時、佛國の封建制度——最も近い隣人であり且つ貿易の發展には最大の障碍であつた——がこれと衝突した。然し「百年戦争」の爲兩



國とも壊滅と無政府状態に瀕してつた。

英國では従来の封建貴族が既に統治権力を失ひ、農奴の反逆を抑壓する力さへなく、激しい闘争の後、新なる地主貴族が之れに取つて代つた。地主貴族とは、教會所有の土地を沒收して富を得、其の上商業方面に緊密に結びついた階級である。教會の土地は當時國內封建經濟の重要支柱を爲し、同時に他方商品生産の完全なる發展には一の最大妨害物であつたのである。中世紀封建制度の樞要支柱たるカトリック教會の敵、資本主義的生産の勃興に、新しき地主階級はいたく興を唆つたが、これより暫時の間、英國史の舞臺に立役者として活躍したのはこの階級なのである。スペイン及びポルトガル人によつてアメリカ大陸と印度航路とが發見されたのは、英國が順調に資本主義的發展を遂げつゝあつた時であり、本來の地理的條件に加へて更に新航路の便に恵まれた英國にとつて、航路發見に依る恩恵は寧ろイベリア半島の封建君主國よりも更に一層大なるものがあつた。

英國貿易會社は背後に公然と國家の援護を受けつつ、スペインの貿易に對抗し、海賊の如き侵略を企てると共に、此の植民地を容赦なく掠奪し始めた。兩國のこの闘争は極めて激烈

となり、その犠牲として最も災厄を蒙つたものはアメリカの土着民であつた。英國とスペインの飽くなき蠶食と搾取とは彼等を奴隸的地位に引下げ苛酷な勞役を強制した。かくて遂に兩國間の闘争は公然たる戦争となり、比較的封建的障碍の少かつた英國は優位なる海軍を以て、スペイン軍を海上に打破つた。間もなく、北米の東岸とアフリカの西岸とに、英國最初の植民地が貿易の足場として設定された。十六世紀末から十七世紀初めに到ると、英國貿易は新なる方面に發展し、アフリカ及び西印度の黒人奴隸を相手として莫大なる利益を擧げた。ニグロ族は總て誘拐されアメリカ及び西印度に賣られて、砂糖島と煙草島に於て勞役を強制された。この間、スペイン及びオランダを敵とする戦ひは絶えず、英國はスペインを度々の海戦でひどく傷け、遂に一七一三年スペイン植民地に於ける奴隸賣買の獨占權を獲得した。ブリュッセル及びリヴァプール等の都市の富と繁榮は、この奴隸賣買の利益に依つて築かれたものである。奴隸賣買は十九世紀の第一四半紀まで、即ち英國に於ける工業資本主義の發達の結果、奴隸勞働が従前ほど収益を擧げず、アフリカからの奴隸の輸出がさほど有利でなくなる頃まで繼續された。且又、この頃南米に於けるスペイン帝國は崩壊に瀕し、國內は革



命の巷と化して、爲に英國は最上市場の一を失つたのであつた。工業資本主義の發達を可能ならしめた時の資本の原始的蓄積の大部分は、奴隸貿易の収益に據つたものである。十六世紀末より十七世紀初めに至る二世紀間、イギリスのブルジョアジーは、アフリカ土人の極度の苦難と奴隸貿易に於ける競争國との不斷の戦争とを踏臺として、尨大な富を蓄積した。十八世紀の半まで、貿易資本は主として、大西洋を舞臺として活躍した。大西洋の波に岸を洗はれる國々——イギリス、フランス、オランダ、スペイン、ポルトガル——は總て、歐洲、アメリカ、アフリカの三大陸に圍繞せられたこの大海の覇權を目指して互に相争つた。

英國にブルジョア革命が起つたのはこの時代である。一六四二—四八年英國都市ブルジョアは、貿易に興味を有つた進歩的貴族を味方とし、他方農奴と都市市民達の積極的支持の下に、封建制度と最後の決定的運命を争つた。ブルジョア革命とクロムウエルの獨裁は資本主義の自由發展に路を開いて、英國は對外競争に一段と有利な條件を與へられた。斯様なブルジョアジーに多少とも類似したものはオランダにも在つたが、彼等は生産よりも寧ろ貿易に資本を注ぎ込み、且つ隣國英國に比して弱國であつた。クロムウエルは執拗に海に戦を仕掛

け、遂にこれを打破つて了つた。クロムウエルに依る侵略的ブルジョア獨裁は次に西印度の主要島嶼を植民地化し、北米東岸の植民地の強化發展に努めた。それより、恐るべき苛酷手段を以てアイルランドを侵略し、革命的ブルジョア軍隊は全都市の住民を一人残らず盡殺した。アフリカの西海岸には奴隸賣買の爲の足場が漸次増加して行つた。國內の敵たる封建勢力の打倒に成功したブルジョアジーは、轉じて贅澤品食料品を供給すべき植民地と新市場の獲得に食指を伸した。アメリカからは食料品、毛皮、煙草、米を輸入し、西印度からは砂糖アフリカからはアメリカ及び西印度植民地で働かすべき黒人奴隸を輸入した。アイルランドは尨大な領地に區分して、英國地主が横領し、又土地を奪はれた農奴は荒地と共に饑餓に瀕して行つた。クロムウエルは軍隊に對する配慮も忘れなかつた。兵卒の多くはアイルランドの農奴より奪取した土地に「移住民」として住まはせ、軍隊中最も革命的なる者——農奴及び都市貧困者の出身は「反逆者」の名を被せてアメリカ及び西印度へ奴隸として輸送した。

## (二) 東印の政策と印度社會組織の破壊



東洋との貿易は遠く一六〇〇年、當時印度及び其他遼かなる東洋の未知の國に於ける貿易獨占を目指し形づくられた「商人冒險隊」によつて始められたものである。印度の西海岸サライト (Sarat) 及び其他の地に商館又は貿易の足場を設定すると共に、地方の貴族や士侯との取引を初めた。當時印度は國力強く、外國の侵略に備へる充分の手段を有してゐたから、これを植民地化する様な問題は起りようが無かつた。が英國商人は間もなく、同じく印度と交易せるポルトガル、オランダの商人と此處でも抗爭を初めた。鬭争は放火、虐殺等あらゆる手段に訴へられ、双方ともに印度貴族を紛争に捲き込みとあらゆる剽策を廻らした。

一六八五年、印度政府は東印度會社に宣戰を布告し、同會社に所屬する商館の大部を閉塞した。東印度會社はこれに屈せず、活動に一層の拍車を加へて新規の貿易要路、要港を開拓して行つた。その中には後年流石に重要港となつたカルカッタの如きさへがある。それとともに十七世紀に於ける印度の英國領は尙數マイル平方を出でなかつた。然し、ボンベイとカルカッタの二大要港は當時より英人の手中にあり、而もこの兩港による貿易は莫大なる收益を擧げ、これに參與せる者は當時既に巨萬の富を蒐めつつあつた。

十七世紀に於ける貨幣經濟の發展並に各地方に於ける地租の現物徵收を銀徵收とする制度に改變を行つた事は印度の經濟に恐るべき危機を齎した。そしてこの一世紀間に地租は殆ど倍加せられ、商人と金貨は急に勢力を得た。農民と職人は四方から壓迫されて疲弊した。外國貿易資本の侵入は印度を世界市場と化しつつ、十七世紀の印度封建社會の無政府狀態を激化するのみであつた。

モーガルス (Moguls) の封建帝國はマラッタ黨 (Maharatta Confederacy) の如き強力な反亂の勃發に先立つて崩壊し初め、彼のシク (Sikh) の亂を初めとして諸所に起つた農民一揆の爲め急激な没落過程を辿つた。これを見た英國は、自國の利益のため、この機會を如何に利用すべきかを賢くも悟つた。かくて印度の内亂がまさに封建國家を内部から揺がしてゐる時、同時に一方に於て印度の制霸權を目指して英佛間には激しい戦端が開かれてゐた。東印度會社の役人達は極めて巧妙にかの「分離して支配せよ」の原則を早くも應用した。而もこれは其後世界周知の如くあらゆる英國の政策の基本となつたものである。

フランスはやや時期遅れて印度に登場した。そこでアルジョア革命の經驗とアルジョア國



家の完全なる援護てふ二大條件に恵まれた英國に美事勝を制せられて了つた。かくて一八一五年には、印度の大部分は英國植民地と化してゐた。

印度は英國アルジョアジの手先たる東印度會社の軍隊に征服せられて、一層混亂の極に達した。勿論印度が征服せられて無政府状態となつたのは、これが初めてではない。従來も屢々左様な運命に遭逢してゐる。然し此度の征服は既往の例とは全く趣を異にして、その生産方法にしてからが先づアジア的封建制よりも一層高度の制度に立脚し、而も高度の文化を所有する民族に依つて爲されたのである。英國に征服された結果、印度社會及び舊い村落協同制の經濟的基礎は容赦なく破壊され、而も殘存せる封建的榨取組織は、容赦なく利用せられた。東印度會社はこの破壊作用の立役者として英國アルジョアジを富ましめたのみで、反面印度の生産力の増加といふ方面には何等の力も藉さなかつた。然し乍ら英國アルジョアジの出店たる東印度會社は、あらゆる暴虐の限りを盡したが、其後印度社會内に勃發した革命の責は免れ得なかつたのである。

此の點に關し印度社會の經濟的統一及村落協同制度の破壊を説明して餘す所なき古い文

献として一八五三年七月廿五日所載のニューヨーク・トリビューンには斯う論じてゐる。

「これら同形の群小社會機構を消滅に導いたものは、英國軍隊とその苛斂誅求カレシチウキョウと言はんより寧ろ英國の蒸汽機關とその自由貿易とであつた。かの家族協同制は家内工業即ち絲車と手織機械と鋤鋏との結合に依る特殊の自給自足經濟に立脚してゐた。英國の干涉はランカシヤに紡績機を、ベンガルには織布工を据えて土着の織布者と紡績者を驅逐し、その經濟的基礎を破壊する事に依つて、これらの小規模なる半未開の協同制度を解消した。これはアジア未曾有の社會的革命であつた。ヒンドスタンに社會革命を齎したイギリスのこの行爲は利益を趁ふ卑劣なる意圖に出でたものであり、その手段は愚劣であつたが之は問題ではない。眞の問題は之等アジアの社會状態を根本より改革する事なくして人類はその運命を全うし得るや否やといふ事である。

若し否とせば英國の罪惡はともかくとして、その行爲はかの改革を齎らす上に於て歴史上無意識の一役を買つたものと看做すべきである。」と。



### (三) 東印會社の創案せる土地制度

この革命は東洋の封建社會に西歐資本主義を移入して、從來の社會形式を破壊し、新なる諸階級を創造し、その他種々複雑なる諸狀勢を齎した。これを目して英國の辯護者達は、英國は印度に文化を齎したといふ。即ち工場、築港、鐵道、舗裝路、灌溉施設、學校、大學、裁判所及び中央集權的警察權等々を指して云ふのである。如何にもこれらは封建制度よりは一層高度の進歩的社會制度を代表する。然し乍ら、この進歩には限度があり、やがて不自然なる狀態から、一の限界に達する時機が来る。換言すれば、植民地に於ける資本主義が農民の封建的搾取方法を持続する間は生産方面の工業化が人爲的に制限される事になるから、一頃西歐資本主義の勃興時代に見た様な進歩的形貌は殆ど認められないのである。新規なる階級や生活資料の創造、事業の集中化、秩序（資本主義發展の必要條件である）の設定等は一の革命には相違ないが、これが進歩の爲には、殆ど有史未曾有の苦難と流血の慘が一方に於て犠牲とされねばならぬのである。

英國的觀點からすれば、この社會革命、即ちアジアを世界市場の舞臺に上せ、その經濟組織を破壊する事は掠奪と殺戮の方法に依つてのみ達成し得るのである。十八世紀から十九世紀にかけて東印度會社がベンガル其他の地域に於て爲した事は純然たる略奪行爲で、手當り次第掠取し得る富を何の代償も無く本國へと輸送したのであつた。純朴な民は同會社の收稅吏に掠奪され、從來の封建貴族は裸にされた上屢々クライヴ、ヘースチング等の高級官吏に殺された。

かやうに印度から掠め取つた獲物はアフリカの奴隸賣買と共に英國ブルジョアジの富の主要源泉となり、これあつたが爲にこそ英國は工業革命の遂行と近代資本主義的工業生産とを達成し得たのである。

十八世紀末から十九世紀にかけて、フランスを追拂つたイギリスは、印度新植民地の組織更へに着手して、農民の搾取權を直接英國政府とその代理者との掌中に收め得るやう、從來の土地所有制度に改革を施した。だがこの「土地革命」こそ人民の手から土地を奪取する狡猾なカラクリであつた。



つまり尨大なる國家收入は本來土地から徴收されてゐた。一體印度に於ける土地保有には種々なる様式があり、これらについては世上概ね説明されてゐるから爰ではチェミンダリー (Zemindaree) 並にリョートワー (Ryotwar) 制度につき概略的説明を加へてみよう。

チェミンダリーとリョートワーは相互に背反する制度で、いづれも英國法令に依る土地革命によつて生れたものである。前者は貴族的であり、後者は民主的である。前者は英國の地主制を戯化せるもの、後者は佛國の農民土地保有制を改悪せるものとも云ふべく、兩者共に甚しく矛盾せる制度である、即ちこのいづれも、土地を耕すところの人民の爲に作られたものでもなければ、その所有主の爲めに作られたものでもなく、實にこれに課税する政府の爲に作られたものである。

チェミンダリー制度によつて、ベンガル州の人民は從來保有せる土地に對する權利を剝奪され、この權利はチェミンダリーと呼ばれる土着の收税吏に移讓された。リョートワー制度はボンベイ及びマドラス州に施行されたもので、土着の貴族はその地位を人民と同等にまで引き下げられ、從來の領土は甚だ縮少せられて一片の田畑となり、これを自ら耕作して收益

を東印度會社の收税吏に收めるのである。然し乍ら奇妙な事に英國の地主に似たチェミンダリーは、その徴集する地租の十分の一を自らの收入とし、残りの十分の九を政府に收める。又佛國農民に似たリョートワーは、土地に對して何等恒久的權利を有せず、毎年收獲高に應じて適宜徴收される。從來土地を所有してゐたチェミンダリーは、代々世襲の權利を剝奪された前土地所有主から強慾に税を取り立てはしたが、間もなく東印度會社の壓迫に堪へ切れずして漸次消滅して行つた。其後を受けたのが貪慾な山師商人達であつた。彼等は今日尙ベンガルに於て政府の直接管理下にある此外の土地を殆ど全部領有してゐる。この山師達はパトリー (Patree) と呼ばれる種々なチェミンダリー・テニユアー (Zemindaree tenure) を案出した。即ち英國政府に對し所謂仲介人的位置に置かれる事に満足せずして、バルネタ (Palnetas) と呼ばれる仲介的階級を自らの下に創造し、バルネタは又その下に副バルネタ (sub-palnetas) を作るといふ工合に順次下方に諸階級が形成されて行つて、これが遂に梯形を成すミドルメンの一體制を形成するに至つた。つまり土地賃借人の下に轉借人がありその下に幾重にも再轉借人が作られて行つた理である。農民はこの下に打拉がれて過重の壓



迫に呻吟した。マドラス及びボンベイに於けるリョートワー制度は間もなく疲弊して一種の強制耕作状態を呈し、土地は全く價値を失つてしまつた。だから當時ベンガル地方では、納税不可能の場合は收税吏が容赦無く土地を賣却したが、次第にそれさへも稀であつた。といふのは第一買手が無くなつたからだと言はれてゐる。

以上の如くベンガル地方では、英國の地主制度、アイルランドのミドルメン制度、地主を收税吏に轉せしめるオーストリア的制度、及び國家をして眞の地主たらしめるアジア的制度等々が相混錯して存在した。マドラス及びボンベイに於けるフランス流の土地所有農民は、同時に農奴であり國家の半折小作人であつた。斯様に複雑な地位に置かれて、而も彼等は何等の報償も望み得ない。

高利貸には虐められ、且つ土地に對しては何等恒久的の權利を持たないしこの點フランスの農民と同様である。其上農奴と同様に強制的に働かされ而も農奴の如く食を保證されてはゐない。收獲も國家と分割する點に於ては半折小作人である。元來半折小作人に對しては國家は資本貸與を爲すのであるが、この場合國家はそうした義務も負はない。マドラス及びボン

ベイのリョートワー下に於ける如く、ベンガルに於てもチェミンダリーの下に、リョートワーは貧窮の極に喘いでゐたが、而もこれが印度全人口の十二分の十一を占めてゐた。もしその慘狀がアイルランド農民のそれに達しなかつたとすれば、それはひとへに氣候の故であつたらう。溫暖な南國の住氏は北國の住民に比して生活が簡單だからである。

以上要するに、英國は印度の封建的土地制度を破壊し、地主を放逐し、資本主義國に於ける土地革命の如く農民を封建制度から解放する事にとめずして、却て地主の領地に賃銀労働者として縛りつけ、或は農奴同様に取扱ひ、多數の地主までも農民と同様の位置に墮落して了つた。東印度會社の創案にかかるとこの土地制度は、印度の大部分に互つて今日尙施行されてゐる。パンジャブ (Punjab) 地方に其後行はれたる「農民保有制度」の如き改革案については更に興味深きものがある。

東印度會社は毎年巨萬の金銀塊を本國へ送つた。印度民衆の搾取の贈物である。これらは總て株主のポケットに、或はロンドンに於ける尨大な官僚政治の維持費として、官公吏の年金に、武官の訓練費に、或は東印度會社が印度に置いた軍隊の爲に用ひられたのである。



#### (四) 勅許による貿易獨占

東印度會社を筆頭とする獨占貿易會社は、英國資本主義發達の初期に於ける植民政策の基礎であつた。これらの會社は各植民地に於て貿易の獨占權を與へられ、國家の強大な支持を受けて、時には單獨に軍艦と兵隊を所有する事さへ許された。

英國政府の目から見れば、植民地は單に白晝掠奪の對象に過ぎなかつた。この考へ方は、北米の如く殆ど英國人のみが居住し始めた植民地にさへも適用された。英國政府はその植民地に工業的企業を一切許さず、又他國との貿易を嚴禁した。アメリカに於ける英國植民地の人民は、その商品は總て英國船に積んで英國にのみ輸出し、あまつさへ本國政府に對して高い税金を支拂はねばならなかつた。アメリカ植民地に發生しかけた若きブルジョアジエは、かく本國の壓迫を受けつつも、未踏の西部方面に自由なる國內市場と無限の機會とを惠まれた爲め、これによつて資本家的擴張を大いに助けられ、間もなく驚くべき實力を備へるに至つた。これが即ち一七七六年の革命を齎して、美事英國軍に戰勝して建てたのが即ちアメリ

カ合衆國である。

英國資本家はアメリカの革命から大いに學ぶ所があつた。本國の過剩人口を移住させて作つた植民地では、當然本國よりの土産として資本主義的生産關係が維持せられる。そこで、植民地のブルジョアジエには資本主義的發展の路が開かれるわけである。これに反して、他民族を英國が統治する植民地に在つては、搾取は資本主義前の形態即ち封建的様式を踏襲して更にこれを強化し、一層極度に民衆を奴隸化する事によつて、土着のブルジョアジエは、資本主が自由なる發展の路からは排除されて了ふのである。

アメリカ植民地を失つた事は英國には相當な打撃であつたが、それは印度の征服に依つて償はれた。要するに大略一六〇〇年より一八〇〇年に至る迄の初期の英國植民政策は、文字通り純然たる掠奪的政策であつた。植民地とは、英國の商人階級が急速に富を得る方法として、貴重なる生産品や贅澤品を搾り出すべき源泉であると目された。故に資本主義の初期、原始的蓄積時代に於ける植民政策の根幹を次の如く要約してゐるマルクス流の酷評には若干の嚴正な批判の餘地は認められるとしても一面の眞理を包含する。



「植民政策の影響を受けて、商業と航海術とは温室の果實の如く成熟した。國家に依つて公認された會社は、資本の集中化を促進するに有效なる道具であつた。各種製造業の勃興に對して植民地は市場を提供し、この市場の獨占は資本の蓄積を促進した。歐洲外の土地に於て直接掠奪、民衆の奴隸及び殺戮に依つて獲た貴重品は、山の如く本國に輸送され、其處で資本に轉化された。今日では工業上の優越は同時に商業上の優越を意味する。これに反して所謂一般製造業の時代にあつては、商業上の優越が即ち工業上の優越を意味した。この故に、當時にあつては植民制度が重要な役割を演じた。この制度は「奇妙なる神様」として、ある時古い歐洲の神々と共に睦じく祭壇に上つたのであるが、その後、手も無く歐洲の神々を芥箱に叩き込んだ。そして、剩餘價値の製造こそ人類が唯一究極の目的なりと託宣した。」

(資本論第一卷の一、八三五―八三六頁)

換言すれば、資本主義は初期重商時代に東洋の封建國家を掠奪し、掠奪物の上に豊滿なる工業主義を發達させ、これを以て後日、一層強力なる西洋の封建制度と運命を争ふべき武器と爲したのである。

## 第八章 工業資本主義と英國的植民政略

### (一) 新植民政策

工業資本主義時代に入ると共に植民政策は面目を一新した。近代的資本主義社會の創造主英國の産業革命は略一七六〇年に初り、英國産業界がほゞ資本主義的工業化の過程を完了したのは一八五〇年であつた。この時代には、新なる工業資本家層が政治的權力を掌中に收めんとして、當時の支配階級たる地主と商業資本とに挑戦した。これまでの舊い保護制度が新なる原則、自由貿易に道を譲つて、獨占會社は廢止され、自由競争がこれに取つて代つた。

英國は工業生産の世界的獨占國となつた爲め、他の諸國は止むなく工業品を英國より買はざるを得なかつた。而して自由貿易政策への移行は全く英國アルジョアジの根本的利害關係から指令されたものであつた。英國はかくて「世界の職場」となつた。各國へ向けて何の妨害も受けずその商品を賣り出し、相手國からは食料を受取つた。この状態は約一八七〇年